御所願成

めつらしう雨ふる、廿九日、けさまて御とゝ尋ゆるゝ〳〵とおる、御さよくゆんさやうしゆ、めてさし〳〵、御さゝ月ゐいる、

百貫文ヲ懸ケテ高岡某ノ首ヲ求ムニ初瀬ニ榜ヲ掲ゲ

二十八日、乙未、大和高岡某、春日若宮社領同國宇賀志莊ニ亂入ス、興福寺、榜ヲ掲ゲテ之ヲ捕ヘシム、

〔大乘院寺社雜事記〕二八十　七月廿八日、

一若宮拜殿料所宇多郡宇賀志庄事、芳野之高岡亂入、緩怠子細有之間、高岡之頸ニ料足百貫文懸之、其高札今日初瀨邊ニ打之、仕丁丸下向云々、隨而此札事、可防禦之由、御下知長谷寺執行之條、可目出旨、學侶書狀彼仕丁丸持來之間、則相副定使、成奉書了、嚴密之集儀、殊以珍重々々、彼庄代官事、高岡押而致所望、直務之在所之間、不可叶旨、拜殿申之間、致亂入了、以外之惡行也、拜殿食事方料所也、如此違亂有之間、止食事云々、珍事々々、尤可及嚴密之沙汰事第一也、

高岡某代官タランコトヲ望ミテ得ズ

卅日、

一長谷寺高札事、防禦難義之由、一山申、仍彼札持歸了、今日又爲學侶被下之、押而可打之、學侶書狀同遣之旨申間、重而其子細以定使仰遣之了、學侶書狀共供目代之自筆也、以外次第不可然事也、雅意至歟、神慮可恐々々、

長谷寺ニ高札ヲ掲ゲ

閏七月朔日、

一長谷寺高札事、不可有子細旨、領狀、執行御請到來、則以仕丁丸遣供目代方了、高岡之頸料足事、四門札同打之云々、

高岡某愁訴スルニ依リ高札ヲ下ス

三日、

一就長谷寺事、學侶畏入之由、集儀之書狀到來了、

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十月廿七日、

一自學侶書狀到來、芳野高岡名字并高札事、自明日可下之之由云々、色々歎申入故免除也、拜殿領違亂故也、

三十日、酉、幕府、山城勸修寺僧常林ニ、其所領ヲ安堵セシム、

〔勸修寺文書〕三〇山城

勸修寺常林申、田地壹段屋敷并重書等事、就參貫五百文之借錢、遣置慶珍比丘尼之處、慶珍死去後、拾取彼文書田地等、數年押領云々、言語道斷次第也、爰道德入道相語澤野井三郎兵衞尉依申子細、爲糺明可出帶文書正文旨、及三ケ度、雖被相觸之、無音之上者、以違背篇被裁許訖、早退彼等妨、文書同敷地以

下如元可全常林領知、於彼重書者、縱雖令拘惜、有以後出帶之輩者、可被處其咎之由、所被仰下也、仍下知如件、

文明十四年七月卅日　加賀守三善朝臣（花押）（假尾清房）

沙彌（花押）（清貞秀）

〔親元日記別錄〕下

一勸修寺常林（飯加）同日、（文明十三年十月十七日）

屋敷并田地一段事、借物三貫五百文之處、五貫五百文之由申掠、道德相語雜色五郎右衛門違亂云々、（近日又相語澤野井三郎兵衛云々、）

合飯與三左（文明十四六七、）

信濃千野某、保科貞親等、諏訪繼宗ト兵ヲ構フ、諏訪政滿、千野某等ヲ援ケテ兵ヲ出シ、同國笠原ニ戰ヒテ、繼宗ヲ破ル、

〔守矢滿實書留〕○信濃　伊那保科（貞親）子（千野カ）共、連々就緩怠、信州背御意、大祝（諏訪繼宗）殿千野（諏訪政滿）入道高遠御越有テ、彼面々訴訟御申候ヘ共、不叶候間、保科千野同道シテ被歸候、藤澤（金井）殿千野同心、初七月廿九日、千野、保科其外親類引率シテ出陣有、藤澤殿同心有、同晦日丁酉同酉剋、笠原ヨリ信州三牧笠原同心ス、合戰爲藤澤千野打勝、神二郎（政實）十七才當手先懸ス、栗毛馬ナリ、三ヶ所切取、自刑部（政綱）御保（美）、御使三度迄神二郎方ヘ御悅、御使者預滿足申候、外見外聞面目打起候、刑部樣ハ無御出陣候シ、千野殿ヒ當方勢六十騎同心ス、

八月七日、栗木田藤澤城保科取候、當方合力シテ被踏居候、

是月、甘露寺親長ニ輕服觸穢ノ侍臣宿番ニ候スルコトヲ諮ハセ給フ、

〔親長卿記〕十三　七月十九日、晴、○中略

先日仰云、件日忘却之間、依思出書入也、

輕服之輩宿番、祇候別殿不可苦歟、

予申云、先々祇候別殿、雖然曉鐘已前退出歟、

丙穢之輩、依別勅祇候如何、

予申云、非神事之日、依別勅參仕先規存之、但不宿仕也、

朝倉氏景、馬ヲ畠山義就、古市澄胤、越智家榮ニ贈ル、

〔大乘院寺社雜事記〕二八十　七月八日、

一龍興院之代官窪轉經院、自越前罷歸了、○中略自朝倉方ハ兩畠山、細川以下諸大名旁禮共申之、河內合力事ハ不及其沙汰事也云々、新衞門虛言也、

貞親藤澤城ヲ取ル

廿一日、夕立、

一兵衛佐幷石左衛門、自越州罷歸之由聞了、

一楠葉新衛門同罷上、古市、越智、河内以下へ馬共上之、朝倉沙汰也云々、

執筆宸筆

三首通題人數

閏七月 小 戊戌 盡 戊朔

一日、戊戌、御祝、連歌御會アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三 御湯殿上日記　後七月一日、御いもひいつもの　さとし、ふしみ殿より、めてささ御つゝひよて御申、〔略〕中夕ゝさより御連歌御ささあり、宮ゝ御ゝさ、中院、〔通秀〕そちいゝり御人も、〔室町天皇教忠〕

〔塵芥記 十輪院内府記〕〇内閣記 錄課所藏　後七月一日、參小番、〔略〕〇中及晩被召帥等御連歌、宮御方御出座、彼是四人也、執筆被染宸筆、及天明事終、

中院通秀ヲ召シテ、拾遺和歌集ヲ御校合アラセラル、

〔塵芥記 十輪院内府記〕〇内閣記 錄課所藏　後七月一日、參小番、參御前拾遺御校合、主上、余、

三日、庚子、義尚ニ生花ヲ賜フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三 御湯殿上日記　後七月三日、おかし、（ことかるゝことあし）大納言殿へ御さて花ゐいらるゝ、

義尚、三首題ヲ公卿及ビ近臣ニ頒チテ、之ヲ詠ゼシム、

〔後法興院政家記〕七　閏七月三日、庚子、晴、晩景雨小下、〔略〕〇中晩景自大樹以使者給三首題、風前薄、深更鴈、寄里旅、トヲリ題也、人數注折紙、仍加奉、下宮、聖護（道興）

院、青蓮院（尊鎮）、實相院（增運）、三條左府（實量）入道（大炊御門信量）（一條冬良）、前内府左大將（武家衆）（二條宣忠）、海住山大納言（高清）、按察（廿禪寺親長）（三條西實隆）、侍從中納言（公倉水鑑）、藤宰相（公泉政餘）、侍從宰相（公泉政餘）、姉小路宰相（基綱）、右衞門督（公泉長俊）、尚氏（大館）、政行（伊勢）、貞賴（星野）、政茂、

五日、壬寅、未明小雨灑、三首和歌進大樹、書短尺、人々如此云々、

十二日、己酉、時々雨下、去夜之一座申出之令書寫、人數十五人、以上三首天也、

〇十一日、義尚公卿及ビ近臣ヲシテ、二十首和歌ヲ詠ゼシムルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔後法興院政家記〕七　閏七月十一日、戊申、時々雨下、雷鳴一兩聲、入夜亥剋、自大樹賜廿首題、今夜中可詠進云々、每日寫經窮屈之處、如此儀連續、頗迷惑也、可詠進之由令返答、寅半剋令詠進、書短尺、人々此分也、

甲斐某等加賀ヨリ越前ヲ襲ハントス

越前一乘谷朝倉氏景第火ク、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　閏七月十二日、

一去三日晝八時より、朝倉館一乘大燒亡、自火也云々、隨分者共燒死云々、但屋形並朝倉城ハ無爲云々、甲斐方屋形以下牢人、自加州又可打入之由、近日支度云々、

五日、壬寅、信濃諏訪神社緣起ヲ叡覽アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　後七月五日、侍從中納言（三條西實隆）せゝれゑんきもちてしこうまて、御らんきらるゝ、

伯耆山名政之、同國圓福寺、瑞仙寺及ビ其末寺領ノ段錢、棟別等諸役ヲ免ズ、

〔瑞仙寺文書〕〇伯者

伯耆國久坂村圓福寺並□（瑞）仙寺諸末寺領以下、御敎□（書カ）公用等段錢、棟別、大小諸□（ハカ）事、寺領中諸職人役等、所奉免除也、若爲子孫有□（背カ）此旨輩者、可爲不孝也、□（然カ）間彌專勤行、可被全執務之狀如件、

文明十四年潤七月五日　　政之（山名）（花押）

住持

御生母花山院兼子

御劔ヲ賜フ

六日、癸卯、第三皇子（仁尊）、降誕アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　後七月七日、夜中程より出居よりて、上（花山院兼子）らぬの御さんせるゝまて、ひろ宮は御さんしやうのよし御申まて、御ふくとりまゐいらきらるゝ、やゝて御ちの人ゐいりさまふ、御まくらまおろるゝ御ぎんゐいらきらるゝ、とりあゝゐいらきらるゝ上らぬまて、ひ

義尚ノ御祝ニ献ジ所ノ剣馬ヲ加持ス

七夜ノ御祝

むらしれとうゐんとのゝ新大納言殿よりゐいらさきらるゝ、めてさし〳〵、けさやうて大納言殿より御むま御さち、てんそう御つゝひよてゐいる、これをゑやうをん院とのへ御うら御ゝうゑやうよつきてゐいらせらるゝ、御ゑうちやく御申、御さいの御方より御ふゑよて御申、むろまち殿よりを御ふみよて御申、そのゝゝおとこさち申さるゝ、

八日、々ふも御れ寿とも御申、ゑやうをん院殿まいり、御さちゐいる、御さん所へも御ゝちゐ御ゐいり、

九日、雨ふる、けふを御を寿申さるゝ、

十二日、御さん所よりけふれ御いを寿とて、とりのこ一折、御ひら一をり、一ゝゐいる、御ゝさの御連歌をてゝのち、御さゝ月ゐいる、宮の御方ゟしみ殿ゟとも御ゐいりよて、御ひし〳〵れ御いを寿めてさし〳〵、

十五日、雨ふる、くをちやうより、をゝ宮御さんしやうれ御めてささとて、文よてまつ御さちゐいる、

十六日、○中略御さん所より折二ゝう、御さる一ゝゐいる、

十八日、夜ふる、御さん所よりをたゐいる、

忌明ケ

田中生清太刀ヲ献ズ

資益王太刀ヲ献ズ

御産所ハ花山院政長第

八月五日、けふゐ御さん所れ御いみあゟよて、御さるゐいりて、御いを寿あり、大をもし御ちの人を、御さん所へ御ゐいり、りのゝゝない〳〵のをとこさちも、ゐいらせさまふ、をんしれ御をいをる〳〵となりて、御さゝ月ゐいる、

十四日、雲ゟゝより、をゝ宮御さんしやうれめてささとて、御さちゐいる、

〔親長卿記〕 十三

院大納言姉妹、参内賀申入了、

後七月七日、雨下、今日當番相博、今暁若宮御誕生、上臈局腹、花山

十四日、晴、参賀御産所、七ヶ日斟酌了、

〔資益王記〕

閏七月七日、遥拝、昨夜皇子御誕生云々、依参内、下姿、以民部卿可申入、中將今朝番退出以前申入云々、参御産所花山亭申入、則花山門外ニ出見参、進御太刀、先々更不及其儀、而ニ甘露寺ニ相尋之處、可進之由申間、進者可然之由申間、召寄持参候、

〔長興宿禰記〕 下

閏七月七日、甲辰、晴、今日禁裏御思人花山院大納言政長卿妹、平産、男子御誕生云々、御産所花山院第当時中御門室町也、

〔皇親系〕 七

遺跡ヲ元長ニ給ス

〔後土御門院――〕

〔仁悟親王〕

（藤原愛子）母同上、文明十四年閏七月六日生、明應七年落飾爲僧、名仁尊、住圓滿院、尋爲親王、後改今名、敍二品、永正十二年閏二月十二日薨、年三十四、贈一品、

九日、丙午、攝津守護細川政元、守護代藥師寺元長ヲシテ、茨木某一族ヲ殺サシム、

〔大乘院寺社雜事記〕（八十二）　閏七月十二日、

（去九日）一攝州伊ハラ木自害、自屋形下知云々、（兄弟父子以下六七人云々、）不知子細云々、近日官領陣取之在所也、藥師寺備後（元長）所行也、

一伊場ラ木去九日藥師寺備後守爲所行責敎了、兄弟父子以下六七人自害了、一亂以後、彼者致緩怠之間、彼闕所一段備後給之了、然而又此間無爲之計略安堵分也、猶以爲備後所行如此致其沙汰、備後守護代事不承引、失面目事、彼等之所爲之故也、

十日、己未、聯句御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕（甲二十三、御湯殿上日記）　後七月十日、（ふる、）御連くあり、れん

遺濟難澁セバ代官職ヲ改ムベシ

惡黨德政ヲ企ツ

きゝんせう御ゐいり、

十一日、戊申、幕府、前主殿頭壬生晴富ノ請ニ依リ、寮領安藝入江保代官毛利弘元ヲシテ、其年貢ヲ究濟セシム、

〔壬生家譜〕（中）　晴富　同（文明）十四年閏七月十一日、前官長者晴富申、主殿寮領藝州入江保年貢事、度々被成奉書之處、去年以少分致其沙汰條無謂、速當年分並年々未進等、嚴密可致究濟、猶以有難澁儀者、可被改代官職之由、被仰出毛利少輔（弘元）大郎、

十三日、庚戌、幕府、東寺ヲシテ、寺領ノ民ヲ諭シ、凶徒ニ黨セザラシム、

〔廿一日方評定引付〕（五、山城）　同（閏七月）十四日、

一昨日、十日、三自所司代以兩使申云、近日惡黨等德政之儀可取立旨其聞候、仍爲公方樣堅被仰出候、寺家境內幷當國之寺領等、堅可有御成敗候、萬一不隨寺命者候、早々可有御注進候、不可有御由斷候、今日惡黨三人被切候由申聞、披露之處ニ、衆議云、早々境內並諸庄、可被相觸旨治定畢、

〔塵芥記（十輪院內府記）〕（○內閣記錄課所藏）　後七月十三日、無事、所司代盜人三人於六條河原誅之云々、

政長ヲシテ義就ヲ討タシム

政元退陣上洛セントスト云フノ噂傳ハル

十四日、辛亥、義政、誓書ヲ畠山政長ニ遣リ、同義就ヲ宥免セザルコトヲ約ス、

〔長興宿禰記〕下　閏七月十四日、辛亥、晴、盃盃（酌カ）之儀如式月致沙汰輩、世間在之、人々詣東山六堂人等在之云々、不足信用事也、後日聞、是日室町殿准后、自筆御内書被下遣畠山左衛門督管領、陣所、攝州、敵同右衛門佐義就加退治、不日可令上洛由、被載御誓文詞、金吾美目無比類云々、此事細川九郎（政元）爲合力相伴進發之處、近日同意之儀異變、可有上洛歟之由風聞之間如此云々、御書案見及之間、寫左、

御使伊勢上野介持向陣所、攝州、

義就事、彌不可許容候、八幡大菩薩照覽候へ、此之趣更不可有相違候、不日加退治上洛候者、可爲本意候也、

閏七月十四日　御判

畠山左衛門督殿

越智家榮千餘貫ヲ幕府ニ進メ義就宥免ヲ請フ

〔大乘院寺社雜事記〕二　八月十一日、

一傳聞條々、

官領出陣ニ付テ、爲御使伊勢守可有下向之由、色々計略、奉行令上洛、雖申之、不可得歟云々、河内屋形御免事、色々越智（家榮）申入之、料足千餘貫京上、定而

義尚及ビ生母日野氏義就ヲ援ケントス

伊勢貞宗義就征討ヲ義政ニ執申ス

〔大乘院寺社雜事記〕三　十二月廿二日、

一新將軍、御臺樣、右衛門佐可有御扶持上意也、仍近國共同心也、長谷御所ハ伊勢守申沙汰候故、併右衛門佐可有治罰之由被仰付之、然則御父子御中御覺悟大ニ相違也、仍明春早々勢州可有治罰之由、內談必定云々、細川河內申合云々、京都今一度ニ可滅亡云々、驚入歎入、迷惑可爲如何哉、世間浮說爲後日記之、

○政長、細川政元等ト、畠山義就及ビ其與黨ヲ河內攝津ニ擊タントシ、兵ヲ率井テ京都ヲ發スルコト、三月八日ノ條ニ、政元、義就ト和シ、京都ニ歸ルコト、七月十六日ノ條ニ、政長、攝津ヨリ和泉石津ニ移リ、久米田寺ニ陣スルコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

伊豫守護河野通春卒ス、子通篤嗣グ、

〔改姓築山〕河野家之譜

通元　於洛陽沒ス、

通春　文明十四年、於湊山卒、

系圖

湊山ニ卒ス

文明十四年閏七月十四日

通篤 通宣ト及弓箭、勢盡テ沒ス、

〔河野氏系圖〕

通元 民部太輔、於洛陽沒、

通春 伊豫守、應仁元年、細川勝元與山名宗全及確執、洛中大亂、通春屬于宗全、赤松正則與兵戰而大有軍功、文明十四年、於湊山卒、號隣松院連山道系、

通篤 後篤改元、七郎、與伊豫守通宣及弓箭、勢竭而沒、

〔河野系圖〕 善應寺本 ○伊豫

通元 六郎、

通春 伊與守、於湊山逝去、隣松院殿連山道系、

通篤 九郎、イニ志摩守通篤、大相院殿、

七郎殿

〔河野系圖〕 長福寺本 ○伊豫

通元 六郎、民部太輔、

通春 犬法師、任伊與守、云隣松院、

通篤 改元、九郎、任伊與守、云太相院、

〔系圖纂要〕 九十七 稻葉 號外十三

法號

犬法師

通元 民部大夫、於京卒、

通春 伊與守、文明十四年七ノ十四、卒于湊山、號隣松院、

通篤 伊與守、初九郎、大永六年髮、殁于防州宇部、號大相院、

通兼 稻葉七郎、稱林氏、初爲伊與國石手寺弟子、好武背父意、還俗而賴美濃國厚見郡椿洞村河野通利、應仁年中、初來美濃、通利介抱之、屬土岐氏旗下、以憚父通春改姓氏、居稻葉山、後住清水、

通兼美濃ニ赴クトノ說

○通春、伊豫三嶋社ニ神領ヲ安堵セシムルコト、長祿三年三月八日ノ條ニ、通春ノ兵、細川勝元ノ軍ト戰フコト、寛正六年九月十六日ノ條ニ、西軍ニ應ジ、兵庫ニ到ルコト、應仁元年七月二十日ノ條ニ、忽那通光ニ地ヲ與ヘテ、惠良在城ノ功ヲ賞スルコト、同年八月二十二日ノ條ニ、祈禱料トシテ、伊豫味酒鄕內上方地頭職ヲ、東寺ニ寄附スルコト、同二年五月十八日ノ條ニ、禁榜ヲ伊豫三嶋社ニ揭グルコト、文明九年十二月十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕 コ之部 河野通春

義尚生母日野氏ト和解ス

十五日、壬子、義尚、猿樂ヲ興行ス、

〔塵芥記十輪院内府記〕○内閣記錄課所藏　後七月十五日、晴、及晩急雨、○中略今日有猿樂云々、

與御母儀有御絶交之事、去夜御對面云々、以孝治天下、御和睦珍重、

十六日、癸丑、別殿行幸、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　後七月十六日、○中略おとひく

ろとへ別てんまつゐて、御さゝ月ことさら御ゐいる、

十七日、甲寅、左近衛權中將橋本公夏ヲ參議ニ任ズ、

〔十輪院内府記〕文明十三年七月四日、峯秋來、相續橋本樂林等來、○中略公夏

八座事、付勾當内侍狀案談合、

〔塵芥記十輪院内府記〕○内閣記錄課所藏　後七月十七日、橋本八座事、勅許云々、

〔公卿補任〕四十三位季熙上　參議正四位下藤公夏、二十九、月日任、左中將如元、父故前權

○大山積神社文書（伊豫）
長祿三年三月八日安堵狀

中納言公國卿、實權大納言、實久卿男、母、

十九日、丙辰、諸國大風雨、是日、土御門内裏四足門等破壞ス、尋デ、諸社寺ニ

命ジテ、止雨ノ祈禱ヲ爲サシム、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　五月廿九日、よへをおよひも

ろせをうひくぬく、

六月一日、○朔日ノ御祝ノコトニカル、本月一日ノ條ニ收ム、水ゆへおとこさちゑこうゐくて、源大（庭田雅行）納言、をん部卿いろり ゑこう、

三日、○中略けさまてつゝきて大雨ふる、

五日、○中略それてろせひるつよく雨ふく、

六日、○中略々ふを風雨ふく、

七日、々ふをひるゐなり風雨ふく、

八日、げぬも雨ろせふく、

廿九日、雨風雨ふく、

七月廿九日、めつらしう雨ふる、

後七月十五日、大雨ふる、

閏水ノ爲メ番衆祗候セズ

雨ふる、十七日、夜ふる、十八日、十九日、夜よ入て大風雨ふる、四あしけもんりけやゐゐけやふる、ちゐけ程れ風ゐり、せきんい猶さゐゐらにふけやゐるよしきこゆる、

被害多シ

廿日、けさとくより御大くとをゐいりて、きう〳〵なゐさせらるゝ、ゑゆりしきよいゐけなほをへきよし、おゐせいささるゝ、ゑよひ又雨神きう〳〵しうなる、

大工ヲ召シテ修理セシム

廿六日、ゑよひを大雨ふる、

廿九日、あゐ月又雨風ゐく、

八月八日、雨ふる、御てんさゐの屋のうへなゐされ候と、ゑゆりしけとく申により、ゐゐ〳〵まゐれゐきつゐられて、なゐさせらる、

修理職ニ命ジテ修繕ヲ修理ス

對屋ヲ修理ス

〔後法興院政家記〕七　五月廿七日、乙未、時々雨下、終夜風頗吹、

廿八日、丙申、降雨、

廿九日、丁酉、甚雨下、處々洪水云々、

六月一日、戊戌、降雨、

二日、己亥、降雨、晩景有雨脚隙、

三日、庚子、時々雨灑、

八日、乙巳、陰、自晩景雨下、

九日、丙午、時々雨下、

十一日、戊申、時々降雨、

十二日、己酉、降雨、晩景雷一聲、

十九日、丙辰、晴、申刻雷一聲、雨一滴洒、

廿日、丁巳、晴陰、未刻雷微音、小雨灑、黄昏又雷、

廿一日、戊午、晴陰、申刻雷雨、

廿二日、己未、晴陰、雷雨如昨日、

廿三日、庚申、晴陰、晩景雷鳴、

廿四日、辛酉、晴陰、晩景雷鳴、雨一滴洒、

廿七日、甲子、晴、雷微音、

廿八日、乙丑、晴、晩景雷、

七月一日、戊辰、降雨、

卅日、丁酉、晴、申刻雨下、晚景止、

閏七月三日、庚子、晴、晚景小雨下、

五日、壬寅、未明小雨灑、

七日、甲辰、午刻雨下、終夜不休、

八日、乙巳、陰、自未刻雨下、雷一兩聲、

九日、丙午、時々雨下、

十日、丁未、降雨、

十一日、戊申、時々雨下、雷鳴一兩聲、

十二日、己酉、時々雨下、

十三日、庚戌、自午刻雨止、

十五日、壬子、陰、晚景雷雨、

十九日、丙辰、自巳刻雨下、自酉剋風吹、入夜大風吹、處々吹破、以外事也、

廿日、丁巳、晴、入夜雷雨甚、

廿五日、壬戌、晴陰、自晚景雨下、曉更風吹、

廿七日、甲子、晴、自亥刻雨下、

廿八日、乙丑、降雨、曉更風雨甚、及天明猶風吹、處々吹損云々、

廿九日、丙寅、晴陰、朝間風吹雨洒、

八月三日、己巳、晴陰、時々微雨灑、

七日、癸酉、夜來降雨、

十二日、戊寅、晴陰、入夜雨下、

十三日、己卯、降雨、

十七日、癸未、晴、晚景雷雨、

十九日、乙酉、晴、晚景雨灑、

廿日、丙戌、晴陰、時々雨灑、

廿一日、丁亥、晴陰、小雨如昨日、

〔塵芥記 十輪院内府記〕 ○内閣記錄課所藏 七月廿八日、晴陰不定、及申刻雨滂沱、卽晴、

後七月十二日、朝晴雷雨、

十五日、晴、及晚急雨、

十九日、○略中 入夜暴風超過、所々破烈(裂)云々、

廿五日、陰、細雨、

八月九日、偶然天快晴、秋霖已屬晴歟、

十九日、晴、入夜小雨、

洪水

〔親長卿記〕十三　五月廿九日、甚雨下、處々洪水云々、

六月二日、雨下、雖爲請取番、依洪水通路不叶、仍不參、及晩聊晴、宿仕召進元長朝臣了、禁裏御近邊之堀、亂後未被埋、仍其堀水漂切落、不可說事也、

内裏ノ堀溢ル

十二日、雨下、近日降雨不休、窮民愁傷云々、

窮民ノ愁傷

廿九日、大風吹甚雨下、所々破損難治云々、

内裏西堀洪水

七月二日、晴、内裏西堀洪水、仍無通路、不參御番、

後七月七日、雨下、

十九日、雨下、大風吹、入夜風猶烈、予亭破損過法、但所々吹損云々、

廿日、晴、入夜雷鳴大雨下、

廿八日、晴陰、入夜大風甚雨、所々又吹損、超過去十九日了、

〔資益王記〕閏七月十九日、遙拜、今日風雨、入夜亥刻大風、齋屋屏以下所々吹損、北小路西堀出之、藥師堂屋上中將方庭上口吹入候、總而所々破損、言語道斷、次第云々、

資益王第齋屋屏等破損藥師堂及ビ白川資氏第破損

廿日、遙拜、稲荷二階社御旅所顚倒、昨夜風故云々、中上兩神主來、今夜行水、

廿二日、ーーーー稲荷中神主來、中社先日大風ニ顚倒、上御社ヘ奉移云々、

中社倒顚ニ依リ上社ニ移御

〔長興宿禰記〕下　閏七月十九日、丙辰、雨下、入夜大風吹、人屋所々吹破、以外大風也、

〔大乘院寺社雜事記〕一八十　六月朔日、大雨下、

一大雨以外事也、在々所々破損、珍事不可過之、既及十ヶ日計大雨下、於岩井河人一雨人生涯了、

岩井河ニ水死人アリ

〔大乘院寺社雜事記〕二八十　七月二日、雨下、

廿一日、夕立、

一雨乞一万度兩所立之云々、

雨乞

閏七月七日、雨下、

八日、雨下、

九日、雨下、

一南北鄕於野上荒神祓在之、則一万度初之、鄕々在之云々、祈雨也、

十日、雨下、風、

興福寺中隣松吹キ倒サル

一中院大松一本風吹最倒、

一南北郷一万度（南圓堂春日御間也）仰之、燈籠在之、

十三日、雨下、

十九日、大雨下、

廿日、夜雨下、大雨也、

廿五日、夜、後夜以後大雨風、

廿七日、夜大雨下、

廿八日、雨下、

晦日、自今暁大風雨、

八月七日、夜雨下、

八日、雨下、

十三日、雨下、

十四日、雨下、

十六日、

一綸旨長者宣到來、左少（坊城俊名）辨奉也、春日社七大寺御祈禱也、風雨難云々、則方々

春日社七大寺ニ止雨ノ祈禱

ヲ命ズ

如例自寺務中遣之了、竹屋此四五日下向、禁裏凶共在之、御夢等希有事共也云々、

春日社御師中臣祐松請文

〔大乘院寺社雜事記〕（八十三文明十四年十月四日裏文書）

就風雨御祈禱綸旨並長者宣之趣、謹拜見仕候、早相觸了、一社可致御祈禱之旨、申含神主方候、則御正文返上申候、此旨可然樣可預御披露候者、可目出候、恐々謹言、

八月十六日　　祐松

伊與法眼御房

東院兼圓請文

〔大乘院寺社雜事記〕（八十三文明十四年十月七日裏文書）

御祈禱事、綸旨案文得其意候、早々可申付于西大寺候、恐々謹言、

八月十六日　　（兼圓）（花押）

尊報

〔大乘院寺社雜事記〕（八十三文明十四年十月二十三日裏文書）

御祈禱之御卷數一合令進上候、路次物忩候間延引仕候、恐存候由、可然可有御披露候、恐惶謹言、

九月廿五日

〔大乘院日記目錄〕三　閏七月廿九日、大風大雨、

八月十六日、綸旨到來、風雨事、

〔守矢滿實書留〕五月廿五日より大雨降、晦日大水增、大町十日市場安國寺押流、栗林兩郷作毛田畠供(共)押流、人類牛馬家籠押流、仁(人下同シ)類朝(叫カ)川城山へ付トスレ共、安國寺より大河增來間、落方不知、男女子共祿(財)在寶捨、我先ニト瘟ニテニケル有樣、何合戰負ニケル共、是程事ハ有シ、万民肝消、大町水海成、仁(人)馬出入十日計絶候、六月十七日甲寅御宮移有、四方增大水間、社參郡内男女共無是、御柱引延候、物恠是也ト万民申合、穴(絶)句御宮移迄御延候、口惜敷次第候、○中略　閏七月廿五日、御射山上增大雨降、夜入テ御上有、次日も大雨大風吹、未時迄皆々宿吹破、社參人馬カヨイモ絶、皆々里より下向申、然共日照上御手帛御座有、又其夜□□計より大風大雨降、下增の日山御庵後木吹さき候、丑寅ヘマロフ樣々、山よりハ大祝殿祝達、晦日よハ千野迄御下有御宿候、祝達少々田澤宿、五日市ハ十日市ハ大町大海ト成、郡内海原ト樣々、

〔妙法寺記〕上　文明十四、壬刁、此年大風度々吹、作毛凶飢渴也、人民多病死、大水出ル事無限、光長寺大坊此年アク、

〔年代記〕(文明十四年)壬寅、六月二日、大洪水、人多死、

幕府、京都持寶院地藏講ヲ再興ス、

〔文明年中古文書寫〕

三條京極持寶院地藏講事、今度一亂已來闕怠之間、被再興訖、任先規被參勤、於頭役錢者、可被致其沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年閏七月十九日　　(松田貞康)豐前守　沙彌

畠山政長、攝津ヨリ和泉石津ニ移リ、尋デ、久米田寺ニ陣ス、

〔大乘院寺社雜事記〕二八十　閏七月十七日、

一明後日可有合戰之由、雜說在之、

廿日、夜雨下、大雨也、

一昨日官(畠山政長)領左衞門督自尼崎乘船、押渡于泉州石津、爲紀州入國歟、百卅余騎云々、不及相待越中勢者也、古市所ニ注進、幷舞行房說也、兩方說一同上者實說也、自明舞方申子細在之、舞行來寺務方云々、

久米田寺ニ下ル

成身院順盛ハ秋篠ニ陣ス

筒井順尊義就ノ黨下田原ヲ火ク政長傳法院僧徒

大和郡山攻ノ風評

八月朔日、

一官領左衞門督、一昨日廿八日和泉國久米田寺尼寺云々、下向必定旨、古市(澄胤)相語之、

三日、

一成身院(順盛)ハ有秋篠之在所、物忿難義之間、引入歟、自河内可有沙汰之由申歟、

十日、

一秦九郎堺より罷上、去月晦日官領石津□著、上下六千人計云々、兩方合戰用意也云々、

十一日、

一傳聞條々、

十五日以後郡山中可責之由、必定之由聞之、但河内ニ可有合戰之由申間、彼國之儀ニ可依事歟、

十九日、乙酉、

一下田原庄之住人右衞門佐方披官人、自筒井燒拂之、罷越河内云々、於河内有合戰歟、彼方又燒云々、左衞門督行向根比(來)山相語、領狀歟、則歸陣一兩日

大傳法院衆徒行人政長ヲ援ケ

ヲ誘フ

事也云々、仍及合戰歟、きと不可事行事也、

〔大乘院日記目錄〕三　閏七月廿六日、〇中略於□(管領)□□(畠)相殘尼崎了、可責河内國云々、

廿九日、〇中略官領入部和泉國、

〔長興宿禰記〕下　八月十九日、乙酉、〇是日聞、昨日管領畠山金吾、自攝州尼崎、出陣和泉國、號八木在所被取陣云々、

〔粉河寺舊記〕五　〇紀伊　同(文明)十四年刁八月二日、畠山衞門助を爲退治、畠山左衞門督殿泉州久米多江陣立、加勢申來付衆徒行人發足、

〇政長、義就ト河内十七箇所ニ戰フコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、

二十三日、庚申、庚申和漢聯句御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三　御湯殿上日記　後七月廿三日、〇中略かうゑん

ゐて、御ひろんあり、(水歟)ぢんきゝ、(等貫)ぢんきう御ゐいり、あんきん寺殿も入ゐいらきらるゝ、

廿四日、御そうゝちく御ゐいりて御返、

二十四日、辛酉、御觸穢ニ依リ、神祇伯資益王ヲシテ、代拜セシメラル、

五體不具穢

〔資益王記〕閏七月廿四日、遙拜、參地藏、稻荷中神主來、勾當內侍奉書到來、依五躰不具穢、御拜御代官事、

八月二日、御代官自今日御沙汰、珍重々々、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三 御湯殿上日記　後七月廿六日、

八月二日、○中略けさよりやうて御ものみかる、（御書）御ものみ御代くゐんのことゝくゝおかせらるゝ、

得丸名作職ヲ渡部右京進ニ知行セシム

中院通秀、其所領加賀額田莊得丸名作職ヲ、同國那谷寺本泉坊周應ニ違亂セラルヽニ依リ、之ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、同寺ヲシテ、周應ノ違亂ヲ停メシム、

周應替地ト號シ那谷寺領ヲ押妨ス

〔京都帝國大學所藏文書〕中院文書一

中院一位家雜掌申加州額田庄得丸名作職事、就由緒被宛行渡部右京進之處、本泉坊以前知行之間、號替地押取當寺領內田地之間、去年雖被成奉書、不能承引云々、言語道斷之次第也、重而被成御下知畢、猶以及異儀者、可有其沙汰由被仰出候也、仍執達如件、

文明十四閏七月廿四日　英基判

那谷寺三坊　元連

〔塵芥記 十輪院內府記〕○內閣記錄課所藏　六月二日、猶雨、○中略玉屋下向賀州、明日云々、遣便狀於額田、

五日、晴風、○中略及晩按察卿傳金剛王院命、本泉坊事也、

十二日、自甘有信、本泉坊事、

得丸名ノ重書紛失

〔京都帝國大學所藏文書〕中院文書一

本泉坊領田畠等之證文事

右件之證文等者、長祿三年三月晦日當寺炎上時、同寺領內之支證等、並額田庄之內德丸名之重書等、皆悉令粉失處也、然上者親子親類他人妨申者出來候者、盜賊さるへく候、

文明四年五月三日　全尊在判

本泉坊周應訴狀

那谷寺本泉坊住持

那谷寺本泉坊周應謹言上

抑額田庄内得丸名之事、帶刀方先祖知行名也、依有子細、古八木入道方（故下同ジ）仁被
與奪訖、然間八木入道子息古本泉房全尊仁被與奪彼名、數年知行無其隱者
也、爰愚僧依爲全尊之弟子、相續處、彼渡部方、同舍弟八木方、去文明五年額田
庄御代官、御百姓中江、彼名可有競望之由雖被申、更以無其謂之由被申放畢、
但渡部方計會之條、縱古本泉房追善雖有懈怠、加少扶持、彼仁可有合力由、自
庄官衆色々愚僧方へ雖有御口入、更以不致承引之處、彼渡部方兄弟之一行
於、自庄官衆愚僧方へ給而、平五貫文之分加扶持之由承間、不及力、任御口入、
其分兄弟之方へ渡畢、如此落居之處、又次年文明六年十一月當國一亂之刻、
○文明六年十一月朔日ノ條參看、彼名之事、額田御百姓中へ、渡部子息法躰之時可押取之由、
雖被申庄家之御返事、既去年一途落居之處、此子細取立、當本泉房へ被申事、
不可叶之由被申處、渡部四郎方其時被申旨者、今度土合城籠申事、依此名之
莅之申度（由カ）々被申處、當國之一亂者、佛法當敵責失、廉直之爲弓箭處、無理令知
行、可有押領事無勿躰子細之由、惣庄御返事之間、其時彼四郎方重而不及是
非申事閉口畢、左樣時支證一通モ不被出躰（帯）者也、其時我々惣庄御百姓中へ、
樽以御禮申畢、其後渡部四郎方御本所樣之御披（被）官參、又去年彼名田被歎申

八木入道與奪ス
八木入道ノ子全尊與奪ス

加賀ノ亂ハ佛敵ヲ滅ス爲メナリ

條、言語道斷所行也、惣而渡部方名田於知行之事、先規不可有其謂、古八木入
道之實子者、古本泉房全尊也、今渡部方親父者、八木入道之繼子々孫也、然上
者私申事不可有虛言、所詮任手繼相續、當知行無相違者、畏可存者也、渡部兄
弟如一行者、爲子孫此名田有莅者、堅可有御成敗者歟、猶々御不審子細者、預
御尋可披申者也、條々支證之案文三通進上之條、此趣具爲備上覽、粗言上如
件、

文明十一年二月日

二十六日、癸亥、勝仁親王御所ニ行幸アリテ、御宴ヲ行ハセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　後七月廿六日、さよひを大雨
ある、宮れ御方へおりて、もりさミなとうゝ寄て、御ひし〳〵なり、

東福寺、東寺領山城柳原一橋ニ棟別及ビ夫錢ヲ課スルヲ以テ、東寺、之ヲ
幕府ニ訴フ、是日、幕府、東福寺ニ命ジテ、其催促ヲ停メシム、

〔東寺百合文書〕け最勝光院評定引付文明十四（閏七月）　同廿六日、内談、當坊、
一昨日廿五日、自東福寺夫錢縣（懸）于柳原屋別間、披露之處、急寺奉行申書事、可付東
福寺之由、衆儀了、（落下同ジ）

幕府奉書棟別錢賦課ヲ停ム

〔東寺百合文書〕コ一之十四　○山城

東寺領城州柳原一橋事、各別寺領之處、爲當寺被相懸棟別云々、太不可然、早可被止催促、若又有子細者、可被注申之由候也、仍執達如件、

文明十四　閏七月廿六日

（松田）數秀（花押）
（清貞秀）常通（花押）

夫錢賦課ヲ停ム

東福寺奉書ニ從ハズ

東福寺雜掌

東寺領城州柳原一橋事、各別寺領之處、爲當寺被相懸夫錢條、太不可然、早可被止催促、若又有子細者、可注申之由候也、仍執達如件、

文明十四　閏七月廿六日

數秀（花押）
常通（花押）

東福寺雜掌

〔東寺百合文書〕け最勝光院　○山城

文明十四寅　八月一日、在所鎮守、

一公方奉書東福寺ヘ付之處ニ、於奉書者不可承引之由申返之了、重而以公文、委細東福寺ヘ可申候旨、衆儀了、○奉書案文、前掲東寺百合文書ニ同ジキヲ以テ略ス、

東寺奉行ニ書ヲ遣ハシ東福寺ニ賦課停止ヲ嚴達セシム

同三日、在所鎮守、

一寺家雜掌代、見石東福寺ヘ罷向之處、出宮他行之間、申置歸了、

同四日、在所鎮守、

一一橋夫錢之事、百姓等東福寺內々有申子細之由申間、先布施下野方ヘ屆閣之了、返々言語道斷子細、事通御沙汰了、

同六日、內談、當坊、

一柳原地下人兩人參、夫錢過分堅被申間、今分ナラハ可沙汰之由申間、今日早朝奉行所遣雜掌、東福寺雜掌可被召仰由申間、卽遣人召出堅可申旨、返答通披露了、

一兼行催促之處、他行之由返答了、

同廿日、內談、在所當坊、

一爲東福寺、柳原家二間（檢下同ジ）譴封之由、百姓連參申候、注進彼夫錢事云々、此趣披露之處、卽寺奉行ニ申合、彼雜掌召仰候、不然者譴封切ホトクヘキ旨衆儀了、

東福寺柳原在家ヲ檢封ス

〔東寺百合文書〕フ一之十六　○山城

文明十四年閏七月二十六日

幕府東福寺ニ撿封ヲ解クベキヲ命ズ

文明十四年閏七月二十六日

東寺雜掌申城州柳原一橋事、爲當寺先度被相懸人足之條、各別寺領之上者、可被止催促之旨、被成奉書之處、不能是非被閉置彼地下人屋云々、事實者太不可然、不日令停止其綺、可被明申之由也、仍執達如件、

文明十四 八月廿一日　　數秀 判　常通 判

東福寺雜掌

東寺雜掌申城州柳原一橋諸役事、糺明之上者、於被閉置屋者、速被返付、可被明申之由也、仍執達如件、

文明十四 八月廿五日　　數秀 判　常通 判

東福寺雜掌

〔東寺百合文書〕け 最勝光院評定引付 文明十四 壬寅 ○山城

一就一橋之町之夫錢之事、以目安可申、卽爲衆座目安調、來二日奉行所可遣旨衆儀了、

同（八月）廿九日、內談、當坊、

東寺訴狀案

不輸ノ地

〔東寺百合文書〕ゑ 二十七下之三十二 ○山城

（端裏書）「自東福寺懸柳原之內一橋在家夫錢目安案文 文明十四 九月日」

東寺雜掌謹言上、

當寺領河東宸勝光院敷地在家、東福寺雜掌懸非分課役間之事、

右當敷地等者、爲天下泰平之御祈禱並數箇條御願料所、而御寄附當寺講堂訖、自爾以來更無他妨、一圓不輸之地而致知行、專長日勤行者也、爰東福寺雜掌、去應永卅四年冬、東寺領與東福寺領堺唐橋之通針貫改之、東寺領內一橋爪構之畢、依爲濫吹之所行、雖含愁訴、未能達上聞、而送年月之處、去閏七月下旬比、號夫錢懸非分課役之由、依致寺家注進、雖被成下度々御奉書、更以不致承引、剩於御奉書者返之畢、以外狼藉之處、結句又去月廿日令撿符（寺領之內）（時下同ジ）在家二間畢、然間重而又及兩度被成下御奉書之處、尙以不隨仰之條、猛惡之至、不堪常篇者歟、所詮於撿符者、速開之、爲被停止向後非分課役、急被成下安堵御下知、彌欲奉祈天下泰平御願成就、仍言上如件、

文明十四年九月日

〔東寺百合文書〕け 最勝光院評定引付 文明十四 壬寅 ○山城

九月十一日、內談、在所、增長院、

一就一橋町夫錢事、寺奉行松田對馬方へ百疋、同奏者三十疋、以兩雜掌遣之、公事イラウヘキ旨衆儀了、

松田敦秀ニ禮錢ヲ贈ル

同十六日、在所鎭守、

一就柳原一橋夫錢事、昨日十五日、雜掌兩人奏者三十疋百疋持之、公事催促之處、對馬申云、此間聊取亂間延引候、何樣爲清泉談合、可披露致之由返事了、

十月二日、在所北僧坊、

一柳原一橋就譴封之屋、自東福寺、爲布施下野、松田對馬兩人被付沙汰東福寺候、早々夫錢可沙汰之由、自東福寺被相觸之由、百姓連參申、注進之通披露之處、衆儀之趣、定而作事被懸御沙汰事之間、左樣之率爾之事、返々曲事也、如何樣於夫錢者、聊も不可被沙汰之由、御返事了、卽今日中松田對馬方へ、事子細可相尋之由、衆儀了、

東福寺幕府ノ命ト號シ夫錢ヲ催促ス

同三日、在所鎭守、

一就昨日題目、雜掌松田對馬方へ罷出、事子細相尋處ニ、對馬ハ川東御山莊御棟立ニ參候之間、子細三申云、更以不存知仕候、返々曲事通、仰天氣色申、如何樣對馬罷歸候者、如此之子細可申之由返事了、此趣披露之處、重而明日新六郎罷出、尙々事之子細可尋之由衆儀了、○義政、東山ニ山莊ヲ營ムコト二月四日ノ條ニ見ユ、

一自東福寺內緣方說云、一橋之町去春普請人夫寺家ヘ爲不罷出、東福寺普請人夫罷出上者、爲近例之由、對馬ニ申間、有其謂由申云々、先代官公文所實不可相尋、隨而對馬方へ同可相尋候旨衆儀了、

同四日、在所鎭守、

一就昨日評儀旨、重而對馬方へ雜掌罷出了、

一柳原一橋人夫、去春爲寺家普請不罷通、相尋代官公文所處ニ、罷出由返答趣披露了、

地下人檢封ヲ開カントス

一地下人申云、爲公方樣譴封事、未無落居間、譴封切ホトクヘキ由申間、老者先執止了、

一東福寺修藏主方ヨリ、侘事沙汰スルナラハ、譴封トクヘキ由被申、曲事之由、地家注進申了、何も披露了、

幕府再ビ東福寺ニ命ジテ檢封ヲ解カシム

〔東寺百合文書〕フ一之十六○山城

東寺雜掌申城州柳原一橋諸役事、何時未休之處、被閉置彼地下人屋條、甚不可然、所詮來十日以前、可被明申由候也、仍執達如件、

文明十四
十月四日

東福寺雜掌　數秀
常通

〔東寺百合文書〕（け最勝光院評定引付文明十四壬寅）
○山城

一昨日四日、雜掌對馬方へ罷出、一橋之公事々被付沙汰東福寺へ由、申通相尋之處、更以無其儀候、一向空言云々、重而可遣奉書由、返答了、奉書曰、（奉書、前揭東寺百合文書ニ同ジキヲ以テ略ス、）

即東福寺納所（寒）察付之了、衆慶申僧ニ渡之、

同（十月）五日、在所鎭守、

〔東寺百合文書〕（ゐ二十七下之三十二止）
○山城

（端裏書）「東福寺雜掌支狀文明十四十九」

東福寺雜掌謹支言上

法性寺大路境內撿斷之事

右件在所者、爲當寺領法性寺境內、而自往古於撿斷者、更無他妨、或山門領或公家武家領所々地子等知行分在之、東寺領亦同前、於屋地子不成其綺也、殊爲公方普請處仁、號非分課役何哉、次應永卅四年唐橋通釘貫改之、而一橋爪（詰）仁構之云々、彼一橋之堀者、當寺本願檀那光明峰寺殿（藤原道家）之御時、爲法性寺構、重而被鑿之、于今無其隱、然間毎年橋並釘貫修補之、此趣預御披露、被停止東寺雜掌之姦訴者、寺家可爲大慶者也、仍言上如件、

東福寺寺領ナリ
撿斷ノ在所ハ法性
東福寺支狀

文明十四年十月日

〔東寺百合文書〕（け最勝光院評定引付文明十四壬寅）
○山城

一第二度被調之、明日十七日、松田對馬方へ可遣之旨、衆儀了、

同（十月）十六日、內談、在所當坊、

爲得心記之、廿二日、自東福寺第二度目安寫、廿四日、對馬方へ雜掌遣之、

〔東寺百合文書〕（ゐ二十七下之三十二止）
○山城

（端裏書）「柳原一橋町自東福寺懸課役第二度目案內」

東寺雜掌重言上、

當寺領寂勝光院敷地非分課役事

右當敷地知行理運之條、以前言上事舊畢、而東福寺雜掌支申云、法性寺境內、自往古於撿斷者、更無他妨云々、雖然何各別之於柳原寂勝光院敷地、成其綺哉、混亂之申狀、太以曲事也、次爲公方普請上者、非々分課役之由、耀申歟、是又無其謂、於御普請者、爲當寺令懃仕其役畢、何限當寺領可懃兩方之役耶、次以一橋堀

二問狀ヲ出ス
一橋堀ハ藤原道家ノ時法性寺構トシテ鑿ル
二問狀

一橋修理ノ支證トハナラズ一條戻橋八幡社役一橋所在地ノ最勝光院ハ東野社領今熊野

數秀書狀支證差圖ノ呈出ヲ求ム

爲法性寺構事者、更以无所見、每年彼橋修補之事、備申支證之條、是又非理者歟、洛陽一條堀川橋（號逆橋）、爲八幡役懸之條、自往古之例也、雖然一條大路非八幡領、以彼思此、件橋修造之事、强非爲支證者歟、於一橋之在地、西頰者寂勝光院跡、（當寺領）、同於東頰者今熊野領也、雖同在所、今熊野者、社家依爲近所、不成違亂、當寺者依爲遠所、每度令病在地物之事、目垂貝至歟、雖然度々依歎申、被成御成敗處、（寛正六、應仁元）、猶以于今不至承引（（文下同ジ））、以前如令言上、御奉書及兩度返之畢、上意違背之科難遁者歟、結句又懸御沙汰之處、令撿符屋內之條、非中間狼藉哉、所詮東福寺知行撿斷之所者、法性寺八町之事、當寺知行者、名字各別之柳原也、如此子細預御糺明、重被成下御成敗者、彌欲奉祈天長地久御願、仍言上如件、

文明十四年十月日

〔東寺百合文書〕ヨ（十五之三十二止）○山城

就柳原之事、自東福寺申上候、御普請等不致沙汰之間、彼申事可披露之由、布施申候、一方向東福寺之支證、懸御目候て、不可然候、彼在所御支證並差圖去年奉書等被持候て、早々可給候、申狀事者、是ゑて御雜掌と可申合候、只今程可給候、万一彼方支證計備上覽候てい、一方向御成敗あともあるへく候哉、爲其忩態人を進候、次稻荷於田地事、代目と申定子細候、同今日可申入候、可得御意候、恐々謹言、

東福寺ノ支證ノミニテハ片手落ノ成敗アラン

十月十六日　數秀（花押）

御坊中

（ウハ書）「松田對馬守　數秀」

年預御房御僧中

〔東寺百合文書〕け（最勝光院評定引付文明十四寅）○山城

一柳原一橋之公事々、松田對馬申云、ツカイ沙汰成候者、急洛（歟）居如何存候之間、東福寺奉行布施下野申談、彼與相判之奉書成、先撿符トクヘキ由、可申通披露了、

十一月七日、內談（在所北僧坊）、

一野村申送子細、一橋事正傳院へ御移徙之時、布施下野被申合之由（他事狀以而）、申了、

〔東寺百合文書〕ヨ（十五之三十二止）○山城

野村秀信書狀

就一橋結符儀、委細示給候、此□寺家へ被相屆子細候、今日も東福寺へ被申遣候、左右候者、定而自是可令申候、近日何邊一途之儀あるへく候、更ニ此方事ハ疎略之儀おく候、恐々謹言、

十一月八日　　野村彦三郎秀信（花押）

公文所殿
東寺御雜掌

〔東寺百合文書〕せ　武家御教書並達　二十九至十四　○山城

數秀書狀支證全部ノ呈出ヲ求ム

（端裏書）「東寺兩雜掌進之候　松田對馬守數秀」

柳原御支證事、先度御判案文一通給候つる、彼在所之御支證正文悉可渡給候、結符事種々雖申遣候、無承引候間、以兩方證文可有糺明候、猶此間者就御造作御普請等之儀取亂候條、遲引候更非疎略候、恐々謹言、

十一月十二日　　數秀（花押）

〔東寺百合文書〕け　最勝光院評定引付　文明十四寶　○山城

同（十一月）十三日、內談、在所寶井院、

一自松田對馬守方、以狀申子細、一橋撿符事、東福寺へ種々雖申候、不承引間、以兩方支證可糺明、支證正文悉可給由申間、畠山管領之時安堵、幷當御代安堵、最勝光院方度々綸旨院宣等可遣之旨、衆儀了、

最勝光院支證目錄

幕府又解封ヲ東福寺ニ命ズ

寂勝光院支證目錄（綾）事

嘉曆三年院宣一通、正慶二年綸旨一通、建武三年院宣一通、嘉曆三年關東御教書一通、建武四年等持院殿御判物一通、寶德二年畠山管領之時、總寺領等安堵一通、長祿三年當御代御判物一通、總寺領等安堵也、文明十年同御判物一通、全八通、以目祿松田對馬守方へ付之了、文明十四年十一月十四日、

〔東寺百合文書〕ひ　一之八　○山城

東寺雜掌申城州柳原最勝光院敷地、事、各別寺領之處、爲當寺相懸御山莊御普請料、被撿封當所民屋云々、太不可然、所詮可被糺明之上者、先可被開彼戶候由候也、仍執達如件、○幕府、東山山莊造營料ヲ山城諸社寺諸家領ニ課スルコト、二月四日ノ條ニ見ユ、

文明十四　十二月十七日　　數秀
英基

東福寺雜掌

（包紙）「寺奉行松田對馬守東福寺成奉書間、於正文者彼寺可止之間、案文書認、加裏判爲後證送之、」

文明十四年閏七月二十六日

文明十四年十二月十七日」

〔東寺百合文書〕け最勝光院評定引付文明十四寅 ○山城

十二月十八日、内談、在所増長院、

一就一橋之公事、自松田對馬守方、以川輪幸和申云、東福寺雑掌度々召御糺明之間、先可撿封開旨、雖令下知無承引間、布施下野相判奉書書進候、早々可被付之旨申送了、奉書云、○奉書、前掲東寺百合文書ニ同ジキヲ以テ略ス、

如此之通披露之處、明日十九日、東福寺へ可付旨、衆儀了、

十九日、以雑掌上總出官所へ付之了、

〔東寺百合文書〕フ一之十六 ○山城

東寺雑掌申城州柳原最勝院(光厳)敷地、民屋撿封事、糺明之間、先可被開彼戸之由、被成奉書處、不被承引云々、太不可然、不日可被開之、猶以有遲怠之儀者、縱雖有其理、以違背之咎、可被裁許之由候也、仍執達如件、

文明十四年十二月廿三日　　數秀　英基

東福寺雑掌

更ニ解封ヲ東福寺ニ命ズ

〔東寺百合文書〕け最勝光院評定引付文明十四寅 ○山城

一今日未明重而御奉書東福寺へ付之處ニ、於御奉書者、不可承引之由返事了、御奉書曰、○奉書、前掲東寺百合文書ニ同ジキヲ以テ略ス、

同廿五日、在所湯屋、　同廿四日、在所不動堂、(十二月)

一一昨日廿三日、對馬守申云、東福寺及兩度御奉書違背通、年預可狀給、以其布施ニ申可加了簡之由申間、少々談合、申狀遣之、其狀曰、

當寺領就柳原一橋撿封事、可有御糺明上者、先可開彼戸之由、及兩度雖被成下御奉書、不致承引之間、上意違背候條、言語道斷之次第也、所詮被成下安堵御成敗候之樣、可預御披露候、恐々謹言、

十二月廿四日　　宏清 判

松田對馬守殿

今日以雑掌上總御左右相尋之處、昨日廿五日、以野村、布施下野方へ年預狀如此、既上意違背之上者、一方向ニ致披露、東寺へ可成安堵御成敗之由申送間、下野返事ニ、尤其儀可然之由申了、此上者近致披露、可成安堵之由申了、廿八日可人給之由同申了、

〔東寺百合文書〕ホ二十一之三十五 ○山城

（包紙裏）「東寺雜掌」

下野守英基」

當寺領山城國柳原一橋最勝光院敷地、事、今度爲東福寺雖相懸御山莊御普請料、依爲各別寺領、不致其沙汰之處、令檢封當所民屋之條、太無謂、然間於子細者可被糺明候、先可開閉戸之旨、度々雖被成奉書、不能承引之條、難遁違背咎上者、所詮向後停止彼綺諸役以下一圓可爲當寺進止之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年十二月廿九日　　對馬守（花押）

下野守（花押）

東寺雜掌

〔東寺百合文書〕け最勝光院評定引付文明十四寅 ○山城

一柳原一橋就檢封屋事、寺家安堵奉書到來、卽披露之處、珍重々々、禮物被持、明日可罷出旨、衆儀了、（俱造營方可被借之、）對馬三貫、奏者三人各三連、中間小物中三連、下司代公人依時儀、衆儀如此、奉書云、（○奉書、前掲東寺百合文書ニ同ジキヲ以テ略ス、）

東寺雜掌申山城國柳原一橋最勝光院敷地、民屋檢封事、早任奉書之旨、退東福寺違亂、可被沙汰付雜掌之由、被仰出候也、仍執達如件、

（十二月）廿九日、內談、（在所當坊、）

數秀

英基

東寺ニ安堵セシム

幕府所司代浦上則宗ヲシテ

柳原一橋ノ地ヲ東寺ニ渡付セシム

則宗開封ヲ躊躇ス

東福寺監寺等百餘人ヲ率ヰ亂妨ス

十二月廿九日

所司代

同晦日、（在所當坊、）

一彼屋可開檢封之事、所司代難澁之間、爲寺家可開之旨、衆儀了、然間奉書案文東福寺付之、卽開檢封之了、卽自東福寺出官主（寺職）藏（司下同ジ）寺兩人爲大將、百人計彼在所へ寄來、亂放（妨致下同ジ）至、又二間之戸閉置之、言語道斷曲事也、卽如此之子細、兩雜掌以折紙、寺奉行松田對馬守方へ注進了、返事云、言語道斷曲事也、明春成一段可有御沙汰之由了、

注進折紙云、

御奉書案文東福寺へ付檢封之事者、自此方開候之處、出官主藏寺兩大將仕、以百人計彼在所へ寄來、兩隣亂放至、又二間之戸閉置之、言語道斷曲事候、以參可申候へ共、只今事候間、注進令申候、恐々謹言、

十二月卅日　　東寺雜掌　聡快

松田對馬守殿　進之

同　　増祐

〔東寺百合文書〕け（最勝光院評定引付　文明十五癸卯）　二月六日、

○山城

一柳原一橋撿封之屋之事、以御奉書旨、舊冬爲寺家開彼民屋之戸之處、東福寺致緩怠條、曲事也、此子細以兩雜掌、致對馬談合之處仁、彼返答、所司代今一度爲寺家可被屆之由申通、令披露了、

二十八日、乙丑、六角行高、近江高嶋郡ヲ押領ス、京極高清、之ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、田中貞信等ヲシテ、高清ヲ援ケテ行高ヲ撃タシム、

〔朽木古文書〕（京都）乙二十号

佐々木小五郎高清申、同名四郎（六角）行高事、令強入部江州高嶋郡、種々任雅意、剩今度非御成敗之處、號百姓退治、差遣軍勢、度々及合戰云々、以外次第也、所詮早相語高清、堅相支之、可被致忠節、更不可有遲怠之由被仰出候也、仍執達如件、

文明十四　閏七月廿八日　　清房（假尾）判　元連（假尾）判

行高高嶋郡ヲ侵シ百姓退治ト號ス

佐々木田中（貞信）四郎五郎殿

佐々木小五郎高清申、同名四郎□□（行高）、令強入部江州高嶋郡、種々任雅意、今度非御成敗處、號百姓退治、差遣□（軍）勢、度々及合戰云々、以外次第也、所詮相談高清、堅相支之、可被致忠節、更不可遲怠之由被仰出候也、仍執達如件、

文明十四　閏七月廿八日　　清房　元連

佐々木越中守殿

二十九日、丙寅、内侍所託宣アリ、吉田兼倶ヲシテ清祓ヲ行ハシム、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三（御湯殿上日記）

後七月廿九日、あゝ月又雨風ふく、○略中夜ゑ入て、おうゝゝうのつゆ祓えとしまいりて、ゑもしよにゐりゑしめして、よし田めして御たつまあるへき御さゝあり、八月一日、○略中よし田もんまてめして、きとの（ゝカ）御いら弁れ事れやきらるゝ、三日、○略中ゐんしれ御ゑ弁ゑおらします、おいし所へ御神くゐいらきらる

御所穢アリトノ託宣

馬ヲ兼倶ニ賜フ梶井宮尭胤法親王南蓮院尊應等ヲシテ祈禳セシメラル

ゝ、

（頭書）々ふよりゐんしの御ゑ丹よかる、きよ御ゑら丹けさ申、御むまさふ、

七日、○中略御さくきむれ御つゝしみよつきて、ろち丹殿、ゑやうゐん院との

へ、御なて物いささるゝ、めうゆう院へも、あきいささるへきかり、

十五日、御さくきんゆへ、けさいへちしてゐんしれ御ゑ丹よなる、めてさし、

十六日、○中略昨日まてへちしての御いのりとをれ御くゐんしゆ、所々より

ゐいる、

義政父子憑ヲ上ル

義政夫人日野氏蠟燭茶等ヲ獻ズ

一日、丁卯、御祝、八朔ノ贈遺アリ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三御湯殿上日記　後七月廿九日、あゝ月又雨風

ゐく、御さのむきう〳〵ゐいる、

八月一日、あさ御さゝ月ゐいる、とくより御さのむともゐいる、むろまち殿

よりゑてんそうれ御ふをゑてゐいる、大納言殿（政資）よりい、日野ゑゝう御つゝ

ひゑてゐいる、御返しをれれし、もんきれりのゆゝとある方とをの御返し、

やゝてつゝりゑさるゝ、ゑよひの御さゝつきをつきのことし、きう上らぬ御

ゐいり、

二日、けふゑ御返しせらをゑ、

三日、御返事とをせらるゝ、

四日、々ふを御返しせらるゝ、御さ丹れ御ゝさより、御らうそくのゑこ、御ち

やれゑこもゐいる、宮の御方へひれ五そくゐいる、二宮へもいさ丹ゐなる

ものゐいる、

〔後法興院政家記〕七　閏七月廿七日、甲子、晴、自亥刻雨下、祇候面々令申沙汰一獻、御憑也、

八月一日、丁卯、晴、任世俗風如例年、

〔塵芥記十輪院内府記〕〇内閣記、八月一日、天晴、進八朔之儀、進公家十帖、御香呂、幷兩武門谷御所、御方御所、御御劔了、自内御返十帖、御短冊二百枚、

中院通秀禁裏義政父子ニ物ヲ進ズ

〔親長卿記〕十三　八月一日、晴、八朔如形進上了、

〔長興宿禰記〕下　八月一日、丁卯、公武御贈禮如先規、公私被獻之、

三日、己巳、從二位德大寺實淳ヲ正二位ニ敍ス、

〔公卿補任〕四十三　内大臣從二位藤實淳、三十八、右近大將、八月三日正二位、

〇勸修寺政顯等敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔歷名土代〕

從五位下三善益說　同十四八一、（文明）

正四位下藤（勸修寺）政顯　同十四八十、

同（甘露寺）元長、廿才、同十四八十四、

從四位下藤（正親町西）實澄　同十四八十四、

正五位下同（木幡）雅冬　同十四九廿八、

從五位下菅（唐橋）在數　同十四十二、

正五位下同（藤）顯基　同十四十一十一、

從四位上同（町野）政資十四、同十四十二七、

正四位上槻（壬生）晴富　同十四十二十三、

〔親長卿記〕十三　十二月十三日、晴、〇中略晴富宿禰正上四位事、奏聞、勅許、

〔歷名土代〕

從五位下藤（徳大寺）公連　同十四十二十九、（文明）

從五位上同（飛鳥井）雅俊　同十四十二卅、

安禪寺上棟、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月三日、

（頭書）あんぜん寺殿より、御むまあけの御さる色々ゐいる、大ぜもしより、御てうしともゐいる、

廿九日、〇中略あんぜん寺とのへ御うつりめてささよ、御かゝらゑ物五色、二ゐいらぎらるゝ、

安禪寺宮觀心尼ニ御移徙ノ祝物ヲ賜フ

四日、庚午、北野祭ヲ停ム、

〔長興宿禰記〕下　八月四日、庚午、晴、北野祭不及沙汰、一亂以來之儀也、

幕府、二階堂政行ヲ、幕府料所丹後筒川莊領家職ノ代官ト爲ス、

〔古文書〕第三集

御料所丹後國筒川庄領家職事、就由緒被預置訖、早於年貢者、如先々嚴密可被致執沙汰之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年八月四日　（布施英基）下野守　（松田貞康）豐前守　（伊勢貞宗）伊〻

二階堂山（政行）城大夫判官殿

御太刀ヲ賜フ

六日、壬申、伏見宮邦高親王第一王子降誕セラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記

八月六日、宮しみ殿より、ゐゝ宮御さむしやうあり、々ふゝ御とく日より御申あし、

七日、〇中略ふしみとのへ、昨日ゐ御とく日より、しろ御さちゝふゐいる、御つゝ寺みん部卿、御ゑうちやくのよし御申、

十二日、〇中略宮しみとのゝゐゝ宮れ御方御いゐ寺とて、とりのこ、御こふ、あゐ、御さる一ゝゐいりて、御ひし〳〵みて、三こんめゝ、宮しみ殿御しやくなとゝて、みまゝてさふ、御（入道親覺親王）むろ御所、（常信）くゐん法ゆう寺殿も御しおう、おゝよひみゑ〳〵御返ともあり、

七夜御祝

廿九日、〇中略宮しみ殿れゐゝ宮へ、御ふく一ゝさゑゐいらきらるゝ、めてささよろこひゐいらきらるゝ、

九日、乙亥、宮女ヲ清荒神ニ遣シ、代拜セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記

八月九日、〇中略きよしへ御代くゐんゐけさ大せゐいる、

御服ヲ賜フ

十日、丙子、幕府、大和長谷寺衆徒ヲシテ、畠山政長ヲ援ケテ、同義就ヲ討タシム、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二

八月廿七日、天一天上十六ヶ日、

一自成身院方酉下刻、長谷寺へ御教書送給之聞及、吉野へ如此同在之云々、

義就對治事、今度一段被成御内書上者、不日合力左金吾手、可被致忠節、

依戰功可有恩賞由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年八月十日　（布施英基）下野守判　（松田貞康）豐前守判

奉書ヲ金峯山寺ニ出ス

長谷寺衆徒御中

表書〳〵　大和前司元建（進）　　大和前司（飯尾元運）判

○細川政元、政長等、義就及ビ其餘黨ヲ河内攝津ニ擊タントシ、兵ヲ率井テ京都ヲ發スルコト、三月八日ノ條ニ、義政誓書ヲ政長ニ遣リ、義就ヲ宥免セザルコトヲ約スルコト、閏七月十四日ノ條ニ、幕府吉川經基ヲシテ、兵ヲ河内ニ出シ、義就ヲ討タシムルコト、十二月三日ノ條ニ見ユ、

十一日、丁丑、大神宮大宮司大中臣則長ヲ、重ネテ大宮司ト爲ス、

〔外宮引付〕

一當職重任事、宣旨井官祭主下知如此、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

十二月廿七日　　大宮司（則長）判

謹上　内一（荒木田氏經）三位殿

上卿　中御門中納言

文明十四年八月十一日　宣旨

正五位下大中臣則長

宜爲如舊伊勢太神宮大宮司、

藏人頭右中辨藤原元長奉

宣旨　中御門中納言

正五位下大中臣則長

宜爲如舊伊勢太神宮大宮司、

右宣旨早可被下知之狀如件、

八月十一日　　右中辨判（藤原元長）

大宮司大中臣則長重任事、宣下未到間、且可從神事之由、可令下知給候狀如件、

八月十一日　　左大史小槻判

謹上　祭主（藤波淸忠）二位殿

宣旨

文明十四年八月十一日

應以散位大中臣則長

伊勢太神宮大宮司事

右中辨藤原朝臣元長傳宣、權中納言藤原朝臣宣胤宣、奉勅、以許(仰カ)則長宜爲大司者、

文明十四年十二月十九日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史□□(美濃カ)介小槻宿禰判奉

祭主御教書

下　太神宮司

可早任御教書從神事

大宮司則長事

副下御教書

右任宣下之旨、可從神事、大宮司職重任事、被補則長畢、口宣並官狀如此、早被仰下之旨可被存知之狀如件、

十二月廿日　神祇大副判

大司御館

當職御重任事觸承候、存知其旨候、殊御重之任目出度、御歡喜察申候、恐々謹言、

十二月廿五日　內宮一禰宜判

謹上　大宮司殿　氏經

〔二所太神宮例文〕第九大宮司次第

則長　文明十四年八月十一日重任、已上重任五ヶ度也、

重任五ヶ度

〔河邊家譜〕大神宮司補任次第下

大中臣朝臣則長

例文云、(二所太神宮例文)〇略ス、上ニ同ジ、

司家舊記云、大司則長重任、文明十四年壬寅八月十一日宣下也、重任ノ宣下十二月廿四日京ヨリ下之間、月迫之儀依無餘日、同十五年正月十一日拜賀也、

翌年正月拜賀

〔宮司近代系圖〕

大司則長　(文明)同十四年重任、在任□年、

文明十四年八月十一日

○度會常賴、豐受大神宮禰宜ニ補セラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔元長卿記〕一御教書案　神宮奉行事文明十四九

豐受太神宮權禰宜度會常賴康久給替、宜轉補同宮禰宜、宣下未到候間、且被(可脫カ)從神事之旨、可被下知之由、被仰下之狀如件、

七月廿日　右中辨判

四位史殿

初傳奏奉書載荒木田之由、仍後日爲外宮之間、被爲度會之皇大神之由申改之、文明十四十十且改遣之、內宮荒木田也、外宮豐受度會、

〔親長卿記〕十三　十二月十五日、晴、雪時々下、○中略神宮七禰宜事、自傳奏下知、元長朝臣下知官了、任料半分致其沙汰、窮困之由歎申之故也、

〔二宮禰宜補任至要集〕外宮近代禰宜次第

常賴二康久闕替、文明十四年壬寅七月廿日任、著七坐、越朝世貞知是久著七坐、

常卿七朝世闕替、文明十四年壬寅十一月三日任、著八坐、越貞久、是久、

掃部助小早川元平ヲ美作守ニ任ズ、

〔小早川什書〕三

上卿日野中納言

文明十四年八月十一日　宣旨

掃部助平元平

宣任美作守、

藏人左少辨藤原俊名奉

第三皇子、仁尊、御方違ニ依リテ、花山院政長第ヨリ大炊御門信子第ニ移ラセラレ、尋デ、參內アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月十日、○中略ひゝ宮ゝ御ゝ

さ御ゝさゝゝへゝゑ、あんきん寺殿へなりて、あさとくよりひんゝしゝ(天炊御門信子)とう

ゐん殿へなる、御てらへ御さる二ゝ、御ゝひらけの物五色ゐいる、

十一日、けさとくひゝ宮ゝ御方、ひむゝしゝとうゐん殿へなゝ、御宮けゝ御

さる色々ゐいらきらるゝ、上らゐ返御ゐいり、御宮けゝ御まゝ二色、をり、御

さる二ゝゐいる、ひゝ宮ゝ御方もゐしゐいらきられて、御ゑきむ(さカ)あり、御さ

ちゐいる、宮の御ゝさへもゐいる、御さゝ月五こんゐいる、ゑしみ殿もゑと

御まいりゐて、御ひし〳〵ゐて、千ゑう万き寿めてさし〳〵、新大納言殿を

安禪寺宮ニ御方違アラセラル

花山院兼子禁中ニ歸參ス

新大納言局ヲ藤大納言局ト

改メラル

々ふより藤大納言とめす、花山御れ井ゑ、おりもしまて御しおうゑて申さるゝ、ゼゥ宮の御ゥさやゥてくゼん御なほ、

御製ヲ賜フ

幕府千首和歌會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三 御湯殿上日記　八月九日、廿しゆれ御き井、大納言とのへゐいらきらるゝ、御ゑうちやく御申あり、

義尚千首ノ短冊ヲ叡覽ニ供ス

十五日、〇中略大納言殿より、千ゑゆれ御さむしやくおさむゑ入らるゝ、

短冊ヲ返サセラル

十九日、〇中略大納言とのへ、千しゆれ御さんしやく返しまいらきらるゝ、

〔後法興院政家記〕七　閏七月十五日、壬子、陰、晩景雷雨、自大樹賜廿首題、千首續歌云々、來月十一日可詠進之由有其命、必可詠進由令返答、

近衛政家詠草ヲ飛鳥井雅康ニ示ス

八月九日、乙亥、晴、大樹千首內愚詠草令見飛鳥井黃門入道處、諸家競問、悉令返迫（迫カ）、其上歡樂之間、旁故障之由命之、仍相談姉小路宰相（基綱）了、

政家詠歌五首點アリ

十一日、丁丑、晴、〇中略今日廿首和歌以使者進武家、

十一月十二日、丁未、晴、俊（北小路）宣朝臣罷下越前、大樹千首中書本借按察卿書寫之、愚詠五首點アリ、

〔塵芥記十輪院內府記〕〇內閣記錄課所藏　後七月十五日、晴、及晩急雨、自大樹千首御勸進之題、以佐竹彦三郎被送下、可畏詠進之由令申了、

披講ノ人數

八月八日、〇略中廿首清書、

十日、大樹御勸進廿首清書、付佐竹進上之、

十一日、晴、參大納言殿、著狩衣、昨夕以富永五郎可參之由被命、仍晝過參候、八時分人々參集、取重千首、以大館（曾氏）、難被召御烏帽子、可有御座簾中、更非御自由之由被仰、次於御會處有披講、御文臺依仰伊勢守持參、讀師冷泉大納言（爲富）、講師元長（廿藤寺）朝臣、依無人俄被召之、發聲右衞門督（冷泉爲廣）、御製始而被申出、別而可添反數之由被仰、余仍可爲七反之由申入了、每百首卷頭軸等披講之、大納言入道計申云々、其後有一獻、湯漬冷麵以下數獻、役送皆御共衆也、細川淡路守（成春）、大館總州（曾氏）、同治部少輔、山名一（伊勢守等也、參仕人數冷泉大納言、海住山大納言（高清）、三條前大納言（公躬）、廿藤寺興長（松木宗綱）、三條西實隆）、按察、兵部卿（等貫）、侍從中納言（實胤）、中御門中納言（宣胤）、姉小路宰相、右衞門督、余等也、元長朝臣同被候座、万松軒御出座、有被仰下之事、旁珍重々々、事終始參候之人々進御太刀、申次付伊勢次郎（貞經）右衞門了、

參仕ノ人太刀ヲ進ム

十四日、〇略中又聞、先日參入之時、著狩衣之條、存古儀可然之由、上樣有御褒譽云々、

義政夫人日院通野氏秀ノ中ノ著ヲ狩衣ヲセシヲ褒ス

文明十四年八月十一日

十一月十三日、○中略千首御點愚詠六首也、過分々々、

〔親長卿記〕十三　八月十日、晴、千首御續歌二十首、今日進上大樹了、

十一日、晴、依召參大樹、千首和歌有披講、但百首上下許也、已上二十首、中納言（飛鳥井雅親）入道

申意見云々、講師奉仰云、有御製之間、武家之輩よゝ難被仰、各可計申云々、人

々云、只今參仕之內、無雲客、可如何哉、可被召他人歟、但雖被召講師等、をゝ

〻と不仕者無曲、又講師事雖勤仕、不合期者不可叶候、相兼兩方之輩可然歟、

可被召元長朝臣歟之由、人々申之、尋予、可依仰之由申之、仍伺申、尤可然之由

有仰、元長朝臣參仕、非千首御人數、勤講師、讀師冷泉前大納言勤之、參仕〻〻、

中院一位冷泉前大納言、爲富、海住山大納言、三條前大納言、公躬、放氏中也、予、中御

門中納言、宣胤、兵部卿、宗綱、侍從中納言、姉小路宰相、右衞門督等也、事畢有

一獻、五獻、御湯漬已下、大樹無御出座、如前々御座簾中、

廿一日、晴、柳營千首御續歌可被召點、可淸書之由有仰、（高倉永繼）藤中納言御使、申領狀了、

九月一日、晴、千首淸書今日付遣新（永繼）中納言了、及晩詣新中納言許、有鞠、

〔將軍家千首〕文明十四八十一　飛鳥井入道點

立春朝

甘露寺親長ナシテ淸書セシム

通秀詠歌六首點アリ

御製

朝戸あけくいはれゝ出ほ日れ影をおれし心よ春やをるらん

〻〻天

勝仁親王

ふるとしれ雪氣乃雲技へさてゐて空にしられぬ春やさつらん

〻〻日

足利義政

春きぬとふりさけそれゝあまれ原あゝまはしいつる光ゝほめり

義政

〻〻風

邦高親王

吹をくる風ゝれと巻き空れうみの雲れなみを巻春やきぬらん

〻〻霞

聖護院道興

年浪乃こえふし道ゝ をらねとも今朝立ゝゝる春霞ゝゝ

〻〻雲

道興

今朝ゝまさかをみをあへぬよこ雲れわゝるゝをまよ春やきぬらん

〻〻雪

堯胤法親王

出る日れひゝりを雪もくもりなき御空よ巻ふや春ゝさつらん

〻〻氷

持通

やゝてゝゝや氷ゝと者てわゝ水をむをひゝへさる今朝れ初春

一位局

文明十四年八月十一日　六〇五

青蓮院尊應

〻〻水

水よ先春れ心をゝらせはいくさく岩井れあさこやりゝゐ　尊應

九條政基

〻〻都

のとゝなる花れゝやこも巷ふけらに風おさまりて春や立らん　政基

實相院増運

早春山

春やゑり煙いおれしぬしれねのめつらし巷よも霞そめぬゑ　増運

近衛政家

〻〻關

東よりいく關ゝえて逢坂乃とまやもかせむ春いきぬらん　政家

足利義尚

〻〻河

今朝よりい氷うちとけよしれ川いせ波ゑゝく春とけく也　義尚

久我通博

〻〻湖

波乃うへをゝほをわさりて春ゝけさ載てやきぬるゝゝれ浦舟　通博

萬松軒等貴

〻〻浦

浦とをくかせむ空みえてゝやゝまれ煙よりこそ春いい立々れ　等貴

野子日

春ゝらぬ軒とれ松乃ゝ巷さひく絲のひする野に人い出らん　禪空

轉法輪三條實量

〻〻松

子日して君ゝさめよ空引つれいちょや二葉れ松の行末　實遠

西園寺實遠

〻〻祝

千代乃ゝ巷とけふより契る君よこき野への小松も心ひくらん　信量

大炊御門信量

山霞

筑波山をねよりおつる色もなしかせを乃淵のみとりそふ比　實淳

德大寺實淳

嶺〻

みよしれゝ花も匂いぬ春の色の青根ゝをねや先かせむらん　舊院上臈

舊院上臈

野〻

住よしやと狩里をれゝ朝やら巷松風と狩くかせむ春哉　通秀

中院通秀

關〻

わきてしを名よ立ぬとや東路乃かせみの關い先かせむらん　權大納言典侍

權大納言典侍

徑〻

分ゆけいかせみのうちもはさゝよてよそめそゑとる道のへの末　爲富

冷泉爲富

海住山高清

橋〻　よさの海や雲つけおとめのともし火も波よかすめるあまれ橋立　高清

花山院政長

江〻　ぬるき江れ浪いろすみよ立うへく長閑よ成ぬ四方れうら風　政長

一條冬良

瀧〻　春さむゝ氷の下れ音羽川うすゝいろりや瀧のしら波　冬良

正親町三條公躬

河〻　芳野川なゝれていつる波乃花よ霞乃おくれ春そ去らゐゝ　公躬

甘露寺親長

海〻　貝ひろふきよきおきさをゐとるらしかもむ伊勢おのあまの通路　親長

中御門宣胤

湖〻　朝朗いつる小舟いかすきえてかもみそうろふよこれ水うゝ　宣胤

松木宗綱

濱〻　朝ほら〻霞よおもる浦風れやとりをゝにる去うれ濱まつ　宗綱

町廣光

鹽竈乃浦波かもむ朝れ〳〵はうきれ嶋の名をいへさてに　廣光

三條西實隆

渡〻　漕舟れ行ゐをとをくきゆるあもれなるとやいつこかすむ海いら　實隆

滋野井教國

里〻　山れもの〻すむ朝〻よ立つゝく麓れ里や〻ふりなるらん　教國

冷泉政爲

舊巣鶯　かもみよや猶おもらまし鶯れ雪のぬる巣い出て鳴とも　政爲

姉小路基綱

初〻　う〻おひく宿れ木もゐのたうき枝ようつる初音をいそく鶯　基綱

冷泉爲廣

雪中〻　〻ふひうん小松い雪にうゝもれく初音ゐらする野邊れ鶯　爲廣

勾當内侍

曉〻　春れよの夢うゝはゝかいといやも寢覺ことゝふ鶯れ聲　勾當内侍

飛鳥井雅俊

朝〻　やとれというへぬそとをれ呉竹にあされ〳〵乃鶯れこゑ　雅俊

一色義直　夕〻　ゆふゐく日山れ端とをく入り迄に心おりけそ園れうくひも　義直

大館尙氏　里〻　谷れ戸を今やいつらん朝まさき沼もとれ里のうくひすの聲　尙氏

大嶋高秀　山家〻　山ぬゐゝ所らなるかくれ家をれれとひくる鶯乃聲　高秀

二階堂政行　竹〻　山里ゐりとをれ竹に宿しめくふもとをめくるうくひもれこゑ　政行

伊勢貞頼　寐覺〻　竹ちゐき聞れはくらにおとろくや鶯さそふ春れ夜の夢　貞頼

星野政茂　野若菜　朝こゐりくさくとにをと春寒き野さいれ根せり水ゐくれよして　政茂

武田持明　原〻〻　故郷のみゐきれいらに今をゑれ雪間汝分て若おゐ摘らん　玄就

水邊〻〻　氷とく水れ煙の下もえもゐ川あらいれくつむゐりおりおゐ　頼行

河内頼行　澤〻〻　根芹おふる雪迄れさいよ白妙れ衣手ぬをて誰ゐ摘らん　宗伊

杉原賢盛　田〻〻　所ゐら名よおふ春れ櫻田に先もえいつる若菜摘也　明親

左脇明親　岡〻〻　松の葉も雪間あらいよ朝日ゐ迄さすやおりへのゐりお摘也　光清

小田光清　草殘雪　うちとくゑ雪れ下草色つきて若葉よかゝゑ野への朝露　政孝○コ

杉原政孝

ノ外、木殘雪、餘寒月、〻〻風、〻〻氷、梅雪、〻風、夜梅、故郷〻、里〻、庭〻、簷〻、隣家、移水、〻薫袖、〻香、折梅、若木〻紅、〻落〻、柳露、池柳、河〻、岸〻、門〻、路、若草、岡早蕨、樵路〻〻、山春月、關〻〻、江〻〻、春曉月、春月幽、朝春雨、夕〻〻、谷〻〻、野〻〻庵〻〻、春駒、岡雉、野雲雀、路〻〻、歸鴈、知春、曉歸鴈、夕〻〻、夜〻〻、歸鴈、連雲、嶺歸鴈、海〻〻、歸鴈似字、〻〻幽、遠歸鴈、春山、〻〻、野、春關、〻河、〻海、野遊、遊絲、待花、栽〻、尋〻、初〻、見〻、翫〻、折花、交〻、曉〻、朝〻、夕〻、夜〻、山〻、嶺〻、谷〻、岡〻、杜〻、野〻、關〻、瀧〻、禁中〻、社頭〻、古寺〻、故郷〻、里〻、山家〻、庭〻、閑居、花、雲、〻雪、〻梢、〻枝、〻本、〻根、花挿頭、花手向、〻麻、〻袂、〻衣、〻鏡、〻錦、〻匂、〻色、〻便、〻主、〻面影、〻形見、惜花、落〻、殘〻、三月三日、桃花、梨〻、山田苗代、路〻〻、河（河邊）、〻夕蛙、田〻、野菫、庭〻、摘〻、松下躑躅、躑躅紅、池杜若、澤〻〻、款冬露、夕款冬、路〻〻、池〻〻、河〻〻、島〻〻、岸〻〻、庭〻〻、籬〻〻、夕藤岡〻、池〻、江〻、浦〻、岸〻、松〻、春欲暮、暮春月〻〻、里〻〻、雲〻〻、霞〻〻、鐘、留春不駐惜三

月盡、三月盡夕、ミミミ夜、閏三月盡、首夏、朝更衣、更衣借（惜）春、餘花、新樹、路卯花、籬 ミミ田家ミミ卯花似月、ミミ似雲、葵、待郭公、尋ミミ人傳ミミ始聞ミミ、郭公

未遍、月前郭公、雲外ミミ、雨中ミミ、曉ミミ、曙ミミ、朝ミミ、夕ミミ、夜ミミ、山ミ ミ杜ミミ、岡ミミ、野ミミ、原ミミ、關ミミ、浦ミミ、渡ミミ、夢中ミミ、寐覺ミミ、獨

聞ミミ郭公、幽田家早苗忩ミミ、早苗多、池昌（菖）蒲沼ミミ、苅ミミ、盧橋薫風、雨中 盧橋、簷ミミ、樗、夜五月雨、山ミミミ、杣ミミミ、橋ミミ、江ミミミ、瀧ミミミ、河

ミミミ、湖ミミミ、浦ミミミ、故宅ミミミ、夜水鷄、夏夜雲間夏月、水上ミミ、樹陰 ミミ夏月凉ミミ易明瞿麥、露庭瞿麥、夏草露、杜夏、草野ミミ、徑ミミ、庭ミミ、夏

山、ミ野照射、鵜川、夜螢、橋ミ、水上ミミ、池ミ、江ミ、澤ミミ、浦ミ、草ミ、螢似露、ミ似玉、蚊 遣火、牆夕顏、池蓮、氷室、夕立、風ミミ、雲山夕立、河ミミ夕立、早過、杜蟬、樹陰ミ松

下水、夕納凉、樹陰ミミ、納凉忘夏、六月祓、立秋朝ミミ、天ミミ、日ミミ、風ミミ、露 初秋曉ミ夕ミミ夜ミミ雲ミミ衣待七夕七夕雲ミミ霧ミミ橋ミミ衣ミ

ミ舟、ミミ後朝、曉露、朝ミ、夕ミ、夜ミ、野ミ、原ミ、徑ミ、故鄕ミ、庵ミ、庭ミ、草ミ、淺茅 ミ苫ミ袖ミ枕ミ夕荻夜ミ江ミ庭ミ簷ミ野萩行路ミ河ミ崎ミ庭ミ女耶花

靡風野女郎花、徑ミミミ、岡薄原ミ、徑ミ、苅萱亂風、岡苅萱、庭ミミ、蘭薫風ミ露 野蘭籬槿曉虫夕ミ夜ミ野ミ原ミ徑ミ庵ミ庭ミ閨ミ聞ミ曉初鴈夕ミミ夜

ミミ、雲間ミ、山ミミ、嶺ミミ、遠ミミ、近ミミ、初聞、鴈初鴈、幽朝、鹿夕ミ、夜ミ、山 ミ谷ミ岡ミ野ミ原ミ海邊ミ田ミ野鷄江ミ里ミ曉鳴澤ミ田ミ秋田風ミミ

露、秋雨、山霧、野ミ、關ミ、河ミ、浦ミ、駒迎、八月十五夜、夕月夜、ミ曉ミ、山ミ、嶺ミ、谷 ミ杣ミ岡ミ杜ミ野ミ原ミ關ミ徑ミ橋ミ水邊ミ池ミ澤ミ沼ミ江ミ瀧ミ河

ミ湊、ミ湖、ミ浦、ミ濱、ミ磯、ミ汀、ミ崎、ミ島、ミ潟、ミ泊、ミ渡、ミ田、ミ都、ミ禁中、ミ社 頭ミ古寺ミ故鄕ミ村ミ里ミ山家ミ菴ミ庭ミ井ミ閨ミ隣ミ閑居ミ舩ミ惜

ミ夜擣衣、里ミミ、聞ミミ、遠ミミ、近ミミ、秋夜長、野分、葛風、徑葛、牆ミ、野草欲枯 栽菊菊露山菊谷ミ水邊ミ尋紅葉初ミミ蔦ミミ柞ミミ櫨ミミ山ミミ嶺ミ

ミ谷ミミ、岡ミ、杜ミミ、行路ミミ、瀧ミミ、河ミ、岸ミミ、古寺ミミ、遠樹ミミ 里ミミ牆ミミ庭ミミ簷ミミ松間ミミ竹間ミミ紅葉增雨ミミ映日ミミ移

水ミミ如錦、暮秋風ミミ、雲ミミ、露ミミ、雨ミミ、霜、九月盡、夕ミミミ、夜ミミミ 曉初冬曉ミミ朝ミミ時雨山ミミ嶺ミミ谷ミミ杜ミミ關ミミ野ミミ河ミ

ミ里ミミ、閨ミミ、曉落葉、朝ミミ、夕ミミ、落葉隨風、ミミ混雨、山落葉、谷ミミ、路 ミミ橋ミミ庭ミミ野霜田ミ庭ミ草ミ篠ミ谷寒草岡ミミ野ミミ原ミミ庭

ミミ池寒蘆、江ミミ、湊ミミ、谷氷、瀧ミ、湖ミ、田ミ、懸樋ミ、冬寒月、冬月冴、曉千鳥 夜ミミ河ミミ浦ミミ濱ミミ池水鳥河ミミ夜網代網代寒竹霰篠ミ柏ミ屋

上ミ、寐覺ミ、初雪、山ミ、嶺ミ、谷ミ、杣ミ、杜ミ、野ミ、關ミ、河ミ、湖ミ、浦ミ、濱ミ、島ミ 田ミ都ミ禁中ミ社頭ミ古寺ミ故鄕ミ里ミ閑居ミ松ミ竹ミ杉ミ檜ミ狩場

風、夕鷹狩、野ミミ、炭竈煙、遠炭竈、爐火、神樂、佛名、年內早梅、年欲暮、夜歲暮、山ミ ミ路ミミ河ミミ歲暮松山家歲暮閑居ミミ老後ミミ惜ミミ寄天戀ミ日ミ

ミ月ミミ、星ミミ、風ミミ、雲ミミ、煙ミミ、霞ミミ、霧ミミ、露ミミ、雨ミミ、霜ミミ 霰ミミ雪ミミ稻妻ミミ曉ミミ朝ミミ晝ミミ夕ミミ夜ミミ山ミミ嶺ミミ

谷ミミ、岡ミミ、杣ミミ、杜ミミ、野ミミ、原ミミ、關ミミ、徑ミミ、橋ミミ、水ミミ、池 ミミ沼ミミ江ミミ瀧ミミ河ミミ淵ミミ瀨ミミ湊ミミ海ミミ浦ミミ濱ミ

ミ磯ミミ、汀ミミ、崎ミミ、島ミミ、潟ミミ、泊ミミ、渡ミミ、岸ミミ、石ミミ、砂ミミ 巖ミミ田ミミ都ミミ禁中ミミ社頭ミミ寺ミミ里ミミ庵ミミ門ミミ戸ミ

ミ牆ミミ、籬ミミ、庭ミミ、井ミミ、屋ミミ、柱ミミ、簷ミミ、窓ミミ、床ミミ、閨ミミ 隣ミミ簾ミミ初草ミミ忍草ミミ忘草ミミ思草ミミ月草ミミ下草ミミ葵

ミミ昌（菖）蒲ミミ、薦ミミ、菅ミミ、葛ミミ、萱ミミ、淺茅ミミ、蓬ミミ、芝ミミ、苔ミミ 蘋ミミ藻ミミ沼繩ミミ海松ミミ松ミミ椿ミミ榊ミミ杉ミミ檜ミミ槙ミ

ミ椎ミミ、桂ミミ、檜ミミ、柏ミミ、桐ミミ、柞ミミ、櫨ミミ、楸ミミ、常盤木ミミ、杣 木ミミ宿木ミミ鹽木ミミ朽木ミミ埋木ミミ鶯ミミ雉ミミ郭公ミミ水鷄

ミミ鴈ミミ、鶉ミミ、鳴ミミ、鵙ミミ、千鳥ミミ、鳩ミミ、鳰ミミ、鶯ミミ、鴫ミミ、鵜 ミミ鷺ミミ鵲ミミ鷹ミミ山鳥ミミ鷄ミミ鶴ミミ熊ミミ虎ミミ駒ミミ猪

ミミ鹿ミミ、蝶ミミ、蛙ミミ、螢ミミ、蛬ミミ、松虫ミミ、鈴虫ミミ、促織ミミ、蛛ミ ミ蛩ミミ我柄ミミ玉ミミ鏡ミミ篋ミミ櫛ミミ鬘ミミ本結ミミ枕ミミ席

ミミ衾ミミ、衣ミミ、裳ミミ、紐ミミ、帶ミミ、書ミミ、繪ミミ、硯ミミ、筆ミミ、笛ミ ミ箏ミミ弓ミミ箭ミミ扇ミミ蓑ミミ笠ミミ絲ミミ錦ミミ採頭ミミ手向

ミミ袚麻ミミ、木綿ミミ、四手ミミ、注連ミミ、車ミミ、舟ミミ、機ミミ、帆ミミ、碇 ミミ苫ミミ網ミミ泛ミミ筏ミミ篝ミミ網ミミ繩ミミ澁盡ミミ貝ミミ斧

ミミ筌簀ミミ燈ミミ鐘ミ山榊嶺椿澗槙麓柴杣檜杜柏岡椎濱楸磯松門杉 窓竹籬草庭苫簷忍草岸忘草野篠路芝沼蘆江菅河藻名所山ミミ嶺ミミ岡

ミミ杣ミミ、杜ミミ、野ミミ、原ミミ、關ミミ、路ミミ、橋ミミ、池ミミ、澤ミミ、沼ミ ミ瀧ミミ河ミミ海ミミ湊ミミ湖ミミ浦ミミ濱ミミ磯ミミ汀ミミ崎ミミ

島、〃潟、〃泊、〃渡、〃田、〃河、〃湊、〃里、〃濤、〃市、〃橋中山、〃浦、〃嶺、〃原、
〃關、〃路、〃橋、〃河、〃里、〃山家春、〃雨、〃夏、〃秋、〃冬、〃濱、〃野、〃磯、〃原、
〃汀、〃島、〃夕、〃潟、〃夜、〃渡、〃風、〃泊、〃雲、〃煙、〃路、〃水、〃庵、
曉、〃朝、〃雲、〃草、〃煙、〃苔、〃雨、〃木、〃鳥、〃虫、春夜夢、夏、〃秋、〃冬、〃曉夢、短、〃夢
〃驚、寄、寐風、覺無常、雲、懷舊、涙、獨、懷露、舊、老後、雨中懷舊、深夜非一、寄日述懷、〃月、〃閑居、〃夢中、〃星、〃
〃、〃風、〃關、〃雲、〃路、〃煙、〃橋、〃露、〃沼、〃雨、〃江、〃霜、〃河、〃雪、〃瀨、〃山
海、〃浦、〃伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、布留、大原野、住吉、日吉、
梅宮、吉田、祇園、北野、貴布禰、出雲、三輪、玉津嶋、熊野、如是相、〃性、〃躰、〃
力、〃作、〃因、〃緣、果、〃本末究竟等、地獄界、餓鬼、〃畜生、
〃修羅、〃人、〃天、〃聲聞、〃緣覺、〃菩薩、〃佛、〃寄天祝、〃日、〃月、〃星、
〃雨、〃風、〃國、〃郡、〃都、〃道、〃水、〃巖、〃苔、〃
竹、〃松、〃椿、〃榊、〃杉、〃鶴、〃龜、〃ノ歌アレドモ略ス、

僻案愚點二百三十首

榮雅上

御製　十首　親王御方　六首　室町殿　十一首
式部親王　五首　梶井二品親王　三首　前關白　四首
九條前關白　二首　關白　五首　一位殿　七首
前大僧正道興　五首　天台座主尊應　四首　前大僧正增運　七首
大納言殿　九首　太政大臣　四首　宗山　三首
三條入道前左大臣　六首　右大臣　六首　前內大臣　五首
內大臣　五首　舊院上臈　五首　中院一位　六首
權大納言典侍　四首　冷泉前大納言　二首　海住山大納言　五首
花山院大納言　二首　左大將　四首　三條前大納言　三首
按察使　四首　中御門中納言　一首　兵部卿　三首
日野中納言　三首　侍從中納言　七首　滋野井前宰相中將　三首
侍從宰相　四首　姉小路宰相　八首　右衞門督（一色修理大夫）　五首
勾當內侍　四首　雅俊　三首　義直（二階堂山城判官）　七首
尙氏（大館式部少輔）　三首　高秀（大嶋兵庫頭）　二首　政行（武田中務大輔入道）　四首
平貞賴（伊勢二郎左衞門尉）　四首　政茂（星野宮內少輔）　三首　沙彌玄就（左脇左京亮）　二首
沙彌宗伊（杉原伊賀入道）　八首　賴行（河內民部大輔）　二首　源明親　三首
紀光淸（小田民部丞）　五首　平政孝（杉原七郎）　四首

十五日、辛巳、聯句及ビ和歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕（甲二十三御湯殿上日記）　八月十五日、〇中略　いつをの御
連く御さゝあり、をんき御ゐいり、およひの御さゝ月ゐいる、ゑふれ御さん

ざくりさまらるゝ、

廿日、○中略入道左ふより御てんれ物ゐいる、（轉法輪三條實量）

〔塵芥記十輪院内府記〕○内閣記錄課所藏　八月十五日、少々詠和歌、入夜清明、有御聯句百句、

曉天事終、

〔和歌部類〕一　文明十四年八月十五日、點入道左府、

池月　勾當内侍

くもなたこよひの月ゐ池水の底の玉もゝ光そふらし○以下十八首

略ス、

月前鴈　親長

心有て鴈もきにゝり名ゐしれふ月ゐやちきる秋の半ゐ○以下十八首

略ス、

寄月神祇

なひゐあひて名高き月ゐゝゆきをる神ゐゐゐゐゐや萬代乃あき○以下十八首

略ス、

僻案悪點二十五首　禪空上（轉法輪三條實量）

御製、○三首　親王御方、○二首　式部卿宮、○一首　仁和寺宮、○一首　勸修寺宮、○二首　勾當内侍、○二首　正親町中納言、○一首　侍從中納言、○一首　滋野井前宰相中將、○二首　四辻宰相中將、○三首　言國朝臣、○三首　俊量朝臣、○一首　元長朝臣、○二首　源富仲、○一首、コノ外無點ニ甘露寺親長、松木宗綱、白川忠富、萬里小路賢房、櫂大納言典侍ノ五人アリ、

〔雪玉集〕三秋

池月　文明十四八十五點取

やどりゝりこゝそ泊と池水をゝめるゐ月の御船うゝへて○懸點アリ、

月前雁　文明十四八十五點取

影やまつまさこ乃上ゐおちつらんくもらぬ月ゐわさるゝりか孫

寄月神祇　文明十四八十五點取

くもらぬを神の心ゐゐゐめしとや末の世ゝ迄て月ゐすむらん

壇周清ヲ石清水八幡宮護國寺撿挍ニ還補ス、

社務義政ノ執奏

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月十五日、○中略八ヒされしやむあらさめらるゝこと、むろまち殿より御ゑつそう御申のよし、てんそうより申さるゝ、

〔石清水八幡宮記錄〕二○山城宮緣事抄　石清水八幡宮護國寺撿挍補任次第

至七十四代宋清、反古抄記之、

九十六　周清　文明十四年八月十五日宣下、

〔石清水祠官系圖〕周清　文明十四年十月五日還補撿挍、

應仁ノ亂ニ火ク本堂立柱上棟成就院願阿ノ功ヲ褒セラル

十八日、甲申、京都清水寺造立事始、

〔長興宿禰記〕下　八月十八日、甲申、晴、今日東山清水寺造立事始也、諸人群詣云々、一亂中燒亡、勸進聖十方檀那進之令造營云々、

廿二日、戊子、晴、今日清水寺本堂立柱上棟也、

〔親長卿記〕十三　九月十三日、晴、○中略願阿申、清水寺造營神妙之由、可被下勅裁之由奏聞、勅許、

十五日、晴、○中略今日願阿上人來、

〔如是院年代記〕壬寅（文明）十四閏七月十八日清水寺新始、

新始

癸卯（三月）十五同二十八日清水寺棟上、

〔武家年代記〕下裏書　同（文明）十五年二廿八清水寺棟上、以勸進造之、

○清水寺成就院願阿、同寺ヲ再建セントシ、其資ヲ諸國ニ募緣スルコト、十一年三月是月ノ條ニ、幕府、願阿ノ再建勸進ノ爲メ、九州ニ下ルニ依リ、守護島津武久ヲシテ、其分國大隅、薩摩及ビ日向ニ助緣セシムルコト、同年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

棟上

前石清水八幡宮護國寺撿挍田中生清、所領ノ地ヲ、其子奏清等ニ讓與ス、

〔石清水八幡宮記錄〕一○山城宮緣事抄　生清讓狀正文

讓狀

讓與

田中門跡一跡事

一奏清分

山上山下坊同敷地門跡相續等事、悔是非之沙汰者也、可令相傳云々、

奏清分

一敎濟分○以下闕ク、

敎濟分

一元貞

元貞

元貞一期之間、每年伍貫文、於讃州鴨部、

文明十四年八月十八日

清玉丸

一清玉丸

同一期之間、毎年伍貫文、丹州於柏原庄、

此外爲衣料分毎年拾伍貫文、以筥崎年貢無相違之儀可有支配、是ハ可然

間入寺坊等無之間、五智輪院一宇之可爲坊主者歟、

あかく

一あかく

同一期之間、毎年伍貫文、以筥崎年貢可有支配、

石鶴

一石鶴

伍貫文同前、以柏原可有支配、

ていさい御料人

一ていさい御料人

伍貫文同前、以鴨部年貢可有支配、

あこ御料人

一あこ御料人

伍貫同前、以筥崎年貢可有支配、

祢ゝ

一祢ゝ

毎年拾伍貫のふんゆつりあたへ候、この内五貫はつくしよりたうらいにて、五貫はかやはら、五貫はさぬきよりたうらいの時、別而しはいもあるへく候、

右譲與之狀如件、

文明十四年八月十八日　生清

政長方打タル

○生清、石清水八幡宮護國寺撿校ニ補セラルヽコト、七年九月二十六日ノ條ニ、歿スルコト、明應七年八月十八日ノ條ニ見ユ、

十九日、乙酉、攝津廣田社、占文ヲ上ル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月十九日、ひろ田れやしろよりれうらゝさとて、頭辨（勧修寺政顯）よりゐいる、

畠山政長、和泉石津ヨリ、同國堺南莊ニ入リ、尋デ、同義就ト河内十七箇所ニ戰フ、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　八月廿日、

一左衞門督（畠山政長）昨日自石津入南庄云々、右衞門（同義就）佐方譽田向寺云々、不得其意如何、

廿一日、

一昨日於河内有合戰云々、左衞門督方四十人計被打云々、

筒井順尊　成身院盛尊　筒井順尊　粏田箕田　十市遠相　箸尾爲國　菅田尾田　若江入部　江入部　保田　政長八尾　政長方ノ死傷　大乘院尊順　尊等　酒肴ヲ贈ル　義就ハ熊野衆徒北畠政郷ノ

廿五日、辛卯、天一子、

一筒井（順尊）、成身院（順盛）、安樂坊各入部筒井了、粏（稗カ）田箕田燒拂之云々、十市（遠相）、箸尾（爲國）菅田ニ入部云々、

廿七日、天一上十六ヶ日、

一官領（管下同ジ）ハ河内之國中矢尾（八下同ジ）之西歟、平野ニ打入、堺南庄幷向寺ハ不持之歟云々、一向一手ニ成テ、若江ヲ可沙汰用云々、

廿九日、土用、

一一昨日於十七ヶ所合戰在之、傳說歟、神寶（保）八郎自越中國大將云々、同名一人、筒井之代官小和田父子、鷹山之代官西岡十六七人被打云々、又必定去月古市申給之、於小和田者負手無大事歟云々、

九月八日、

一筒井、成身院、十市三人出頭方ヱ、樝二荷、唐布二合、卷數一合宛遣之了、兩方足輕等六借、仍古市方ニ仰合、使者以下送窪城邊、自彼所所々送之了、定而無相違歟、

一奘舜自南邊來、兩方樣きと不可成歟、右衞門佐方ハ熊野三山以下勢、伊勢國司勢以下相待、出陣、左衞門督方ハ越中勢、赤松勢上洛相待之、仍自他足輕外ハ不及合戰、矢尾悉以自左衞門方發向之、十七ヶ所ハ十ヶ年万雜公事免之、自右衞門佐方一國中万雜公事三ヶ年免之、一國德政行之、人民悅無是非云々、十市箸尾歸宅事、きと不可成云々、所詮寺社惣別迷惑不可及是非云々、

九日、

一筑前（長田家則）守來、河内國中樣大綱相語之、去月幷當月三日ニ至、澤、秋山ハ罷出、國司勢事ハ無實說云々、官領勢千五百餘ニ見了、右衞門佐方大勢ニ見由、及其沙汰云々、

十三日、天晴、

一郡山合戰在之、寄手野奥胤弘之息被打了、其外寄衆濟々打死、今日大荒祭禮也、不可然事也、罰也云々、

十五日、

一於郡山合戰、寶來手迷惑云々、無殊事、

援軍ヲ待　政長ハ越中勢ノ赤松政則ノ軍ヲ待ツ　政長ハ尾向ニ發ス　十七箇所ニ十ヶ年間公事ヲ免ス　萬雜公事ヲ免ズ　義就ハ河内ニ入ル　一國德政ヲ行ズ　公事萬雜免ス　政郷ノ秋部　下澤某　山田某　陣

郡山合戰

義就ハ譽田城ニ居ル
守口城落ツ

〔一〇中略十三日於河内合戰在之、官領方勢多以損云々、無殊儀、

〔大乘院日記目錄〕三　八月十九日、官領入部堺南庄云々、

廿日、河内合戰、

廿七日、筒井十七ヶ所ニ入部、小和田以下濟々被打死了、不及入部之由、雜說共有之、

廿八日、十七ヶ所沒落了、筒井知行云々、大將小和田父子、

□日、筒井以下入國了、

〔長興宿禰記〕下　八月廿六日、壬辰、晴、〇中略是日聞、昨日畠山金吾自泉堺出陣、向河内國、被居橘嶋、猛勢數ヶ所取陣、敵右衞門佐在譽田城云々、先年沒落南都、國民筒井以下各歸國令歸館云々、敵越智右衞門佐同意、引退在自館云々、

九月二日、戊戌、晴、今日聞、一兩日中於河内有合戰、守口城沒落、敵御方打死五六人在之、十七ヶ所牧等被追散、左金吾御方知行云々、

〔粉河寺舊記〕五　〇上略、閏七月十九日ノ條ニ收ム、同廿一日、北河内橘嶋へ陣かへ、

〇政長、攝津ヨリ和泉石津ニ移ルコト、閏七月十九日ノ條ニ見ユ、

二十三日、己丑、權僧正西室公惠ヲ東大寺別當ニ還補ス、

〔實隆公記〕〇文明十五年正月一日裏文書

返獻

宣旨一枚

權僧正公惠宜如舊爲東大寺別當事

右宣旨早可令下知給之狀如件、

（文明十四年）八月廿三日　權中納言實隆

〔大乘院日記目錄〕三　九月十三日、東大寺傳害會、田樂頭實乘坊僧都、寺務西室公惠今度再任、第三度歟、不能出仕也、

〔東大寺別當譜〕第一百六十五　僧正公惠、第三度、西室、任年月日不知、維摩會云、長享二年別當西室公惠僧正任、第三度云々、

〇公惠、東大寺別當ニ補セラルヽコト、寬正六年八月十四日ノ條ニ、罷メラルヽコト、應仁二年閏十月七日ノ條ニ、義視ニ依リ、再補セラルヽコト、文明元年是歲ノ條ニ見ユ、

二十四日、庚寅、攝津守護細川政元、新開次郎右衞門尉ヲシテ、同國榎竝四箇所ノ地ヲ知行セシム、

白江次郎等閑所地

〔古文書纂〕三〇京都帝國大學所藏

攝津國欠郡榎並四ヶ所內散在田畠、白江次郎、同父西平親類被官人等跡事、今度令御敵同意候間、爲闕所被宛行之上者、宜被全領知之由候也、仍執達如件、

文明十四　八月廿四日　　元右（花押）

新開次郎右衞門尉殿

二十五日、辛卯、幕府月次和歌會、

〔親長卿記〕十三　八月廿五日、晴、柳營御月次、自今月可詠進云々、兼日給題、予今朝參御禮、進上御太刀了、

二十六日、壬辰、義尙、生母日野氏卜共ニ、伊勢貞宗ノ第ニ臨ミ、犬追物ヲ觀ル、

〔長興宿禰記〕下　八月廿六日、壬辰、晴、今日伊勢守貞宗所馬場有犬追物、將軍大納言殿渡御、百疋有御撿見、御母儀御臺、渡御、有御見物云々、

二十七日、癸巳、第三皇子（仁尊）、圓滿院ニ赴カセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月廿七日、○中略　ひの宮ゝ御方、くもちやうゝ御あさむとてなる、

二十八日、甲午、義政、遊山シテ、穫ル所ノ茸ヲ獻ズ、御製ヲ賜ヒテ、之ニ酬イサセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月廿八日、々ふれ御さゝ月ゐいる、むろまち殿より、山よりてれ御あそひとて、いくち、茶をさけれ御ふさゐいる、たもしろくおやしめす、御心のうち御き丹ともよて、御返事御申あり、

（頭書）ゐあさよりひつゝさそひてゐいらきらるゝ、夜よ入よより、ふ行ともをのゝ〳〵よをくらきられて、ひゝしうもちてまいる、御返歌ともたをしろき御うさゐゐ、

二十九日、乙未、義政夫人日野氏、故一條兼良ノ女ヲ猶子トシ、尋デ、寶鏡寺本光院（義尙姉）ニ入室セシム、

一條兼良ノ遺言本光院ノ內十七ヶ所ヲ河內領スヲ

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　八月卅日、

一予妹小姬君、七歳、御臺御方御猶子分ニ、今日公方へ被申入之、南御所（本光院）可爲御弟子云々、後成恩寺殿（一條兼良）依申置之也云々、南御所ハ河內十七ヶ所之領主也、

九月一日、

本光院ハ義尚ノ姉

一新左衞門昨夕下向、家門御書共持來、色々世上樣相語之、姫君ハ俄ニ廿九日ニ公方へ被參、則南御所ヱ入室珍重之由云々、當南御所ハ御臺腹、新將軍之姉也、

三日、

一新左衞門尉上洛、御返事共進之云々、

尋尊ノ姉妹皆日野氏ノ猶子トナル

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十二月三日、

一自三條殿御文到來、予妹今日御臺御計ゑて、自公方入室本光院殿、一腹の兄弟姉妹各御臺之爲御子、希有果報也、

三條局書狀

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　○文明十四年十二月二十三日裏文書

御所さゑ五日御さんやうと、御ちやうもんと御いて候やとこ、わさと人をくゑしゐいらき候、さて〳〵ひめ君の御りゑい、上さゑことのやう御いとしかりゐいらきられ候て、うつくしく云ゑてられ候て、□□ゐいられ候事ゑて候、御心やすくおほしめし候へく候、又御あゑ御所い、をもしへ御やくそくゑて御入候つれとも、やんくうい(見脫)んより申りゐく御申候、これもくいうへ申され候て、おしゐいられ候、よのつゑ御くゐやうゑてこそ候へ、

本光院ノ懇望

をもしへい人をくゑし候て、あんゐ申候、まつ〳〵御心やすくおほしめし候とて候、ちきしいん殿より、よろついろ申ゐいらさせおゑしはし候、この月三日ニ御てらゐやうていれゐいり候、よろつゑ申つくしりゑく候、こゝやとやや〳〵御二御所おゐら御心やすくおほしめし候へく候、我々もういやくゐけいゑてこそ候へ、よろつ御身つゐらをこし入ゐいらきられ候□のよし□給候、二もしのひもしさゑまゑ□云おしゐいらきられ候て、せうしゑて候、□(あカ)てゑく又々申入候へく候、このよし申給候、御ちや御入候いゝ、ちとこの物ゑ給候いゝ、御うれしく候へく候、

御ちこの御中申給へ　□

法華寺秀高書狀

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　○文明十四年十二月廿日裏文書

昨日やゐいの物給候、御うれしく思ひゐいらせ候、ちやうろうより申とて候、人夫とも返々御うれしくおほしめし候、めてゑく御ゑうらい候て、めうとく方事、御すまし候へく候、ふんし入候、又東ゑう廿一日御かくれ候、この十日まて御きちゆうこて候よし、おやき事候、又ひきうへゐゐつゐさとのゑい、めてゑくわゐ君いてき候よしうけ給候、一條とのゝ御ゐつしき御所

本光院ハ天下一ノ分限者

關白職ニ就キテ北野社ニ立願ス

ん、又三日よりんくゐういんへ御よせつ候、天下一せんのふ尭んしやとき
こゑ候てしよ御かり候、めてたく御心やすく思ひゐいらき候、やうちやう
ゐきらとのよて候、光明いんいもうとこて候、さいゐよ三日御せんやうか
う御入候かとゝきゝゐいらき候、返々御かつしきせ去んいん御へんりい
よて候よし候、御てしよ御かり候、御心やすく思ひゐいらき候、このよし御
ひろう候へく候、

大きういんとのゐいる御ちこ御中申給へ　秀高

〔大乘院日記目錄〕三　十二月三日、予妹入室本光院殿、

〔攝家系圖〕一條殿流　兼良

女子（從三位源鄕女）母同、丙申歲誕生、南御所御弟子、文明十四年八月廿九日入室、御臺御猶子、

近衛政家、三十首和歌ヲ詠ジテ、北野社ニ奉納ス、

〔後法興院政家記〕七　八月廿九日、乙未、晴、令參詣三社如例、就當職之儀、三十首和歌聖廟江可詠進之由、有立願事、今日令詠進了、

中院通秀、義尙ニ鞠ヲ贈ル、

〔塵芥記〕十輪院內府記　〇內閣記錄課所藏　八月廿九日、鞠一足進大樹了、以佐竹付伊勢二郎（貞親）左衞門尉、近日被尋之物也、進上御悅喜之由被仰、布施猶不來歸云々、

三十日、丙申、犬死ノ穢ニ依リ、神祇伯資益王ヲシテ代拜セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二御湯殿上日記　八月卅日、〇略中　昨日より尭んしれゐよて、御ゑ寸れ御代くゐんをくよおやせらるゝ、

〔資益王記〕八月卅日、遙拜之後、自內裏御代官御拜事、被仰下之間、則勤仕、昨日於禁中依犬死穢也、

義政、草子ヲ進覽ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　八月卅日、なりさよより、御さ（ちゝろ）

うしゐる（うかしう）、

是月、畠山政長、紀伊池田莊ヲ同國大傳法院ニ寄進ス、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　八月十一日、

一傳聞條々、〇略中

紀州池田庄事、自官領令寄進根比（來）山了、成身院所存且如何、又西南院可迷惑者也、

文明十四年八月三十日　是月

○政長、池田莊ヲ大傳法院ニ寄進スルコト、其日詳ナラザレドモ、姑ク本書ニ據リテ掲書ス、

細川政國、和泉堺南莊ノ相國寺寺領等ヲ知行ス、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　八月十一日、

一傳聞條々、○略中

堺南庄相國寺以下領歟、細川右馬頭可知行之由申、河内屋形不可叶旨申、越智色々又申成、無爲放之、七百貫計在所也云々、右馬頭知行、

○政國、堺南莊ノ地ヲ領スルコト、其日詳ナラザレドモ、便宜本書ニ據リテ掲書ス、

義就肯ゼズ
越智家榮ノ斡旋ニ依リ政國知行ス

東寺訴狀
貞利ハ守護細川政元ノ被官

九月小丁酉朔盡

一日、丁酉、御祝、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　九月一日、あさ御さゝ月つゝのゝとし、○略中夕ゝされ御いのゝりをおこし、きう上らぬ御ゐいり、

二日、戊戌、是ヨリ先、東寺、其寺領丹波大山莊領家職前代官進藤貞利ノ不法ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、同莊名主沙汰人ニ命ジテ、貞利ノ押妨ヲ退ケ、年貢等ヲ東寺代官中澤元基ニ輸サシム、

〔東寺百合文書〕○に四十一之山城　一之四十五

（端裏書）「立紙在之、表書云、清和泉入道殿　東寺年預俊忠」

當寺領丹波國太山（大下同ジ）庄代官職之事、細河（政元）殿被官進藤修理亮（貞利）依不法、令改易、任御成敗、申付寺官之間、中澤帶刀（元基）仁申合、致所務之處、先代官致違亂候之條、言語道斷曲事候、此旨被達上聞、退彼押妨、可令全直務之由、被成御下知者、滿寺可畏入存候、恐々謹言、

八月十七日　　俊忠
　　覺永

奉書

清和泉(常通)入道殿
松田(數秀)對馬守殿

〔東寺百合文書〕に　○山城十七之二十二

東寺領丹波國多紀郡太山庄領家分代官職事、進藤修理亮不法之間、被改易之訖、早年貢諸公事等、當代官嚴密可致其沙汰、若有難澁族者、可被處罪科之由也、仍執達如件、

文明十四　九月二日

常通　在判
數秀　在判

元基請文

當所名主沙汰人中

○東寺、元基ヲ大山莊領家職代官トナスコト、守護細川政元、貞利ノ請ニ依リ、守護代内藤元貞ヲシテ、違亂スルモノヲ退ケシムルコト等、便宜左ニ合敍ス、

〔東寺百合文書〕む　○山城一之二十

請申

東寺御領丹波國太山庄領家方大方分御代官職事

毎年年貢二十貫文

旱水風損及ビ不慮ノ事ニ依リ愁訴セズ國役其他課役ハ代官トシテ補フベシ

請人請文

一御年貢足事、爲請切之地、毎年貳拾貫文、不依百姓未進不法之是非、十一月中悉可致沙汰事、

一早水風損(旱)并天下國中等、雖有不慮儀、一切不可申事、

一國定役、公方國方段錢以下臨時非分課役等、請切申上者、爲御代官致其補、更以不可申本所仁、次就請人有相違之事者、以別人立替可申者也、

右條々請定申上者、万一雖爲一錢、有無沙汰儀者、不日可放(被)召放御代官職、若猶及異儀者、被訴申公方樣、堅可預御罪科者、仍請定申狀如件、

文明十四年五月廿七日　中澤帶刀元基(花押)

請乞申

東寺領丹波國太山庄領家方大方分御代官職請人間事

右此庄御年貢者、爲中澤帶刀方、毎年貳拾貫文請切被申者也、仍此公用雖爲一錢、於有無沙汰者、爲請人悉可辨申、万一難澁仕候者、如何樣とも可預御催促者也、仍請文之狀如件、

文明十四年五月廿七日　弘源寺晃玖(花押)

細川政元内藤元貞ナシテ亂ス成ルル者違セ敗ヒ

〔東寺百合文書〕ノ三十四之四十　○山城

進藤修理亮知行分大山庄領家代官職幷細田分等事、若雖有違亂之族、堅可被致成敗候、仍所々知行分事、別而可被扶持候、恐々謹言、

（文明十四年）閏七月六日　　政元　御判

内藤備前守（元貞）殿

政元東寺ニ舊依リ進藤貞利ヲ代官タラシメンコトヲ求ム

大山庄領家代官職幷細田分等事、任下知之旨、久進藤修理亮知行事候之間、於本役者、堅可申付候、至在所者、不可有相違之段、被成其心候者、可爲祝著候、恐々謹言、

閏七月六日　　政元　御判

東寺衆徒御中

〔東寺百合文書〕に十七之二十二　○山城

進藤修理亮知行分丹波國大山庄領家代官職幷細田分等事、或稱本所直務、或號契約、有可及違亂造意之族云々、太不可然、所詮有如かく輩者、度々任御成敗之旨、近所面々幷郡代以下堅可相支之段、可被加下知之由候也、仍執達如件、

政元中經及ビ波々伯部一族ヲシテ違亂ノ族ヲ退ケシム

政元家宰齋藤元右奉書

如件、

（文明十四）閏七月六日　　（齋藤）元右

内藤備前守殿

東寺訴狀

進藤修理亮知行分丹波國大山領家代官職幷細田分等事、或稱本所直務、或號契約、有可及違亂造意之族云々、太不可然、所詮如かく輩出來者、堅可被相支之、若又於許容之人者、可被處罪科之由候也、仍執達如件、

（文明十四）閏七月六日　　元右

中經一族中

波々伯部一族中

〔東寺百合文書〕に五十下之五十二上　○山城

（端書）「當代官中澤帶刀方へ遣目（安）案狀　（義堂）　可申也」

東寺雜掌謹申

丹波國太山庄代官進藤修理亮年貢無沙汰之間事

右當庄者、去文明十年任還補御判之旨、從三寶院（義堂）殿樣、被返付于寺家之處者

東寺名主百姓ナシテ年貢ヲ元基ニ納メシム

也、然而門跡御知行時、號有御借錢、于今ニ(マヽ)年貢一向令無沙汰之條、無謂子細也、凡於此借物者、寺家更以不可存知之處、被押取之上者、□(無)力任大法、遂本錢一倍之勘定、致返辨訖、相殘分可有寺納之處、猶以無沙汰之間、雖令度々催促、不能承引、依之御願忽令退轉之間、任請文(案文備之)之旨、令改替代官職之處、被申成御書事、迷惑之至也、所詮子細於被聞召披、被停止進藤修理亮望、令全寺家之所務者、彌御陣中可爲御祈禱、以此旨、堅滿寺一同歎申者也、仍粗目安言上如件、

文明十四年潤七月　日

〔東寺百合文書〕(續裏書)〇に(四十六之四十八)

(太山庄名主百姓中ゝ書下案文明十四七十二)　公文所法橋(中深帶刀)元基」

東寺領太山庄代官職之事、進藤修理亮依致無沙汰、被召放畢、仍當所務之事者、中澤帶刀方ゝ被仰合候、御年貢公事物以下悉可致其沙汰之旨、名主百姓等可存知之由、被仰出候、

文明十四閏七月十二日

〔〕

妙然ノ吹嘘狀

尙々、先代官進藤方ゝ、雖爲御年貢等、不可致其沙汰之由、堅可申旨候、

〔東寺百合文書〕〇に(十七之二十二)(山城)

就丹波國大山庄領家方事、先度任奉書、可遂算用旨、進藤方被申候、此由可有御披露候哉、恐々謹言、

後七月十六日　常通(花押)

東寺雜掌

前圓覺寺住持妙然(以浩)寂ス、

〔扶桑五山記〕(四相陽瑞鹿山圓覺興聖禪寺住持位次)　百四十、以浩禾上、諱妙然(直翁智侃)嗣佛印、文明十四年九月二日示寂、

〔蔭涼軒日錄〕　延德四年六月三日、不參、天晴、今日壬寅、〇中略　又遣妙嚴云、永德(妙恭)事同前白之、次昨日承、關東顯騰(妙恭)西堂建長坐公文事、古者關東大樹(存松)和尙有之、以彼吹嘘狀建長公文、又者鎌倉秉拂謝語被用之、其後以浩和尙吹嘘狀同前、以浩和尙後關東管領之吹嘘狀被用之、(鎌倉)只今事者可爲如何哉、正宗和尙與千葉一體之仁也、然者彼吹嘘狀可被用之乎、可被相尋鹿苑、予事可爲鹿苑命云々、

六日、天快晴、〇略中普廣相公御時者、大樹和尚在關東出吹噓狀、其後以浩和尚見出吹噓狀、其後者可然尊宿無之、以故管領見出吹噓狀、

三日、己亥、義政、松茸ヲ義尚ニ贈ル、

〔常德院殿集〕九月三日、家君長谷より茸ゝ〻れとて、松さけを硯のふさゝ入てをくられさりゝる浅、句の上ゝ置て、

義政返歌

ふゝ分むさゝ通路もゝひりなたへさてゝ遠き住家成きと

返し

別殿行幸ヲ忘却

吹ゝせよ玉ゝゝされぬ萩の露きしれ小薄ぬきもとゝめて

四日、庚子、黑戸御所ニ行幸アラセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　九月四日、御ゝつゝ御くし新内、よへ別てんゝてあるへきを、され〳〵もゝすれゝいらせて、正さゝなし、それより御やうのゝゝよさつ（土御門有宗）ゝられて、さよひならしまして、御さゝ月ゝいる、けさより御ゝゝゝゝなる、

伊勢貞宗、獅子造太刀ヲ義尚ニ進ズ、

〔古文書〕第五集

（端裏書）「文明十四九五　花園より給之　（師子造）御腰物事」　上野又四郎

（ウハ書）「伊勢守殿御宿所　政兼」

師子ゝくりの御腰物請取申候、則以御定を披露申候、御心得の由候、恐々謹言、

政兼（花押）

九月四日

伊勢守殿御宿所

八日、甲辰、御宴アリ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　九月八日、（山科言國）くらの頭より、たくれ御なゝゝいる、御庭れ物きくうへゝいらせる、夜よ入てたくれ御なゝ御きせあゝ、宮れ御方をなゝ、御さゝ月ゝいる、（保安）やうあい寺殿より御さるよいりて、御いゝ寺あゝ、

山科言國菊ノ綿ヲ獻ズ

幕府、山城寶慈院ニ、同院領美濃大矢田郷運送商賣紙荷公事役ヲ安堵セシム、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲六十八舊記諸家官位御料所

自美濃國大矢田郷運送商賣紙荷注文在別紙、公事役事、爲當院御新所處、近年無沙汰云々、早任證文幷商人等請文以下之旨、如先々、可被全御知行之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年九月八日　　信濃守（諏訪真通）在判　伊勢守（伊勢貞宗）在判

寶慈院殿雜掌

商人本座衆

〔日吉神社文書〕四〇近江

寶慈院殿御公事料所美濃國大矢田郷ニ紙荷注文在別紙、事、如先々、商人本座衆等相計之、可專公役之由所被仰下也、仍下知如件、

文明十四年九月八日　　信濃守在判　沙彌在判

○東坊城長淸ヲシテ、紙賣買駄別役ヲ知行セシメラルヽコト、二年五月二日ノ條ニ見ユ、

九日、乙巳、重陽節供、和歌御會アリ、

歌題ヲ頒タル

三首題

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　九月二日、九日は御さけとも いささるゝ、

九日、三しゆは御さけみて、御所〳〵、もんきたゝ、御そうさち、女房さち、おいゝ ゝとさはれ人をよて、御くゝ申しうさふらはゝ、きう〳〵　昨日よりもあい る、あさ御さう月ま、上らぬより御てうしあいる、ゞんしの御ま申ふ、ゞふま てをる〳〵となる、めてさし、御きつくいつものおとくあいる、本しみ殿も 御あいり、

大和漢連句御再興

〔親長卿記〕十三　九月九日、晴、重陽節珍重々々、被下三首御題、自禁裏、民部卿筆、詠進了、元長朝臣同詠進了、

〔塵芥記十輪院内府記〕〇内閣記錄課所藏　九月九日、今日三首書進上了、大御和漢御再興云々、肩所勞之由申入之、

十一日、丁未、伊勢貞宗、書ヲ六角高賴ニ遣リ、幕府ノ命ヲ遵奉シテ、寺社本所領等ヲ渡付センコトヲ勸ム、

〔古文書〕第貳拾四集（埼書）「佐」四　文明十四九十一

多賀高忠（豊後）近江下向ノ風聞

就有多賀（高忠）豊後守下國之風聞、御札具拜見候了、仍彼方本知行分等自訴之事者、歎申之旨、條々無與（豫）儀之由御沙汰候歟、其外異子細候哉、未及承候、連々雜掌御僧ニ如令申候、諸篇於被專公儀者、彌不可有疎略候、寺社本所領已下事、如今候者、縱一身雖不存等閑候、上意更不可有其詮候、始終共以無爲之樣、一段御覺悟可爲肝要候、委細者蜷川新右［　　］

九月十一日

謹上　佐々木四郎殿

〔大乘院寺社雜事記〕三八十　十月十六日、夜下雨

一○中略

近江國事、京極之豊後可被入之云々、六角色々歎申入之、寺社本所事、可致其沙汰之由申入寂中云々、

十三日、己酉、法樂連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三　御湯殿上日記　九月十三日、御やうらくれ御連歌あり、ふしみ殿も御ありい、

〔親長卿記〕十三　九月十三日、晴、○中略今日禁裏有御法樂御連歌、予依爲月次會、有御免之由、被下女房奉書了、

〔賦物連歌〕○宮内省圖書寮所藏（端書）「文明十四年九月十三日」

御法樂

賦何木連歌

秋津洲や月は名ひくほ今夜の影　親王御方
紅葉いろりぬつゆゐいくしほ　式部卿宮
小鹿なくと山の雲れ時雨來て　海住山大納言
りてゐおほゆる風ひさほかり　大藏卿
くれぬとて道行人や急くらん　民部卿
やと問旅宿すゐれむるけさ　姉小路宰相
ゐりうつむ雪ま陰おく野いむれて　肖柏
いり日をさむミまよふ鳥の袖　重治朝臣
山ほして雲ゐいつくま歸るらん　時顯○以下九句略ス、
ゐちりふ浪おうら風りゐく

賦何木連歌
御發句　勝仁親王
邦高親王
海住山高清
勸修寺經茂
松木宗綱
姉小路基綱
肖柏
田向重治
西洞院時顯

御製　十七句　親王御方　八　式部卿宮　十

海住山大納言　十五　大藏卿　七　侍從中納言　十

民部卿　五　姉小路宰相　十　重治朝臣　五

宵柏　十二（○新撰菟玖波集ニ、是時ノ宵柏ノ句アレドモ略ス、）

十四日、庚戌、月食、

〔親長卿記〕十三　九月十四日、晴、月蝕也、（子十三分、丑寅）大略無殘所蝕畢、

亂後一向無蝕御祈、今度又同前、於裏御所之儀者如形歟、

亂後蝕ノ御祈ナシ

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　九月十四日、雨下、月蝕十五分十二分半、

〔本朝統曆〕十一　壬寅文明十四年、庚戌、九小朔、丁酉、（亥八、）十四夜望、（丑三、）月蝕十四分弱、（子二、寅四、）

攝津多田廟鳴動ス、

〔多田院文書〕五　○攝津

御廟所　御鳴動注進之□（畢）

大動兩度　九月十四日　亥刻

小動十箇度　同刻

中動二度　同十五日　戌刻

小動三度　同十六日　辰刻

右任御佳例、注進之狀如件、

文明十四年九月十七日　多田院（衆カ）僧□在□

就多田御廟鳴動　贈位

勅使

藏人大內記兼文章得業生菅原朝臣在數

就多田御鳴動贈位勅使參向條之事

一就勅使（九條藏人）參向、宿送（上下）事、（自丹波可到攝津國多田、）

勅使丹波ヨリ攝津ニ到ル

一諸關勘過事、

一人數事、勅使之外十人、（省略之定也、）

一於御廟所用意事、

御廟前可置案、（可爲机也、）其前可敷小文疊一枚、（勅使座料也、）

一上下十一人朝夕用意事、下著并上洛之時也、

○勅使參向ノ日詳ナラズ、姑ク茲ニ合敍ス、

十六日、壬子、幕府、朝日政清、同時長等ノ越訴ヲ停メ、中院通秀ヲシテ、加賀額田莊加納、八田莊等ヲ安堵セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕中院文書二

加賀國額田庄加納、八田庄等事、先年既被經御沙汰、御成敗之處、朝日三郎政清、并朝日孫左衞門尉時長企越訴之條、物忿之儀、太不可然、所詮於彼訴訟者、被停止訖、早任數代相傳證文等之旨、彌可被全直務之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年九月十六日　　下野守（布施英基）在判　　加賀守（飯尾清房）在判

中院家雜掌

〔塵芥記十輪院内府記〕○内閣記錄課所藏

後七月十八日、略○中自飯尾加賀許付奉書、額田庄朝日競望事也、

廿五日、陰細雨、今日又付召文、加州事、

廿六日、加州事談合而已、

八月三日、又付召文、使木、八

四日、遣人於加賀許、參長谷云々、

五日、又遣人寫留目安也、

八日、自春日局遣布施狀持來、久悅喜、

十四日、進富元於入江殿、勢州事三上返事有之、御成敗在近、彼訴訟無謂之由申之云々、

廿二日、略○中加賀守又付召符也、

廿八日、略○中支狀相副、百疋遣飯尾加州許、對面不可存等閑云々、

九月一日、万福、遣富元於布野、贈佳例綿、百目、對面辭退事、東山普請申沙汰取亂之上、爲意見衆述理運之旨可然也、豈可存等閑哉云々、松豐（松田貞康）可然可遣使者之由也、此旨申入江殿、珍重々々、

三日、入江殿以下御連枝皆被參長谷云々、有便宜自訴事可被申之由、入江殿被仰、

四日、早旦進人於入江殿、昨日儀被仰置新兵衞局、又以件局申入子細、可被聞

通秀支狀ヲ出ス

三時知恩寺尼通秀ノ爲メ内訴ス

飯尾清房加判ヲ固辭スヲ義政清房ヲシテ加判セシム

召之由直被申云々、及晩有新兵狀、依御尋申入、無相違之樣被仰伊勢守云々、
後聞、被尋仰伊勢守之處、此事亂中有沙汰、當方理致之由、有沙汰事也、
五日、參入江殿、祝著之由申入也、
六日五緡勢州、二ヶ三上遣之、留守、明日罷向可申云々、奉書事可申伊勢之由
被仰云々、仍以御狀被仰遣勢州云々、
七日、遣於人布施許、留守云々、
八日、今日布施參長谷云々、自加州注進損亡并安丸名事也、
九日、今日三上へ書進上云々、
十六日、加州奉書到來、加判賀州故障、仍遣新兵衛督局了、十七日
廿一日、相判事、加州固辭、後日入御耳、遂以加判、祝著之至也、
廿九日、無事、入夜兵衛來、今日御折紙錢皆濟、

十七日、癸丑、幕府ノ執奏ニ依リテ、賀茂社權祝重則ノ官職ヲ停ム、

〔親長卿記〕三十　傳奏奉書案　文明十四三

賀茂社權祝重則縣主所被止官職也、可被下知給之由、被仰下候也、謹言、
九月十七日　親長

淨源院ノ供物ヲ狼藉ス

藏人辨殿
就淨源院御供物事、致狼藉之間、被申武家、自武家有奉書、今日
奏聞可下知云々、

〔親長卿記〕十三　九月十七日、晴、早旦參內、請取番也、賀茂社權祝重則縣主
解官事、自武家被申之趣奏聞、就淨源院御(供カ)借物事、有致狼藉事、仍被訴申云々、可下知之由有仰、

畠山義就ノ黨越智家榮、古市澄胤等、兵ヲ出シテ、大和十市郷櫟本等ヲ火ク、

〔大乘院寺社雜事記〕二十八　九月十七日、
一今日自越智(家榮)方十市郷悉以燒拂之、澤秋山河內足輕等相具進發云々、十市(遠相)、
箸尾(春國)等スカ田ニ出陣、箸尾郷同燒了、大燒亡也、箸尾一族一人被打、兩方人
共損云々、自郡山中方天井新木等燒之、自古市方櫟本少々燒之、所詮近日
儀、筒井、十市、箸尾出頭方無力體也、於今分者、初終不可叶歟云々、

箸尾郷火ク

筒井順尊古市澄胤丹後庄ト戰フニ

十八日、
一昨日放火之相殘今日燒之云々、又於丹後庄邊筒井衆合戰、古市衆負手云
々、

遠相爲國等結崎ニ出陣ス

〔大乘院寺社雜事記〕三　八十

十月十九日、

一於南合戰（廿六日）在之、兩方損之由、舜信申之、狹竹毛見ニ下向了、十市、箸尾皆以結崎ニ出陣了、各自身館ニ不入云々、兩人分勢五百計在之云々、

○家榮、澄胤等、大和結崎ニ箸尾爲國、十市遠相等ヲ攻メ、又筒井順尊ヲ攻ムルコト、十月三十日ノ條ニ見ユ、

矢部ノ寺川口、砥用ノ金木

肥後阿蘇惟家、父惟忠ノ志ニ從ヒテ、同國寺川口、金木ノ地ヲ、某寺寺領トシテ、安堵セシム、

〔阿蘇文書〕九　光祖讓狀

やへのうちてらかゐ口のむら、同ともちのうちかゐ木のむら、御やさい所として、惟忠一寺御こんゐうゝ候て、以後い御せんさはゝ□□□□（御まいらせカ）□□□寺ゐやうゝるへきよし、惟忠仰さゝめられ候よし承候、もつともかんようゝ候、身の事ゝさい御そうそくの事ゝ候間、仰さゝめられ候することく、自今以後あいちゐひ申候□□□□（ほしく候カ）□ことにかゐ口のむらの事、後日のゝめをおほしめされくもうさゐへれうた（そカ）く三十くゐん御まいらせのよし承候、又いかゐ木の事、くら原きうふんゝて候を、ゐいさいゝ三十くゐん文ゝめされ候て、寺ゐやうゝ御さゝめ候間、くら原ゝそんゝおゐて、ゝせんこいく申候ともこのせうもんをさきとして、御せいもいあるへく候、かのゐやう所の事、大義之れうそくを被入候うへい、いよ〳〵他のさまゝけあるましく候、後日のゝめをそんし、一筆をもて申上候ところゝ、我等ゝそんゝおゐても、もしあいちゐい申候いゝ、ゝそゝんゝて候とも、ゝそゝんゝるへゐら□□（す候）、このよし御心へ御申ゐしこまり申へく候、あゐゐしく、

文明十四年（みつのとら）九月十七日　阿蘇大宮司宇治惟家

やへのゝうち

中ゝやうとのへ　御申候、

十八日、甲寅、義政、紅葉ヲ山城大原ニ觀、尋デ、鞍馬ニ遊ビテ、法樂連歌ヲ行フ、

〔後法興院政家記〕七　九月十八日、甲寅、晴、

（前書）武家准后大原紅葉被一見云々、

十九日、乙卯、晴、武家准后歷覽鞍馬紅葉云々、聖門實門被參、有御法樂御連歌、

十九日、乙卯、文章博士高辻長直ノ奏請ニ依リ、唐橋在數、西坊城長胤、東坊

（聖護院道興）（權僧正增運）

城和長ヲシテ獻策セシム、

〔桂林遺芳抄〕

請殊蒙天恩、因准先例、令課試散位正六位上菅原朝臣和長狀、

右和長者、文明八年給穀倉院學問料、同十一年補文章得業生、經歷正計歳序、功勞□幾春秋、爰和長所學爲心、所習爲躰、身置禮囿、醉於大道不醒、志展詞場、苦於文義無倦、今見器量專堪推薦、望請天恩因准先例、被下宣旨、令件和長遂課試矣、仍勒事狀、謹請處分、

文明十四年九月十九日

正四位下行少納言兼侍從文章博士式部少輔越後權守菅原朝臣長直

此款狀奥無餘慶、仍外記續加別紙、書宣旨畢、

從二位行權中納言藤原朝臣宣胤宣、奉勅依請者、

同年同月同日　掃部頭兼大外記造酒正中原朝臣師富奉

於此宣旨、對師富朝臣有問答事、外記申云、予款狀奥無餘慶宣旨所書如何云々、予云、宣旨必非可成款狀奥歟、無餘慶之時、續裏紙書宣旨云々、外記別紙無覺悟之由也、重示云、應永廿三年中原師胤問頭款狀、續別紙書之、又寶德元年清原宗賢課試款狀、續別紙書宣旨、其外舊例連綿由、申含之處、力不及、續別紙成此宣旨畢、其時予度々正文令披見之間、散不審云々、瑞雲院贈左府記此事分明也、爲職事經歷之家條、彌以爲規範也、后生亦可有異論之間、丁寧記之也、

〔京都御所東山御文庫記錄〕（甲二十三　御湯殿上日記）

（頭書）ありうす、おうさね、うすおうま、ぢんしやくつとむへきよし申、ぢんきよつきて、御すゝを三人おうら申いさゝ、

二日、〇（略）中ぢんしやくれ人ゝ、御れゝよゝこう、御さいめんありて、御さう月ともさふ、

〔親長卿記〕（十三）

十月二日、晴、菅原在數、同長胤、同和長遂獻策云々、

二十一日、（干）己、赤松政則、備前吉備津神社社務某ヲシテ、同國內諸社ヲ支配セシム、

〔吉備津彥神社文書〕（赤松政則）（花押）〇（備前）

（政則吉備津神社ニ神事ヲ行フ）

御屋形樣就御下向、於一品吉備津宮全太神事之時、國中神主其外諸役人等

上東郡ノさぼト和氣郡ノ巫ト公事

到來之刻、上東郡のさゝ、和氣郡のミこゝ公事を申うけ、既やうらにあり、安國寺よりてたいあつあるの節、津高郡のミやみこゝきちせうと申ミこ、ゑんきの御門よりれ御卷數貳つ出よ、みこいむいてんのやく、さゝいにゐの役人、其外のやく者、あり所一々次第に見へさりと云々、去うる上い、ミこの理運たるへし、あるいい夫妻さりと言ども、あるいい兄弟さりと言とも、任先例、國中神社之事い、諸事その方のむらいさるへき者也、仍狀如件、

文明拾四壬刁九月廿一日　　嶋村宗語入道（花押）

備前一宮社務□□□

齋藤基廣ノ父

法號嗣子基廣三回忌ヲ其第ニ營ム

從五位下前美濃守護代駿河守齋藤基秀卒ス、

〔少林無孔笛〕三　禪悅院殿大祥忌拈香

這香、一眞實相等虛空、化作栴檀絕異同、無限孝心熏不徹、三年光景穗煙中、

娑婆世界南閻浮洲大日本國濃州路厚見郡居住奉三寶弟子孝男基廣、文明（十六年）甲辰九月二十一日、伏値先考禪悅院殿前駿州太守德海弘公禪定門大祥忌之辰、先庚七日、特就本宅延請禪侶、莊嚴道場、諸般佛事逐日勤修、大乘妙典漸寫印誦各若干部、圓通懺一座、水陸供一會、雕刻彌陀如來尊像一軀、大凡安養事迹詳于諸經、不待擧而論、或者曰、靈位平生結西方香花緣、今當忌日獲値遇彼尊、豈匪機感純熟乎、余謂、不然、靈位本是濟北門下徒弟也、自家自有向上一著子、那敢入佗般舟三昧去耶、豈不見宋馮濟川居士、初扣道禪林、晚專修淨土、然至鎭長沙之日、著禪衣登座、橫拄杖于膝上而化、既施這作略列于普燈賢臣章、無以媿者也、靈位蓋夫馮居士之流亞也歟、雖然今日當忌尊容、任佗眼裡著屑、基廣亦瀝誠、染翰謄寫西方敎典一軸、可謂知恩而能報恩者、伊蒲盛膳云、營辨香華、珍饈以鋪陳、仍拜屈現前尊衆、同音諷演大佛頂萬行白傘蓋神呪之次、借手山野焚妙兜樓、奉供養三世十方薄伽世尊、正當忌日無量壽佛、現座道場圓通大士、洎微塵刹土一切賢聖、所鳩善利奉爲靈位、莊嚴報土、伏願乘茲香雲、直上如來地、攝盡世界同歸列聖叢、共惟某名、將家閥閱、邦國英雄、輔佐主以下令則雷轟忽地、指揮士以逞威、則劒倚蒼穹、初拶高僧於大安、開殺人不眨眼底活眼、晩消宿習於蓮社、得汗馬到無功底全功、斯謂大夫能事、弗妨八面玲瓏、所以畋獵漁捕諸惡律儀隨機受用、莫非直指俗間經書治生產業、信手拈來、總是心宗直得、彎兎角弓驚奔嘉州大象、架龜毛箭退敗海上明公、與麽時節碧眼黃頭閑夢一場、玉鳳銜花、金鷄唱曉、天堂地獄、遊戲三昧、泥牛吼月、木馬嘶風、看看

靈位卽今聽得恁麼說話、而世出世間諸法一時圓融去也、更有臨斯會而覆蔭后昆底一句子、諸郎且莫掩聰、挿香于爐云、九月岐陽天未雪、無邊佳氣欝葱葱、

〔歷名士代〕

從五位下藤基秀　文明五九四、

〔親元日記〕一　寛正六年正月廿二日頭書　齋藤山城先祖

妙椿法印　利永舍弟、

世系

基秀　藏人、任駿河守、文明頃、

利綱

〔梅花無盡藏〕三下

妙椿　持是院三位法印、實利永男、

基秀　駿河守、法名一閑、

利綱　法名宗阜、彈正忠、新撰菟玖波作者、實利藤男、

肖像贊

〔少林無孔笛〕六　禪悅院殿從五品前駿州太守德海宗弘禪定門眞儀贊

利將苗裔、藤原克家、麾三軍於京府、拜五品於詔麻、望之則目光射人、范老子胸中數萬甲兵何足敵也、近之則雍容閑雅、程先生座上一團和氣、莫以加焉、燕寢清香念念兮安養、數珠直裰堂堂兮毗耶、宜矣哉、階庭貽厥蘭玉、久如與日月具瞻光華、至若其大安拶黃檗底機鋒、則與普燈諸賢臣未可以定等差而已、

七回忌　基廣京都長慶寺ニ營ム

〔西源錄〕中　德海宗弘禪定門七年忌拈香　齋藤駿州

這香、弘宗基本、大樹蔭凉、傳呼濟北驢名於四海、唯憑這箇、簸弄江西馬箕於什邡、唯憑這箇、且道這箇是什麼、一炷纔拈出三千刹界香、大日本國濃州路居住奉三寶弟子孝男基廣、散考前說不錄、○駿州大州錄、○別本ニハ、長享二年九月二十一日、爰値先洛之惠、舉長慶精舍、預修諸般白業、彫刻阿閦如來尊像、大乘妙典漸寫一部、圓通懺摩一座、水陸妙供一會、正當今日供佛齋僧、虔備香燈燭茶菓、以俾供養、仍拜風現前清衆、諷演白傘神呪之次、命龍安小比丘、焚此香、奉供養本師釋迦牟尼善逝、當誄慈尊阿閦如來、當來補處慈氏尊、現座道場觀世音菩薩、三世十方諸大薩埵、微塵刹土諸賢聖衆トアリ、

所萃洪勛、專爲靈位資助報土、伏願業根轉善根、苦海變智海、共惟某名將門種族、幕府賢良、曾祖昔施塞外號令、重位仍擬殿上夕郎、佐源公威權、則仰跼高天、俯蹐厚地、平島夷暴亂、則明修棧道、暗度陳倉、留心教外、接武他方、塵塵六八願海、刹刹十二圓光、到這裏、無生死可脫離、赤洒洒沒窩臼、無煩惱可除斷、淨躶躶絕承當、雖然恁地、嚴設忌齋、卽今來應供也、擧香云、無所從來無所去、阿爺面目露堂堂、楓林樹色七年雨、疑是錦衣還故鄉、

十三回忌

〔少林無孔笛〕三　禪悅院殿十三年忌拈香

功德海中賢聖香、蟋牀一夢十三霜、南閻東畔重相見、節後露叢棲晚黃、索訶界

瞻部洲大日本國濃州路厚見郡居住奉三寶弟子孝男基廣、明應三年甲寅九月二十又一日、伏値先考禪悅院殿從五位前駿州太守德海弘公禪定門一十三白之忌辰、先期七日、就本宅而鋪設延僧侶以勤修、彫刻當忌尊大日覺皇聖像一軀、大乘妙典頓漸印誦各若干部、圓通懺儀一座、開甘露門一會、正當今日營辦伊蒲塞淨膳、嚴備香華珍饈之儀、仍拜屈現前尊衆、諷演大佛頂首楞嚴王十方如來一門超出無上大陀羅尼之次、特命小比丘（英朝）、因薌贊揚佛事、輒焚這阿迦嚧片、供養本師大雄世尊、西方無量壽佛、現座道場小白花大士、洎諸佛列祖、天趣神祇、海龍冥府、一切薛荔等、所鳩洪勛、專爲靈位資嚴報土、伏願忽發信根於聞熏、成薩婆若海、速度含識於覺岸、捨波羅蜜航、共惟（菜名）、流星眼目、鐵石心腸、入寰中歷五位階、榮歸晝錦、投濟北揮三玄甲、外護金湯、運籌帷幄則類乎龍淵會裡張橫浦、近論格物、遠斬陝府、銘功鐘鼎則同乎麟閣圖中蕭鄧（新何）侯、明修棧道、暗度陳倉、元來活祖師機用、只許烈大夫契當、五湖孤舟名遂身退、雖天道萬物一馬、禪悅法喜是家常、宜對青山高臥、故知白日舒長、如純（宣純仁）仁純父襲于慶、似裴肅裴休鳴於唐、多多益善、任佗華樹成行果樹成列、程子門皆承春風力、念念不停說甚、青蓮爲夜、赤蓮爲晝、淨名室自超日月光、到者裡白棒雨點、碎崐

崙鐵袴、金鑪雪花、銷毘盧木鏘、更有則語要且商量、（良久云、）君不見、當初令嗣借吾手、一爐爇卻、郎罷前撑天拄地、其地其義氣又不見、這回依前逢茲晨、一瓣拈來博山上、亙古亙今幾嘉祥、雖然與麽沈檀猶局、佛知見、（擧香云、）贈以昌州秋海棠、（遂挿香、）

禪悅院殿十七年忌拈香

這栴檀佛將出興、浮幢刹無端六反震動、然兜樓婆所薰徹、毘藍風一掃四種魔軍、今日拈來無別事、卍爐吹起吉祥雲、索訶界瞻部洲大日本國濃州路厚見郡居住奉三寶弟子孝男基廣、明應七年九月廿一日、伏値先考禪悅院殿從五位前駿州太守德海宗弘禪定門一十七年之忌辰、特就于本宅莊嚴道場、勤修阿僧祇善因於七日間、供養一千人苾芻於刹那頃、雕刻無量壽佛聖像一軀、蓋依先考歸依之尊、以旌大家孝順之義者也、書寫大乘妙典若干部、以頓機以漸機、敷設食懺摩等法儀、於雙日於隻日、加之基廣親入經王本迹二門、築著如來壽量一品、便一筆謄寫以供牌前、寔舍利所謂折骨爲筆、以髓爲水也、可謂盡美矣、正當今日虔備香華燈燭、施陳衆香世界甘露齋會、延請龍衆雲水、諷演首楞嚴王密因伽陀、仍借手山野令拈香讚揚、輒焚斯乾柴片、供養毘盧覺皇、圓頓菩薩、

分部龍天、無邊賢聖、洎冥府雙王、苦海六趣等、所鳩殊勛專爲靈位資助報土者、伏願忽發大智乎銖兩、兼全法身手五分、共惟某名、胸陂不隘、眼界無垠、麗居士拶藥(椎鳳)山十箇禪、花飄好雪、王(王敏)常侍諳林(義玄)際三玄旨、菊帶餘芬、稱之作家戰將、偉矣了事官員心地大施門勘過江湖簑笠輩、士林嚴冷面驚奔翡翠蘭苕群、頗類據鞍翁以矍鑠、尙望懸鼓相于斜嚥、一念萬年水鳥樹林皆作佛事、科階五位、金魚朱紫足輝鄉枌、惟孝子具蜂桶腔羊之機、曲不藏直、矧契經宜兎角龜毛之父、干何夙熏、直得金華山兮排闥岌岌、黃楊木兮向榮欣欣、此是禪悅平生三昧門、其誰不耳處見、卽今令嗣報恩一句子、便請於眼處聞因八臂那吒捧天地、向來一瓣重千斤、

二十三日、己未、勸修寺宮(常信)ヲ御猶子ト爲シ給フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲(御湯殿上日記二十三)

の宮より、御ゆうしれ事御申あり、ゑさひかた御返事あいる、

廿四日、○中略くゐん宮より、御ゑうちやくとて、御むゐ御さちあいる、

○勸修寺宮(常信)ヲ、親王トナスコト、十五年二月二十五日ノ條ニ見ユ、

二十六日、壬戌、伊勢貞宗、尾張守護代織田敏定ヲシテ、山城等持寺領尾張中莊ノ地ヲ同寺ニ渡付セシム、

常信親馬ヲ獻セラル

〔古文書〕第貳拾四集

一等持寺領尾州中庄之事、任還補御判并御遵行等之旨、可被沙汰付寺家代官候、尙以彼御寺之儀異于他之事候、別而嚴重御成敗候者可然候、

九月廿六日　織田大和守(敏定)殿

二十八日、甲子、御詩歌合、

〔詩歌合〕文明十四年九月廿八日

一番　山中紅葉　從一位源(中院)通秀

左　楓葉霜頻九月天、吟詩遙想楚山邊、殘紅吹亂松杉外、一抹斜陽錦樣鮮、

右　色かとる麓れましいわけ捨てておをめにうくる峰のもみち葉　女房

二番

左

釋永崇

染不成乾秋色荒、滿山紅葉夜來霜、聖朝自有大平象、楓上又看栖鳳凰、

右　無品親王（後仁和天王）

わゝ入ゝ山はもみちけ色も今な沈奥深き霧のうち哉

三番

左　權大納言藤原教秀（勸修寺）

曉霜染葉景佳哉、一抹斜陽蜀錦開、不識秋光幾千樹、吟隨流水上崔嵬、

右　式部卿邦高親王

小倉山みゆたふ𪜈にし秋も猶𪜈すゑぬ色に出るもみち葉

四番

左　釋等貴

獨憐楓樹倚山隈、霜後空開錦繡堆、紅葉勝花亦何益、停車人少徑無媒、

右　入道親王道永（仁和寺）

山ふゝみた沈る紅葉乃ゝよしきにてたゝふる里まきてかへる覽

五番

左　權大納言藤原高清（海住山）

滿林無處不霜楓、裁錦深紅又淺紅、此地却疑裂吳楚、染成葉々照山中、

右　入道前左大臣女（傳法輪三條實量）

玄くゑ行山のもみち葉𪜈れも又心沈そめて日ゝにふる頃

六番

左　釋景莖

行入溪隈小徑斜、楓林紅處兩三家、山禽日暮停車語、似道花時無此花、

右　前內大臣（大炊御門信量）

山陰ゝくるゝむやしれ小車を心と先よとかさるをみち葉

七番

左　大藏卿藤原經茂（勸修寺）

昨夜清霜染出不、滿山葉々著紅稠、有誰能縮得斯地、移作五雲天上秋、

右　按察使藤原親長（甘露寺）

くる人もみえぬいとゝうれ山おゑと秋とや木々の錦をるらん

八番

左　權中納言藤原廣光（町）

幽徑秋荒霜色深、滿山楓樹映松陰、吟遊多是停車處、葉々紅飜夕照林、

右　　從二位藤原（澁野井）致國

九番

左　染うへて時雨るゝ木々は山あゐれ藍より深き千しやとそみる

　　權中納言藤原（三條西）實隆

殘楓樹々弄秋光、吟步忘歸石逕長、一鳥不鳴霜葉底、回頭木末欲斜陽、

右　　參議侍從藤原（冷泉）政爲

十番

左　山深くわくはゐ心は色よりも千しほいうすき紅葉とやみん

　　釋承英

青女染成楓樹紅、滿山落日繡屏風、遊人不到三叉路、葉々勝花嵐翠中、

右　　參議左中將藤原（四辻）季經

十一番

左　時雨つゝ日影もみえぬ奥山はをのをのとてる木々のをみち葉

　　藏人神祇少副卜部（吉田）兼致

浮嵐雨過較添楓、染得山々秋色紅、落日無邊堪畫處、霜裁雲錦小屏風、

右　　參議藤原（冷小路）基綱

十二番

左　夜をこめて雲ゐ秋霧はれあさ去めり紅葉を奥も深き山哉

　　散位菅原（東坊城）和長

詩景楓飜吟更佳、逕攀嶮路坐停車、秋山變作春山否、葉々紅深霜後花、

右　　右衞門督藤原（冷泉）爲廣

松ひとりさめゝる色や小倉山ふりき紅葉のあちゆみすらん十〇以下三番ヨリ三十六番マデ略ス、

〔京都帝國大學所藏文書〕古文書集四

文明十四年九月廿八日

題

山中紅葉　田家秋寒　鶴伴仙齡

詩歌合

左　　右

御風氣

從一位源通秀　女房
釋永宗（後）　無品親王
權大納言藤原敎秀　式部卿邦高親（王脫）
釋等貴　入道親王道永
權大納言藤原高清　入道前右大臣女
釋景莚　前內大臣
大藏卿藤原經茂　按察使藤原親長
權中納言藤原廣光　從二位藤原敎國
權中納言藤原實隆　參議侍從藤原政爲
釋承英　參議左中將藤原季經
藏人神祇少副卜部兼致　參議藤原基綱
散位藤原和長　右衞門督藤原爲廣

二十九日乙丑、御不豫、神祇伯資益王ヲシテ、代拜セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕（函書）甲二十三　御湯殿上日記　九月廿九日、

御りさけゑ御ゆりけさせれいしまし候いぬゑつきて、ゝふより御とい

丹波重長御脈ニ候ス

ゑおらしはさせ、御代くゐんもくゑおゐせらるゝ、
十月六日、ゝふをゑけおゝり御ミやくゑゐゐる、
九日、けさを又御りひひやう御ゐつらひあるやうゑて、御ようゑなる、おゝり
さゑよりこもしゐゐる、

〔資益王記〕九月廿九日、遙拜之後、自今朝御代官御拜事被仰出、勤仕、
十月八日、遙拜、於御代官者、今日ヨリ出御之由被仰出、珍重々々、

十月 大 丙寅朔

一日、丙寅、御祝、

〔京都御所東山御文庫記録〕（甲二十三 御湯殿上日記）　十月一日、いつをれ御さう月ゐいる、ゆうされ御いを丼をあし事、

前權中納言四條隆量ヲ、善勝寺長者ニ補ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕（甲二十三 御湯殿上日記）　十月一日、○中略四てうの（隆量）中納言、みのより御さうしうを三そくゐいらきらるゝ、御さるのさひよてゐいる、

二日、○中略四條中納言せんきう寺れちやうしやきんの事申御れ丼よ、御去ゆうきとて、をりうをよて、くよより申、御さうしうをも三そくゐいる、そうゐうれやりて御ちや二十ふくろゐいらきる、昨日のよ四てう申をあそゝしさるよ、うさ丼てうく、うつゝあし、

○隆量ヲ善勝寺長者ニ補スル日詳ナラズ、姑ク是日ニ掲グ、又前參議西川房任ヲ善勝寺長者ト爲スコト、十年七月二十六日ノ條ニ、房任ニ同長者ヲ安堵セシメラルヽコト、十三年五月二十六日ノ條ニ見ユ、

隆量美濃ヨリ御草子紙ヲ獻ズ

三日、戊辰、禁裏御料所伊勢栗眞莊代官布施英基、年貢ヲ輸サヾルヲ以テ、義政ヲシテ之ヲ改替セシム、義政、命ヲ奉ゼズ、是日、公卿ヲ召シテ、之ヲ諮ラセラル、

〔親長卿記〕（廣橋家記録）　十三　十月三日、晴、○中略其後有召參内、栗眞庄事有被仰談事、源大納言、予、兵部卿、民部卿等（白川忠富）（松木宗綱）（坂田雅行）祇候、各不及是非、予申所存、（其謂、栗眞御代官布施（英基）下野守無沙汰之間、被申室町殿之處、不可有御改替之由、大樣御申狀也、重不可被申武家云々、仍重堅可被申云々、其御申樣不可然之由申了、

五日、庚午、前權大納言中院通秀、内大臣ニ任ゼラレンコトヲ請フ、是日、之ヲ聽サル、

〔塵芥記〕（十輪院内府記）　○内閣記錄課所藏　九月十日、任槐所望事、調書狀進安禪寺殿、仰陰陽（土御門有頭）祈禱、

十七日、自安禪寺殿御書到來、内府所望之事、被申入事昨日云々、

十八日、語新相公（濃本公夏）羽林使甘、儀同事可有御沙汰之條、有勅問、可然之由申入云々、晚景猶儀同者無所望之由、可申入之由入魂、得其心云々、

廿日、○略中留守有狀、甘、一望事、可然之樣申入云々、喜悅云々、

廿一日、○略中甘入來、勅問條々入魂、

甘露寺親長ノ答申

通秀安禪寺宮觀心尼ニ憑リテ奏ス

大臣ニ准ゼラレントス通秀准大臣ヲ望マズ

勅許

十月五日、任槐之事勅許、但來(未カ)闕不可有御沙汰云々、

八日、參女院、御樋、御土器物三持參、御對面、種々被仰下、御誓言不可有御等閑云々、○中略參内、任槐勅約事畏申、不及御對面、

大炊御門信子ノ執奏中院家任大臣ハ四代中絶

〔親長卿記〕十三　九月十八日、晴、早旦被下女房奉書、中院一品儀同事、度々所望、今度女院被執申、四代爲中絶、可爲如何哉、先准槐事可有沙汰歟之由有仰、予申、云女院執御申、云執心之儀、無餘儀歟、但四代中絶之間、先准槐事御沙汰簡要歟之由申入了、

准大臣ヨリ内大臣ニ昇ルノ例

未刻許以新宰相中將(公夏朝臣)、自中院申送云、任槐事歟申之子細有之、自然被尋仰者、可然之樣可申勅答云々、此趣申入之由返答了、彼使云、羽林細々申通之故爲使云々、

十九日、晴、又被下女房奉書、仰云、中院一品一望事、准槐可然之由昨日申之、先年競望之時、准槐事可有御沙汰之由被仰之處、於其儀者無曲之樣申之、今以可爲同前、自准槐昇大臣例有之歟何如云々、予申云、准槐事理運之上者、無曲之由申之、一往無其謂事歟、但就執心御沙汰事、可爲叡慮、自儀同三司昇大臣之例、吉田内府(定房公)自一品任儀同、後昇進内大臣了、此外定可有例歟之由申入了、

〔京都帝國大學所藏文書〕中書二院文

(付紙)「中院仰文十四十五」

一日の御返事さゝいゐかやうゐ候、御心え候、まゐ〳〵めてさく御心やすく候、めてさくおゐ事もする〳〵と事ゆへおく、さんともとけ候やうゐとおほしめし候へく候、けさんゐも入候て、御ゆゐしく思ひゐいらせ候、ゐいりようの文ゐいらせ候、りおさゐおゐれ候へく候、かしく、

おゐうのいんどのへ

○通秀、内大臣ニ任ゼラルヽコト、十七年三月二十五日ノ條ニ見ユ

七日、壬申、太政大臣從一位久我通博薨ズ、

東久世太政大臣ト號ス

〔公卿補任〕四十三　太政大臣、

伏見ニ病ム

〔塵芥記〕十輪院内府記　○内閣記錄課所藏　九月廿五日、忍痛向城南、相國(久我通博)危急之謂也、言語不通之式也、少減歟云々、

廿八日、○中略相國不服藥、可往生之期也云々、

服藥セズ

十月一日、万福珍重々々、自久音信、藥不服用之條、太不可然之由、民部卿狀到來、卽遣城南、

七日、昨夜相國薨御、有別、○別記所見ナシ、

八日、○略中　甘殿被訪相國違例、

九日、○略中　自諸方訪相國事、

十二月廿五日、久我中納言初出仕也、罷向見立、

〔十輪院內府記〕文明十五年三月廿日、久我上洛、直被過蝸屋、連句廿句催興也、代始之間、可進御樽於禁裏云々、此分申遣傳奏勸修寺之處、以余使者卽申遣戶部、々々返事不得其意、記而無益、

〔後法興院政家記〕七　十月九日、甲戌、晴、去六日久我相國他界云々、去月十一日、於禁裏御會令參會、人間如夢幻、可悲々々、今年五十六云々、

〔相顯抄〕東久世太政大臣源通博　文明十三七廿六任、元前大臣、右同十四十七薨、

〔相國歷名〕通博公　文明十三七廿二任、同十四十七薨、

〔諸家傳〕十一上久我　通博本通行、又通尙、號東久世太政大臣、清通公男母、世　應永卅三年誕生、同卅四

年正月五日從五位下、二歲、同年三月廿四日侍從、正長二年正月五日從五位上、四歲、同年三月十九日右權少將、永享二年正月六日正五位下、五歲、同三年正月十日從四位下、六歲、同四年正月五日從四位上、七歲、于時通尙、同年三月十六日加賀權介、同五年正月五日正四位下、八歲、嘉吉元年十二月日右權中將、十六歲、同二年正月十日從三位、十七歲、中將如元、同三年正月十六日尾張權守、十八歲、文安元年三月廿九日權中納言、十九歲、同三年正月五日正三位、廿歲、一同年白馬外辨、廿一歲、同五年正月廿九日權大納言、廿三歲、同年除目上卿、同年放生會上卿、寶德二年元日外辨、同年六月廿七日任大臣節會內辨、同三年正月五日從二位、廿六歲、享德三年正月五日正二位、廿九歲、寬正二年元日內辨、廿六歲、同年八月十日右近衛大將、廿六歲、同月十一日內大臣、廿六歲、同日大將如元、同四年六月二日辭大將、廿八歲、同五年正月日辭大臣、廿九歲、同年十一月廿八日右大臣、廿九歲、同六年十二月廿八日卽位內辨、四十歲、同七年正月六日從一位、四十一歲、同年正月十六日辭右大臣、文明五年月日改通博、四十八歲、依大樹名字義、尙同字也、同十三年七月廿六日太政大臣、五十六歲、同十四年十月十七日薨、五十七歲、號東久世太政大臣、○公卿補任異事ナキニ依リ略ス、

〔尊卑分脈〕村上源氏久我

清通

通博 本ノ尙、右大將、太政大臣、從一、文明十四十七薨、號東久世太政大臣、

嗣通 權中、從三、文正元七十九自害、

豐通 右大將、右大臣、從一、大永六四出家、天文五六三薨、

益遍 僧正、善提院、横死、母同、

尊海 僧正、眞光院、守鑁僧正弟子、

元雅 北戒壇院、得業、興藥師寺別當、

〔久我家譜〕 坤斷絶庶流家譜

清通

通博 太政大臣、右大將、從一位、母、

嗣通 權中納言、從三位、母、

豐通 右大臣、右大將、從一位、母從二位橘以盛女、

益遍 僧正、善提院、横死、仁

尊海 僧正、眞光院、仁

元雅 藥師寺別當、興

義尙通博ノ詠草ヲ見ル

山證嚴檀那院、

〔塵芥記 十輪院內府記〕 ○內閣記錄課所藏(政茂) 文明十六年六月一日、晴、旬、如恒少々有來客、入夜自室町殿、以星野宮內少輔、故相國詠草一卷被返下、有御書、御返事申入之條雖有憚進之、表書誰よてもの御局へ、みち秀也、如此書之由、先日傳奏被命之故也、

〔春浦錄〕 和酬 和久我相國題舊居之松之韵

夜雨登吟焦土蹤、離々禾黍屬邨農、幾回驚破城南夢、風送琴聲舊館松、

○通博、後花園天皇三席御會ニ詩ヲ上ルコト、寛正五年十二月五日ノ條ニ、甘露寺親長第歌合ニ會スルコト、文明五年十一月七日ノ條ニ、通博ト改名スルコト、同年十二月十九日ノ條ニ、所領近江高島北古賀上莊ヲ、八幡中坊ノ違亂スルヲ、幕府ニ訴フルコト、同七年四月二十五日ノ條ニ、五條爲親ト山城東久世莊ノ地ヲ爭フコト、同九年十一月三日ノ條ニ、漢土ノ人物勝地ヲ詠ジテ上ルコト、同十三年三月二十四日ノ條ニ見ユ、

十日、乙亥、亥子御祝、

善法寺野瀬餅ヲ獻ズ

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三　御湯殿上日記　十月十日、御ものゝ日よなる、御いのこいつをのゝとく、むろまち殿、大納言殿よりの御つゝ井日野侍從、きんゐう寺よりのを三十ゐうゐゐいる、御くゐりきらるゝ、

廿二日、○略中御いのこゐけよりれ御つゝ井、一日のゝおゐし、そう〳〵より御申をゝ取し、

○二十二日、亥子御祝ノコト、便宜合敍ス、

十一日、丙子、義尚、歌題ヲ近衛政家ニ遣リテ、和歌ヲ詠ゼシム、

〔後法興院政家記〕七　十月十一日、丙子、雨下、自大樹給題、二首、

十四日、己卯、晴、○略中二首和歌進大樹、

十四日、己卯、內侍所ニ行幸アラセラル、

〔元長卿記〕一御教書案　內侍所行幸事、文明十四十三、仰云、可有行幸、惣用已下可被尋云々、

可有行幸內侍所日次、被擇申之由被仰下候也、恐々謹言、

十月四日　　元長

（土御門有宗）陰陽頭殿

來十日前後幷中旬日次可然候也、

土御門有宗ヲシテ行幸ノ日次ヲ勘進セシム

中原師富ヲシテ掃部寮役等ヲ注進セシム

甘露寺親長書狀

午剋許日次到來、八日、十四、十七日之近日可有行幸內侍所ニ、可申沙汰之由、被仰下候、寮役已下事、以寂省略可給注進之、日次治定候ハヽ、可進一通之狀如件、

十月四日

（中原師富）四位大外記殿

同元長書狀

よへ申入候ハんするを、むうきやく仕候、おいし所行ゐうゐは、御むいの御さいりてき候ゐとゐ、ゐもんを御ちうしんハ、みゐくらゐとのときも、五百疋むゐりまてありけよ候、まつちうしんを申候へと、申つゐハし候ゆる、御心候へく候、ゐしく、

あゐいしとのゝ　　御局へ　　ちゐなゐ

ないしところ行幸の風記さいゐ見いてちゝやうし候ハゝあいふれられ、

文明十四年十月十四日

ちうしんともとゝのへ候て、申入候へく候よし、御心候て御ひろう申候へく候、うしく、

勾當内侍殿　　もとなの
御局へ

來十四日可有行幸内侍所、任例可被申沙汰、仍執達如件、

十月四日　　右中辨

藏人大内記殿（津橋在數）　四日來候間以面仰了、不及遣一通、

來十四日可有行幸内侍所、任例可被致沙汰候狀如件、

十月四日　　右中辨判

四位史殿（壬生淑久）　四位大外記殿

來十四日可有行幸内侍所、可令早參給、仍執達如件、

十月四日　　右中辨元長

謹上　藏人辨殿（源宣光忠）　藏人左少辨殿（坊城俊名）

藏人右少辨殿（清閑寺深房）　右中辨元長

來十四日可有行幸内侍所、御劔役可令參勤給候、依天氣執達如件、

十月五日　　右中辨元長

謹上　白川中將殿（資氏）

來十四日可有行幸内侍所、仍令與奪在數之處、申敍爵之由候、一萬事定御存知候歟、仍一官事中務歟式部歟招任候哉、于今不存知候間、内々申候、早々先可有御下知候、重可進一通、謹言、

十月六日　　元長

五辻殿（宣仲）

白川資氏ヲ劔役トス

内侍所行幸來十四日分候、剋限吉時可注給、可爲白晝候、巳午刻吉時候ハヽ可承候、恐々謹言、

有宗ヲシテ行幸時刻ヲ勘進セシム

文明十四年十月十四日

奉行甘露寺元長

修理職ヲシテ御路ニ板假庇ノコトヲ沙汰セシム

掃部寮莚道ヲ敷ク

十月十一日　元長

陰陽頭殿

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三 御湯殿上日記　十月十四日、ないし所へ行ゐうなる、ふ行頭右中辨、御ぢんまくの中將、そのやゐ左ねしとを左こう、御ともゑ大をもし、新内御ゐいり、めてさし〳〵、御とをの人としいむへまつきて、下より御さた人ゐいる、

〔親長卿記〕十三　十月三日、晴、被下女房奉書、可有内侍所行幸、惣用事可注申、日次同可相尋云々、予申云、先被定奉行職事、可尋日次之由申入了、○中略仍内侍所行幸事、元長朝臣可申沙汰云々、申領狀了、

四日、晴、内侍所行幸事、觸外記六位藏人等、

十一日、晴、出納持來注進、

十四日、晴、早旦參内、今日内侍所行幸日也、午刻也、兼日勘日時了、仰修理職、御路打板假庇事申付之致沙汰也、去八日仰之了、事畢、參御前、大略具之由申入之、已御著御服、忩令退出、令著元長朝臣、光忠、家幸裝束等、即令同道參内、元長朝臣仰藏人、申出御劔御笏等、渡内豎、先之敷莚道、掃部寮自中山宰相（實親）中將許持參布端

出御

供奉ノ人々

敷之、即出御、元長朝臣候御簾、光忠獻御草鞋、資氏朝臣候御劔、御劔人置畫御座御劔、柄在東、置樣如此歟之由、藏人兼被尋之、柄可有西之由答了、民部卿此分之由同也、次出御、元長朝臣取御裾持之、持樣兼日令口傳畢、吉持分也、供奉人々、資氏朝臣、御劔、元長朝臣、御簾、光忠、御沓、俊名、御笏、家幸、源富仲、卜部（吉田）兼致等也、還御之後、今日之儀、粉骨之由、種々有叡感、

〔後法興院政家記〕七　十月十五日、庚辰、晴、家幸來、昨日午刻主上行幸内侍所、有御拜云々、頭辨（勧修寺政顯）一人不參、其外悉供奉云々、

白川結城政朝、陸奥松林庵ニ庵領ヲ安堵セシム、

〔白河證古文書〕中　○楓軒文書纂九十二所收

一松林庵寺領之事、於以後長不可有相替事候、若此段僞申候ハヽ、鹿島大明神可蒙御罰、此段能々披露可被申候、恐々謹言、

文明十四年十月十四日　政朝（結城）

斑目安藝守とのへ　掛村松林寺藏、

○結城直朝、松林庵ニ寺領ヲ與フルコト、文正元年八月一日ノ條ニ見ユ、

十七日、壬午、前總持寺住持宗英拈笑寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕六　永平下第九世　最勝吾寶宗璨禪師法嗣

信州臨川山定津院拈笑宗英禪師、武州刺史藤賴久第二子、生於應永己丑（十六）歲九月二十日也、幼慕緇風、遂投敎院下髮、時十有五歲也、二十納戒於睿嶽、深探顯密二宗、至二十九歲而捨所學、慕禪要、入相州建長寺、隨衆參詳單提狗子話、明年上豆州尼木（天城下同ジ）山、絕世緣而專坐禪、一夜有山神告曰、近里有吾寶和尙、子見之必有所證、師不任感激、翌日下山禮吾寶於最勝、寶曰、汝從何處來、師曰、尼木山、寶曰、在彼爲底事、師曰、坐禪、寶曰、古人磨甎痛責、汝知之乎、師曰、某甲不依佛爲、不依法爲、寶曰、猶有這箇在、師曰、大善知識豈無方便、寶曰、汝只不執坐相、不避諸緣、卻向造次顚沛中、子細推窮看、師伏膺、親御旣經七年、一日忽然契證、直入室而呈所見、寶曰、纔入門卽不無更須子細、復擧世尊拈華迦葉微笑話詰之、師乃頌曰、實悟實參祇這是、誰求諸聖逞風流、燈籠擧手報天曉、一箇虛空笑點頭、寶然之、因命號拈笑、尋遊諸方勘驗宗師、復歸最勝、省于吾寶和尙、寶甚喜、遂擧師令嗣席住持、後令嗣子鳳菴領最勝、自依甲州武田氏之招、掃艸東林院、寶德改元己巳年、上總介滋野信貞、聞名景慕、於信州禰津城外、新建精舍、以禮迎之、師應命進院、臨川山定津院是也、師住此數年、黑白歸者如市、僧問、雪覆蘆花時如何、師曰、鑑在機前、問大死底人卻活時如何、師曰、失卻眼睛無所覓、梅花依舊去年枝、示衆、僧問雲門、樹凋葉落時如何、門曰、體露金風、諸人還會也無、自代曰、紅旗閃爍、應仁丁亥（元）奉詔住總持、一朞而歸、宗穆書記繪師眞請贊、師書曰、摶空大鵬、直作奔騰、虎鬚龍髯誰親摩捋、乘沒巴鼻處、天地一閑僧、默默孤牀眠猶熟、前山花盡綠層層、壬寅（文明十四年）年移丹之永澤、無幾示疾、預遺書於檀越、故舊、竝囑院事、端坐說偈、翛然而瞑矣、文明十四年十月七日也、徒衆焚化、塔于臨川、

拈笑ト字ス　宗璨宗英ヲ勝寺ニテ最住セシムル　延曆寺ニ於テ出家ス　伊豆天城山ニ坐禪ス　山神ノ告ニ依リ最勝寺ニ璨ニ謁ス　建長寺ニ參禪ス　宗英ヲ創建シ定津院ニ住スル　滋野信貞ヲ迎フ　總持寺ニ住スル一年　宗穆宗英ノ像ヲ畫キ贊ヲ求ム　丹波永澤寺ニ遷ル　定津院ニ葬ル

十九日、（甲申）山城天龍寺三會院、松尾社ノ同院領同國萱房屋敷ヲ違亂スルヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、松尾社ニ命ジテ、其違亂ヲ停メシム、

〔天龍寺文書〕（四）○山城

三會院雜掌申、山城國萱房屋敷事違亂云々、太不可然、不日可被止其妨、若又有子細者、令出帶可被明申候之由候也、仍執達如件、

文明十四年十月十九日　　常通（花押）
　　元連（花押）

松尾社務

文明十四年十月二十二日

三會院領御年貢ハ、一ぢうよりても候へ、先ゑやむの御方へハしたかり申事ハさら〳〵おく候、此分御心へあるへく候、御百姓申上候、

文明十四　八月廿五日　（略押）

（奥端書）「萱坊　百姓田狀」

二十二日、壬戌、伊勢國司北畠政鄕、畠山義就ヲ援ケテ、兵ヲ大和長谷寺ニ出ス、

〔大乘院寺社雜事記〕二　八十　八月廿七日、天一天上十六ヶ日、

一東（孝善）門院僧正來相語、秋山當國ニ罷越云々、國司可出陣云々、

九月廿六日、

一東門院僧正來、伊勢國司ハ自身ハ不可立、悉以一黨可出陣云々、明日之由申歟云々、

廿八日、

一自東門院注進、國司勢出陣必定、坂内分千五百計被付之、其外一族分在之、惣而十一頭也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕三　八十　十月廿二日、

坂内房鄕
大河内親鄕
政鄕ノ兵退ク

一伊勢國司勢七百計（眞勢三百之云々）、出陣長谷寺邊、大將坂内中（親鄕）將云々、大略伊賀衆也、大川内（親鄕）以下大將追々可進發云々、

卅日、

一○（略）中伊勢國司勢昨日悉以引退了、坂内、岩内、宮ノ内、姉小路、以上大將四頭也、以外比興之躰也云々、

二十四日、己丑、筑後守池田充正卒ス、

〔系圖纂要〕七十三　池田　清和源氏二十二

□□（池田六郎、）

「充正（池田筑後守、文明十四年十ノ廿四卒、大廣寺玉堂金公、）

〔攝陽群談〕九　陵の部　池田筑後守藤原充正塔　同（摂島）郡池田村大廣禪寺院中にあり、寺記云、前筑州太守者、池田城主也、文明十四年壬寅十月廿四日卒去、

世系

法號玉堂金公大禪定門と號す、碑文云、

碑文

清曉朝天眩色徽、新雲先動袞龍衣、千官拜舞金鑾殿、携得香烟滿袖歸、

望海亭記

〔補庵京華後集〕望海亭記

攝州池田村有寺、曰大廣、前摠持祥山禪師主之、師目視雲霄、機呑佛祖、曹洞下

文明十四年十月二十四日

充正寺大廣ヲ建ツ景三等持寺ニ在リ祥山ノ求應ニ記ヲ作ルテ

老尊宿也、問其俗譜、則日本國管領畠山源君之葭莩也、可謂華矣、池田筑后守藤充正、夙欽師風、相攸創基、此寺是也、負山瀕海、殿宇翼如、而置亭山頂、扁曰望海、先是余居等持官寺、師以某人爲介、求作亭記、夫望海者、白傳於唐、東坡於宋、惟肖於本朝、文以張焉、詩以振焉、千古美談也、余未嘗身歷而目擊之、縱雖髣髴其萬一、而小杜阿房也、隨求隨辭、有年于茲矣、庚子之夏(文明十二年)、師適以事入洛、一日訪余小補計室、話次又及亭記、於是就審亭之所以爲望海也、亭面於南、々乃滄海也、而天王之華表、層出雲間、住吉之松風、鼓動波底、跨東南者三州、曰紀、曰泉、曰河、襟帶于斯、咽喉于斯、吳綾蜀錦、鹽鐵嘟艫相逐者、商賈之往來也、官租軍給、粟麥連檣不絕者、行使之運漕也、紅粧翠盖、盃盤狼藉、青箬綠簑、烟雨勃窣、太守張水嬉也、漁翁下釣瀨也、野老謳歌、而水田漠々、市人言語、而城府潭々、攝人之樂其樂也、至若、沙鷗翔兮岸柳暗、宿鴈驚兮渚蓮飛、夜潮吹月、銀山鐵壁粉碎於前焉、海市映雪、珠宮貝闕湧現於上焉、亭上四時也、亭上朝暮也、翫之欄檻上、接之衽席間、盖偉觀也、余嘗師所說、不移寸步、優遊此亭、紅塵爲萬頃滄波乎、滄波爲十丈紅塵乎、不可得而知耳、抑有一說、洞上有最上乘禪、名曰寶鏡三昧、嗚乎水天無際、一波不起、滄海豈非一面寶鏡也耶、此亭豈非一个鏡臺也耶、海中所有色像、豈非胡來胡現、漢來漢現也耶、師入此三昧、應機接物、遠取曹山洞水、近取永平峨山、五位功勳、三種滲漏、皆從鏡中流出、而盖天盖地、使四來學者弄此光影、同證三昧、不亦大手、言未既、師起欽衽曰、亭記成矣、文明十二年六月吉旦書、前等持横川景三、

〔參考〕

〔攝陽群談〕十四寺院の部　大廣寺　同所(豐島郡池田村)にあり、山號鹽增山、文明年中、池田城主藤筑後守營建、曹洞禪宗と成る、同姓備後守再建、

〔雲錦隨筆〕攝洲豐嶋郡池田の鄕に、五月山といふあり、此山腹に大廣寺と號する曹洞派の禪刹あり、○中略、攝陽群談ニ同ジ、昔此山中に池ありて、潮の滿干あること海水の如し、然るに、當時創建の時、池を埋み、其舊蹟を遺して、山號を鹽增山といふ、又此山頂に望海亭と稱する樓あり、最眺望絕景なりしとそ、後年廢して其名のみ存せり、爾有を邑人山川氏其名勝の跡を失はん事を惜み、往昔の記を寫し、石に勒して、近き天保の末年山頂に建られたり、其碑面に云、

望海亭記○略ス、補菴京華續集ニ同ジ、

望海亭廢既久矣、而記亦失其原本、星霜再移則名勝無復由傳焉、故據舊圖求故趾、建石勒記、以要不朽云、

以爾志倍迺美耶麻乃以保迺安止乎之毛知與万泥美與登能古寸伊志布三

天保十二年辛丑六月　邑人　山川正宣誌

大坂　吳　策　書

三十日、乙未、畠山義就ノ黨越智家榮、古市澄胤等、大和結崎ニ箸尾爲國、十市遠相等ヲ攻メ、又筒井順尊ヲ攻ム、

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十月廿五日、

一高山進退事、内々計略子細在之、河内儀大略無爲歟云々、比興々々、

廿九日、曉振動、龍神動也、不吉々々、

一生馬谷、鳥見谷、南ハ矢木燒之云々、

卅日、

一今日箸尾、十市之陣結崎責之云々、高田越智等取向云々、筒井同責之、古市以下衆共也云々、生馬谷、平群谷、鳥見谷等在々所々、當山并河内勢共燒拂之云々、高山裏返故也云々、定而大合戰可有之云々、重而可記之、矢木郷南ノッラ自十市燒之云々、

生駒谷鳥見谷矢木等火ク

十一月朔日、小壬子月也、丙申日、水曜、　旦四十、夕六十、

一國中合戰有之歟、所々燒之、

二日、丁酉、

一昨日於鳥見谷合戰、高山打負、自身負手、半死半生云々、手者共大略損了、今日自燒云々、同河内勢損了引退云々、狹川并秋篠衆高名也、同日夕方於郡山西邊合戰、窪田中筒井之院田狹川衆三人被打死了、古市高名也云々、

高山某鳥見谷ニ敗ル

七日、

一去四日高山自河内被沙汰居、勢共可付之云々、又秋篠超昇寺各甲十五ッヽ入之、一族一人爲大將云々、

義就高山某ヲ援ク

十七日、

一昨日通祐法橋相語、布留郷路次開之云々、古市返事到來、國中合戰如今者、越智方不可有正躰、然者古市之難義可出來云々、

十一月五日、高山入部、朔日合戰打負、自燒故也、自河

高山某返忠ス

内合□云々、去月廿八日裏歸了、

○家榮、澄胤等、兵ヲ出シテ、大和十市郷櫟本等ヲ火クコト、九月十七日ノ條ニ見ユ、

是月、伏見ニ御隱棲アラセラレントス、

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十月十三日、朝下、雨

一主上近日伏見ヘ可有御隱居之由仰云々、毎度如此被仰歟、不珍事也、

丹波守護細川政元、擅ニ幕府料所同國山内莊上三箇村ヲ知行ス、鄕民等、舊ニ仍リ、料所トナサンコトヲ幕府ニ請フ、

〔古文書〕第十集　（端裏書）「案文」

足利滿詮以來ハ義視相傳ノ料所

御料所丹波國船井郡山内庄上三ヶ村名主御百姓等謹言上、

右當所三ヶ村者、小河（足利滿詮）殿樣御料所以來、養心院殿樣御相續之由緒等ヨリ、一亂以前まて、今出河（足利義視）殿樣之御料所として、御年貢を進上仕候事、無其隱者也、然一亂中守護人無謂于今知行候、所詮任先規被補御料所候て、被成下御奉書候ハヽ、御年貢等嚴重可進納仕候、此事連々雖言上仕候、御成敗遲々候間、重而申上候、此旨早々可預御披露候、仍粗謹言上如件、

文明十四年十月日

赤松政則、興福寺領備前鹿田莊代官松田某ノ、細川政元ノ威ヲ藉リテ、其所領ヲ冒スヲ怒リ、之ヲ攻メントス、某、身ヲ致シテ宥免ヲ請フ、

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十月十六日、夜下、雨

一備前國鹿田庄代官松田ハ公方近習者也、兼ハ細川加扶持者也、以細川之號對赤松、色々緩怠押領子細在之、今度赤松方可責之由支度、令迷惑、可任生涯於赤松由、依歎申加免除了、於押領分者書出之了、

十一月 小 丙申朔 盡

一日、丙申、春日祭ヲ停メ、尋デ、之ヲ追行ス、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三 御湯殿上日記　十二月八日、○中略 かすうまつりよて、御神事、上卿大くら卿（勧修寺経茂）、ふ行（坊城）どし名、

〔親長卿記〕十三　十二月八日、晴、春日祭式月延引、今日被行、上卿大蔵卿、経茂、近年自社家相語云々、五百疋行云々、下辨不參、外記史參向云々、

〔塵芥記 十輪院内府記 ○内閣記 錄課所藏〕　十二月八日、春日祭也、仍不參内、

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十二月八日、

一春日祭在之、上卿御妻權中納言、

十日、

一御妻權中納言光臨、春日祭上卿被參向云々、明日可上洛之由被申、

〔春日祭歷名部類〕（文明）同年十二月八日壬申　祭　式月延引

上卿權中納言大藏卿經茂　辨内侍等不參

奉行藏人左少辨俊名

上卿勧修寺経茂　奉行坊城俊名

御妻權中納言

御祝、

鶴御賞翫

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三 御湯殿上日記　十一月一日、あさ御さゝ月ゐいる、一日ハはる御しやうくゐんあり、夕ゝさゝ月御さゝ月いつををなし事、きう上らゐ御ゐいり、ふしミ殿よりめてさゝ、源大（窪田雅行）納言しく御申、

二日、丁酉、妙法院宮（覺胤）、得度セラレントス、是日、廷臣、酒饌ヲ獻ズ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三 御湯殿上日記　十一月二日、○中略 めうゑう院宮の御方、御ちこハ御おこりをしみとて、をれ〳〵御てうしとをゐいらきらるゝとて、七郎おとゐいりて、のうおとさせらるゝ、あゝ月やとよくゐんおゝる、二ハ（持致親王）宮の御方ををれしくなる、御みやゐいおゝ一ゝ、二色、をおしくゐの宮ハ御ゝさへい、御ゝゐらけハ物三色、

三日、戊戌、攝津守護細川政元、守護代藥師寺元長ヲシテ、山城實相院領攝津正木莊本所分ヲ直務シ、國人ノ違亂スルヲ停メシム、

〔實相院文書〕一 ○山城 （附箋）「正木遵行、正文守護代ニ付畢」

實相院領攝州吉志部村内正木庄本所分事、任先例、可有直務上者、自然於國有違亂輩者、可被加成敗之由候也、仍執達如件、

文明十四年十一月二日　三日

内藤七郎能ヲ演ズ

吉志部村

文明十四
十一月三日　堅定判

藥師寺備後守(元長)殿

（附箋）「正木證文」

正木庄本所分御年貢之事、當年分之儀、爲奈良備前守(元定)殿御口入之事候之間、京著七石之分ニ申定候、近日下人可請取申候、於後年之儀爲此方任先例可致直務候、御屋形御奉書執進候、可然之□(様)御屆可爲肝要候也、恐々謹言、

文明十四
十一月十二日　芝坊成傳（花押）

三宅五郎左衞門尉殿

年貢京著七石

十三日、戊申、日吉祭ヲ停メ、尋デ、之ヲ追行ス、

〔親長卿記〕十三　十二月十四日、晴、日吉祭必定之由、寺家注進、

十五日、晴、雪時々下、日吉祭奏聞、各相觸了、元長朝臣奉行也、

十七日、晴、參內、請取番也、日吉祭事仰遣圓明、爲其下使者於坂本了、

十八日、雪下、自坂本上洛、祭禮未定、不可渡云々、

十九日、雪下、又下人於坂本、所詮兼日不下行之間、參向不可叶之由、仰寺家幷

奉行甘露寺元長

下行ナキニ依リ勅使參向ス

社家公文所等了、

廿日、早旦自寺家（執當眞全）、以飛脚申云、今日祭禮必定、早々可參向、於供給事者、公文所觸三院之間、堅仰之間可沙汰云々、不解神事相待之間、卽令用意參向、於坂本用意與、（四方與也、兼日供用執當）、力者每度自京都申付之處、爲俄事之間、於坂本用意、（每度六人、自京都乘四方與之時八人也、今日於坂本議定間、四人云々、八十疋下行、）

元長朝臣入夜自坂本歸宅、祭禮無爲云々、

〔華頂要略〕（百二十四　天台座主記五）　第百六十　尊應准三宮（青蓮院）　十二月廿日、日吉祭禮、元長朝臣參向、（執當眞全）、

十四日、己酉、前豐後筑後守護從四位下大友親繁卒シ、子政親嗣グ、

〔大友氏記錄〕（親繁）　親繁（第十四代）、文明十四年壬寅十一月十四日、道清卒於府內別業、年七十二、號心源寺、

〔豐後舊記〕（○豐後）　大友五郎豐後守從四位下侍從源親繁　親著之三男也、繼親隆之家督、（○中略）文明十四年（或明應二年）十一月十四日大友親繁卒、葬臼杵戶室、牌號心源寺殿心源道清庵主、

〔大友氏記錄〕（親繁）　親繁（第十四代）、親繁（繁初作重）、者、從五位下式部大夫親著四男、

ペカラズ

豐後府內ノ別第ニ卒ス、法號

臼杵戶室ニ葬ル

閥歷

室ハ大友親隆女

使ヲ朝鮮ニ遣ス

豐後守護ニ補セラル

政親生ル

親繁大内教弘ト共ニ軍事ヲ掌ル

義政諭旨スルコトアリ

教弘書狀

從四位下左京亮親綱弟也、母千葉氏也、號五郎、任豐後守、敍從四位下、其夫人從叔父出羽守親隆之女也、受親隆之讓、爲第十四代家督、補豐後筑後守護職、幷領豐前筑前肥前散在地、治國三十年、蓋十二年在于政親家督中剃髮、法名道淸、應永十八年辛卯生於豐後國、

永享九年丁巳、遣使於朝鮮國、

文安元年嘉吉四年改元、甲子七月受封、時年三十四、源義成後改義政、賜豐後國守護職、使畠山德本俗名持國、作下知狀、○泰書略ス、文安元年七月十九日、幕府、親繁ヲ豐後守護職ニ補スルノ條ニ收ム、

是年、嫡男政親生、

頃年親繁與大内六郎教弘領軍事、義成遣僧金粟院以諭之、有五月教弘示金粟院書、及七月金粟院答親繁書、

就御請文等事、先日預御使候、則可認進候之處、如御存知、依申合大友豐後守子細候、令遲々候、不圖御乘船之由承候之間、態進飛脚候、仍御請文等調進候、重而被差下上使、嚴重御成敗候者、爲九州可然候之由、能々可有御披露候、恐惶謹言、

五月十日　　教弘在判

菊池氏退ク

田北親忠猪ヲ親繁ニ贈ル

金粟院侍者禪師

御札之趣喜令拜見候畢、抑菊池旣退散之由承候、先以目出相存候、向後も能々被廻籌策、被加御退治候者、尤可目出候、大内六郎度々高名忠節之條、上意御感無佗候、仍長門國御敎書被成下候、面目之至候、委細大歲首座可申入候、恐々謹言、

七月廿七日　　某在判、金粟院也、蓋名字蠡、

大友殿人々御中

親繁因狩獵事、屢授自筆書於家族田北六郎親忠、親增子、後號大和守、平井駿河守親眞、詫摩能秀孫、平井親政四代孫也、且因家臣齋藤兵部丞綱實、著利子、其子光鬼、後號越前守繁實、野上大和守資時、中村次郎三郎領地之事、且中嶋三河守野上弟房資時子、名有資、後號大和守、野上、中村、中嶋共玖珠郡士、等事各授書、

いまゝといたやめたらしく存候ゝ、御狀のまゝ給候、目出候〻〻〻、まいと如此御心さし令悅喜候、則ゝやうくゝん仕候へく候、恐々謹言、

四月廿六日　　親繁在判

文明十四年十一月十四日　六九九

文明十四年十一月十四日

田北六郎殿（親忠）

大ぜるむきに去ゝおゝく候よしうけ給候間、廿日まゐりのやうを候、御ひま候ハゝ、をゝき人々とうさう候て御入悦喜申候、恐々謹言、

九月十六日　親繁 在判

親繁猪狩ニ親忠ヲ招ク

田北六郎殿

ゑんふくしをやうの事、委細承候、そのふん申候へく候、次昨日小去ゝを二とりて候、すくなく候へとも、ゑさ一しんし候、さゐさきのおわりきん所と久つきて候去ゝ、二とりて候、ちゐころおも去ゐきゐりゐて候、大去ゝを犬三ひきゐてくいて候、いぬのふるまい申候するやうなく候、恐々謹言、

十一月十九日　親繁 在判

ひらいするか（親貞）殿

親繁猪狩ヲ行フ

親貞ニ猪ヲ贈ル

親父美濃守（著利）一跡事、任相續之旨、領掌不可有相違候、恐々謹言、

六月三日　親繁 在判

齋藤兵部丞殿

齋藤綱實ニ所領ヲ安堵セシム

丹生庄矢野長門守跡内拾五貫分事、親父兵部丞任當知行之旨、領知不可有相違候、恐々謹言、

六月三日　親繁 在判

齋藤光鬼殿（按、授齋藤氏書、兵部丞綱實受父著利領地日、其子光鬼亦受綱實所領乎、二書同月日故輯錄、備再考、）

同光鬼ニ丹生庄内ノ地ヲ安堵セシム

玖珠郡飯田郷御名字地内四町參段、并中村内七段、古後郷綾部名内松木壹町、同郷内古後周防介跡壹町壹段事、領知不可有相違候、恐々謹言、

十二月十八日　親繁 在判

野上大和守殿（中村壹町四段預置ノ書狀略ス、）（五月九日、野上大和守宛親繁ノ）

野上資時ニ所領ヲ安堵セシム

高田庄德丸名之内貳拾六貫分之事、預申候、可有知行候、恐々謹言、

文明十四年十一月十四日

中村次郎ニ高田莊德丸ヲ三郎ニ

四月廿六日　親繁花押

中村次郎三郎殿

高田庄德丸名之内闕所分參拾陸貫分之内貳拾陸貫分之事、任御判之旨、可被打渡中村次郎三郎候、恐々謹言、

四月廿七日　利貞（上野國入佐）在判　泰佐（岐部山城守）在判　氏傳（石合兵部少輔）在判

高田庄政所殿

（名ノ地ヲ知行セシム）

（五月二十四日、中村次郎三郎宛打渡狀略ス、）

補任參河守之由承候、目出候、如何樣以面尙可賀申候、恐々謹言、

卯月八日　親繁在判

中嶋左京亮殿

（中嶋參河守ノ任官ヲ賀ス）

御名字之事承候間、以別紙認進之候、恐々謹言、

（野上弟房ニ諱ヲ與フ）

八月廿七日　親繁花押

野上弟房殿

（親勝生ル）

享德三年甲戌、親繁三男親勝生、（親勝或作親胤、）母千葉氏也、號日田七郎、稱大藏氏、十二月、親繁與采地於植田右京亮作書、翌年（康正元年）正月、有家臣賴忠等書、（○知行狀略ス、）

（享德三年十二月九日、親繁、植田右京亮方莊馬背戸名ヲ知行セシムル條ニ敬ム、）

康正二年丙子、筑前國冷泉津（博多別稱、）親繁代官佐藤四郎藤信重遣使於朝鮮、約歲遣一船、

（代官佐藤信重使ヲ朝鮮ニ遣ス）

長祿元年（以康正三年改元、）丁丑、親繁又遣使於朝鮮、是冬、京師兵革大起、先是親繁遣家臣平井親眞居洛、於是親眞屬幕府義政有戰功、十一月、親眞告之、親繁且作書諭其妻子、（○京都ニ土寇起リ、幕府ノ條ニ見ユ、）

（親繁平井親眞ヲシテ幕府ニ候セシム）

きやうとの事、大きのゆゝやいてき候あいさ、上さまの御さめまて候やとよ、さいゝいさいきやう候あいさくむうさまへまいり、御ようにさちく候へく候、三郎事いろふも〳〵めてさくやうこう申候へく候、三郎りさへもふゝを下候、去や房事おもひあい、いろよもやうこう申候へと申候、うまゑて〳〵去やとうと三郎と、おなしやうよおほしめし、御ふちある

（親繁書狀）

文明十四年十一月十四日

へく候、めてさく又々申候、あゝうしく、一端書、よろつとりみさし候やとよ、
さのミまいらせ候、いとをしゝり候てあるへく候、いつ
れも御入候やとよ、よろつ心やすく候、ゝゝゝゝゝゝゝ、

十一月三日　親眞在判

二年戊寅正月、親繁賞祿平井親眞、以授書、○文書略ス、長祿二年正月十一日ノ條ニ收ム、

是年、親繁又遣使於朝鮮、其書曰、曾祖父以來捧書通使、自九州陷兵、雖續箕裘之業、不以時致敬、此書稱曾祖父以來通信、按始遣使於朝鮮者持直也、持直者親繁從叔父而不可稱曾祖父、然依家督次第則是也、持直讓親綱、親綱讓親隆、親隆讓親繁也、

三年己卯十二月、親繁使田北六郎親載親忠子、加元服、以授書、○書狀略ス、長祿三年十二月三日、親繁、田北六郎ニ偏諱ヲ與フル條ニ收ム、

（寛正元年）十二月、伊豫國士河野刑部大輔敎通、與親繁訴論豐後國臼杵莊、各獻書於大樹義政、蓋親繁書在明年、○訴狀略ス、寛正元年十二月是月、河野敎通、守護職及ビ所領ノ安堵ヲ幕府ニ請フノ條ニ收ム、

是年、家族大膳大夫師能、稱豐筑守而遣使於朝鮮、其書曰、大友持直蒙大國之恩、不知幾年、去年十月逝去、余爲持直嫡孫、續大友家業、師能、持直嫡子也、今爲持直始無子、欲以從弟子親重爲嗣、然因幕府命讓親綱、其後師能、能堅等生此間、恐有傳差乎、今稱豐筑守者、假稱擅美於異邦而已、源國光未詳其系、亦遣使、以報彼漂流人、

二年辛巳八月、親繁以臼杵莊事、獻書於義政、○文書略ス、寛正元年十二月是月ノ條ニ收ム、

是年、博多親繁代官田原因幡守藤貞成奉廣末齋、未詳其系、遣使於朝鮮、受圖書、約歲遣一二船、

三年壬午十月、親繁立嫡男五郎政親爲家督、以與奪豐後國并筑後半國守護職、及散在諸國領地等、而請義政賜其補任御敎書於政親、然國政軍勢（務カ）猶在親繁、○寛正三年十月二十五日、幕府、政親ヲ豐後及ビ筑後半國守護ニ補スルノ條參看、

六年乙酉四月、菊池肥前守安爲帥兵至筑後國、攻高良山別所城、志賀太郎（後號藏人佐）名闕、承親繁命、援高良山擊殺安爲、斬獲許多、親繁大賞志賀氏戰功、授書、○文書略ス、寛正六年四月二十三日ノ條ニ收ム、

七月、親繁爲筑後國守護職、初親繁與菊池肥後守爲邦、各爲半國守護職、而爲邦難澁屢及合戰、於是義政以全國賜親繁、有補任御敎書及管領畠山尾張守政長奉書、○文書略ス、寛正六年七月三十日ノ條ニ收ム、

是年、筑後州士三池玄蕃允秀俊、黑木越前守等應菊池爲邦、叛豐後擧兵、親繁牽兵至筑後屯、高井嶽、筑後、肥後州士來會、三池、黑木等乞降、而親繁歸國、族臣田北大和守親忠親增子、等有戰功、十月、親繁授自筆書於田北親忠、勞軍功、且命

親忠ノ功ヲ賞ス

舉鷹之事、

一日御入候て以面申承候、悅喜申候、今度ちく後ゟ人々おゝくまろりゟ
ち候中ゟ、とりゆけ御ろうゝやうのよし、さいせんゟうけ給候、いよ〳〵
さのもしく存候、以後ゟをき候てもさのゝ存候、次此さろの事、さうへん
のあさのゟてゝかいつけて候やとゟ、ふろのをゑす候間、ゑゝとらくそれ
ゟ御おき候て、御はろい候て給候いゝ、令悅喜候、さろさとのやろ心やす
く候、むきのやう委細くさゝのさま可申候、恐々謹言、

親繁在判

十月廿五日

田北やまと殿

親繁東軍ニ應ジ大内政弘ノ

文正元年、以寛正七年改元、丙戌、親繁自喜其討筑後得利、遣家臣小河伊豆守親泰戸次頼時三代直世男、小河治部大輔祖也、於洛、以謝義政、義政卽召見親泰、
應仁元年、以文正二年改元、丁亥、小河親泰歸國、
二年戊子八月、親繁授領地於志賀太郎、是所賞高良山別所城効戰忠也、〇文書略ス、應仁二年八月十七日ノ條ニ收ム、
文明元年、以應仁三年改元、己丑、義政命親繁父子、討大内左京大夫政弘黨、親繁自率

屬城ヲ攻ム

軍、進發于豐前、肥前、筑前三州、攻拔敵城數所、而獻捷于京師、五月、敵兵襲我絹笠陣、絹笠在筑前國、親繁家臣幸野丹後守力戰負創、親繁授感書、
於今度絹笠陣、敵寄來之時、致粉骨殊被疵候、御高名之段、忠節異于他候、彌憑存候條無佗候、恐々謹言、

親繁在判

五月十三日

幸野丹後守殿

七月、義政賜御内書於親繁、感賞其戰功、且命討周防、長門兩州也、世傳、自大樹義滿以來、曰御教書、爲内書、書體亦稍更舊、其體更舊、故記爲内書、〇文書略ス、元年七月十二日、親繁、豐前、筑前ノ諸
是月、少貳賴忠教忠子、賴舉兵、初政親欲助大内政弘、親繁以爲君命不可違、遂諭政
親助教(親)忠伐政弘兵、頃間政親進發豐前國、兩件詳于政親譜、〇元年五月是月、應ジ、兵ヲ出シテ、大内氏ノ地ヲ略スルノ條參看、親繁、少貳賴忠ト共ニ、細川勝元ニ
二年庚寅二月、義政、命大内左京大夫入道道頓元名教幸、政弘族、及親繁父子、討大内
政弘、有御内書、親繁父子軍功抜群、〇文書略ス、二年二月四日、義政、親繁ヲシテ、大内教弘ト謀リ、備後、安藝、周防ヲ攻略ヒシムルノ條ニ收ム、

頃年親繁應義政之求、獻金襴二端、於是飯尾大和守元連授奉書、（義政ノ求ニ依リ金襴ヲ上ル）

金襴貳端（青地、紺地、）到來候、御進上之趣致披露候、方々雖被仰出候無其儀候、嚴密之至被感思召之由、從私能々可申旨被仰出候、委細猶令申勝光寺候、可得御意候、恐々謹言、

大和守元連（在判）

十二月二日

謹上　大友豐後守殿（尊報）

親繁因家臣齋藤越前守繁實領地事授書、且有泰弘、綱重（泰弘、綱重未知何者、）等、寄田口治部少輔書、（齋藤繁實ニ筑後木室ニ北方地頭分ヲ安堵セシム）

筑後國三潴郡之內木室北方地頭分之事、任先知行旨預置候、可有領知候、八町牟田之事者、當給人以代所還可申候、恐々謹言、

親繁（在判）

三月廿一日

齋藤越前守殿

齋藤越前守給所木室內北牟田新開事、有間下野守混八田牟田押領之由、被歎申候、如此子細等不可有其隱候、早々任順次可被成敗仕付候、恐々謹言、

七月二日

綱重（在判）

泰弘（在判）

田口治部少輔殿

八月一日、有親繁授家臣大津留常陸介書、（大津留氏佐伯庶流、未見其系、）

爲田面祝儀、種々送給候、祝入存候、仍從是も太刀一進之候、恐々謹言、

親繁（在判）

八月一日

大津留常陸介殿

十二月十三夜、於州玖珠郡日出生（在帆足郷、）有戰事、中嶋三河守被創有功、親繁授書勞之、（此役未詳事故、）（大津留常陸介ノ八朔贈物ヲ謝ス）

去夜於日出生陣合戰、被致粉骨被疵候之段、感悅之至候、彌被抽忠節候者喜入候、重々辛勞爲悅候、恐々謹言、（中嶋三河守ノ日出生合戰ノ功ヲ褒ス）

親繁（在判）

十二月十四日

中島三河守

五年、癸巳、親繁委國政於政親、自致仕剃髮、改名道淸、號心源、（政親ニ國政ヲ委ネ剃髮ス）

文明十四年十一月十四日

厚六郎ニ井田ノ地ヲ知行セシム

頃年、因厚六郎未知其系及名、領地事、道清屢授自筆書、照種惟秀等寄書、井田の内ひろせのとうゑもんせんちきやう十五くゝん、同ふるさゝのとうゑもんせんちきやう七くゝんふん、以上二十二くゝんふんの事、あつけおき候、ちきやうあるへく候、恐々謹言、

道清 在判

五月八日

あつの六郎殿

ゑよゝやうお人よとらせ、あしくもよくも所も（マヽ）、その身ふうんりううんよてこそ候へ、こなたのひまある物よて候、それりきりよて候、むはりゑくうけ給候、よてゑゝ山の内三字闕、あと二十くゝん事、ゑよゝやうよとりりへへきよしうけ給候、のそみのまゝ申はけ候、にあい〳〵よこそとらせへく候、もとちきやうも人のもちにてこそ、すきたる所にて候へ、以後いせんあくよはき候てうけ給候まゝ、このふを見へましく候、よく〳〵すいゝやうあるへく候、恐々謹言、端書、もとの甘くゝんもあゝさへおろれへく候、

さう 在判

七月廿四日

あつの六郎殿

さう

井田郷柴山名之内参拾貫分事、任御判之旨、打渡申候、可有御知行候、恐々謹言、

八月廿九日

照種 在判

惟秀 在判

厚六郎殿

世系

〔大友系圖〕

親著 次郎、従五位下、式部大輔、〇注略ス、

親繁 五郎、従四位下、豐後守、

法名心源道清、號心源寺、母千葉氏、自親隆一家相續、領豐後、筑後兩國幷豐前、筑前、肥前之内、文明十四壬寅年十一月十四日、於府内館逝去、

政親 慈照院義政將軍賜諱字、童名房丸、五郎、従四位下、左衛門大夫、豐前守、〇註略ス、

親勝 日田七郎、母千葉氏、

親治 童名小僧丸、次郎、従五位下、備前守、〇注略ス、

文明十四年十一月十四日

法名

明應二年ニ卒去ストノ說

政親幕畔ニ心源寺ヲ創建ス

親常（或親武、日田六郎、早世、母同政親、）

親載（七郎次郎、母同親勝、）

親照（戸次又五郎、）

女（嫁於伊豫國、）

女（嫁於薩摩國、）

〔志賀文書〕（○豐後）

心源寺殿心源清公（益淸）菴主

明應二年十一月十四日逝、

豐後守從五位上親繁

〔豐後國志〕（五佛寺　海部郡）　心源寺、在臼杵莊戸室村、豐府紀聞曰、明應二年十一月、豐後守侍從大友親繁卒、葬于臼杵戸室、世子豐前々司政親爲營一寺於其側、執香華供、因請東震正營禪師住焉、以法諡名寺、曰心源、

〔臼杵小鑑拾遺〕（四○豐後）　海藏寺　文明十四年、大友豐前々司政親公此寺を創め、要應玄綱座元を以て開山とし、羽衣山海藏寺と號す、（○中略）國志云、海藏寺在臼杵城下、文明十四年政親所創、大友親繁政親二墓在焉、

○幕府、親繁ヲ豐後守護ニ補スルコト、文安元年七月十九日ノ條ニ、親繁、志賀親家ノ高良山ノ戰功ヲ褒スルコト、寛正六年四月二十三日ノ條ニ、筑後守護ニ補セラルヽコト、同年七月三十日ノ條ニ、東軍ニ應ズルコト、應仁二年十月二十八日ノ條ニ、子政親ヲ豐前ニ遣シ、叛將城井秀房、長野行種等ヲ平ゲシムルコト、文明元年是春ノ條ニ、少貳賴忠ト共ニ、大內氏ノ地ヲ略スルコト、同年五月是月ノ條ニ、豐前、肥前、筑前ノ諸城攻陷ノ功ヲ、幕府ヨリ褒セラルヽコト、同年七月十二日ノ條ニ、細川勝元、島津立久ヲシテ、親繁ト共ニ、大內氏ノ分國長門、周防ヲ攻略セシムルコト、同年九月二十日ノ條ニ、義政、親繁ヲシテ大內敎幸ト謀リ、備後、安藝、周防ヲ攻略セシムルコト、同二年二月四日ノ條ニ、興福寺、龍華樹院領豐前糸田、田原ノ下地ヲ、代官長野宗雄ニ渡付センコトヲ、親繁ニ求ムルコト、同年三月十日ノ條ニ、親繁、筑後高良神社ニ社領同國三原西郷ノ內吹上名ヲ安堵セシムルコト、同三年十二月十一日ノ條ニ、使ヲ朝鮮ニ遣スコト、同八年是歲、同九年是歲、同十年是歲、同十一年是歲、同十二年是歲及ビ同十三年是歲ノ條ニ、兵ヲ筑後ニ出スコト、同十年十月三日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔花押彙纂〕カ之部　大友親繁

○上妻文書（筑後）
二月四日知行狀

○高良山座主坊文書（筑後）
文明三年十二月十一日安堵狀

十六日、辛、東常縁、宗祇ニ拾遺愚草五十八首ノ口傳ヲ授ク、

常縁病中ニ傳授ス

常縁再ビ定家ノ色紙ヲ郡上ノ山荘ヲ小倉山荘ニ擬ス

〔古今消息集〕七

又五十八首ノ歌口傳書タル奥ニ

右之口傳之三ノ五十八首、去るし付候事い、いろゝよ候へくとも、御一覽之後、早破あるへく候、聞をき候もひさしくなり候、殊病後よろつ夢のやうなる事こて候はゝ、あやまりもあるへく候、平臥あるら小僧よろゝせ候、御他見候ゝぬやうにとのみ入候、あなかしこ、

文明十四年十一月十六日　平常縁

宗祇老進之候

條々尋承候事、別紙よ去るし進入候、同拾遺愚草五十八首、これい師説口傳のみよ候間、書あらいし候事いろゝ存候へとも、任貴命候、御一覽之後者、可被燼候、

一黄門（勝原定家）色紙一枚御やくそくを不違、遙ニ被取寄候て給候、芳惠難算候、是者先度申つる常縁此以前久所持候を、賊よ被奪失却候、余念不止候事寄（奇）特ニ再領候、昔を存出候而一人感涙候、此程當郡之山中菴室をうまへ候て、乍憚小倉の山荘よなそらへ、老のすさみ所とせむやの有増よ候、返々過

文明十四年十一月十六日

分ニ候、

一綿子三把、歳暮祝儀として饋給候、貴老も御旅所にて、萬不如意さるへく候、かやうの御志不謂候、乍去連々故人情與申事御入候哉、殊當年寒氣徹骨候、禦臘衣ニ可用候、

一拾遺後撰集チ遺物トス

一拾遺後撰盡(愚)左(老カ)書寫之本、先年御所望候樣ニ候はる、是い奇特之事ニて候、證本をうつし留、校合度々の時を越す、をれ〻ゑ迄て本れことく直候て祕藏仕候、箱の内を御覽候へ、歌一首書はを、常緣〻一世い可隨身由存置候へとも、貴老へ與奪候、古今集傳受之時、門弟隨一と定申候上、其以來彌御執心無比類事候、當道世ま殘はるへきい、貴老ならていと存候間、常緣の形見と御覽可有候、一機前存寄、比與々々、

かきをてゝもうなた跡のもしゑ草ゑ〻袖まゑいなをいかゝらん

本之奥ま書付度候へとも、且者後見を惶、且ゑ此比一向筆不叶候て、此狀さへ小僧まかゝせ候、狼藉候、老後いなまゝはを、なみさをろく候て、毎事たしゑならを候、此比來參州切々御參會之由ニ候、定而連歌執心さるへく候、正吉も常緣同前ニく候、連歌こい成間敷候、但おもしろき事おゑえられ候間、折々可有御尋候、返々別紙御他見御用捨賴入候、穴賢々々、

極月十八日

勝仁親王御詠ヲ賜フ

十八日、癸丑、義尚、探題和歌會ヲ行フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三御湯殿上日記　十一月十八日、〇中略宮れ御ゑ

さへ、大納言(義尚)殿より御うたをされさいゑ、御をんゑれ御さしきより御さちありて、あそいしてゑいらきらるゝ、〇御連歌ノコト、正月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔常德院殿集〕十一月十八日、題をさくりて、人々ま歌よませ侍しま、海邊月、

をしほくむあゑれ袖しのうら波にやとすも心有明をつき

義尚ノ詠歌

十九日、甲寅、薩摩守護島津武久、禰寢又五郎ニ加冠シ、忠清ト稱セシム、

〔禰寢氏文書〕貞

「加冠之時島津陸奥守武久賜證書記左」(朱書)

「正文有之」(朱書)

加冠

建部忠清

文明十四年十一月十九日

禰寢又五郎殿

武久(花押)

二十一日、丙辰、雪ヲ賞シ給フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三御湯殿上日記　十一月廿一日、雪つもりて御庭とをたもしろし、大をけ殿御そうし（てカ）あいらさらるゝ、廿二日、雪まさぬりうひろ、けさをおもしろし、上らぬより二色御てうしひさけあいる、御ゆめを、大をけ殿、ゑん大をけ殿御あいり、

義政魚ヲ獻ズ

二十五日、庚申、勝仁親王御所ニ於テ、後花園天皇御冥福ノ爲ニ、連歌御會ヲ行ハセラル、

御人數

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二十三御湯殿上日記　十一月廿五日、なりさよより、御まれ二色あいる、宮れ御方よてしやうとのやうをんとやらんれ御をんら、久（善）院の事に御ささあ、御人を、中院（通秀）、侍從中納言（三條西實隆）、あをりこうち（基綱）、よしれと（西洞院時顯）い、そうりう、さうをく（五辻泰仲）（牡丹花肖柏）、よよ入てを、て、御りうしん御まやり、

御題ハ聖道淨土二門ニ被題、御發句ヲ肖柏ニ御談合アラセラル

〔塵芥記（十輪院内府記）〕○内閣記錄課所藏　十一月廿五日、自早旦參内、於宮御方御連歌、以聖道淨土二門被題、仍御人數清選、愚老、廿三西、姉、肖柏、宗巧等許也、御發句以予御談合肖柏、光明遍照之心四方よけさあま祓き雪の光りあ、彼國をうつをや池れひもりゝゝ等也、雪猶殊勝之由申入也、御脇、按察被申、入日（日想）を思ふ風のさむけを、第三余申入之、如渡得船夕川のわさりれ小舟やのりよて、此分也、入夜事終、無爲珍重々々、有御小漬、有御點心、

脇甘露寺親長　第三中院通秀

〔後法興院政家記〕七　十一月廿五日、庚申、晴、禁裏法文御張行云々、

〔新撰菟玖波集〕文明十四年十一月廿五日の連歌ゑ、

いつりさの空よもかよふありめよて

うへりうをある山はふしの祓　御製

御製

二十七日、壬戌、春日若宮祭ヲ停メ、尋デ、之ヲ行フ、

〔大乘院寺社雜事記〕八十一　六月朔日、大雨下、

一別會五師所流鏑馬定也、學侶分五師沙汰衆以下會合、一獻等在之云々、

流鏑馬定

一衆中集會於沙汰衆竹坊所在之、田樂頭著之、兩所遣書狀云々、尊敎院、慈尊院、

田樂頭

〔大乘院寺社雜事記〕八十三　十月六日、

一衆中蜂起、田樂頭事云々、於路次多聞院坊主下臈分也、見塔院山村ニ對テ過言云々、仕丁中綱大湯屋門邊ニ候、同過言以外事也、仍披（被）官人住屋進發、三ヶ年罪科云々、

一中綱參申、蜂起也、甘根衆可被出之由、寺務幷門跡ニ申入之、返事、於寺務者、近來無此儀、門跡返事、尤可出事也、但近來ハ年始出之、且可有故實之由仰了、

中川莊願主用意スルヲ得ズシテ延引

九日、

一英照得業來、色々物語、英經得業田樂頭領狀云々、

十一月十七日、

一若宮祭禮、今月廿七日ハ不可有、中川庄願主仁體不能用意上ハ、精進事不始之、三七日精進最下也、是併國中合戰無一通故也、然者可期何日哉、珍事々々、

廿四日、

一祐松相語、仲(申)川庄流鏑馬頭草川之辻子事、去文明九年歟相催、理運之間了、殊更一段自越智方可合力旨申之、乍領狀不懃之、及闕如之間、自寺門被發向之在所ニ、被振神寶了、一段及嚴密之御沙汰之處、無左右當年被相催事且如何、寺門儀不思議之旨、自越智申入之云々、尤申狀也、於故在之儀者、無故理運體不請取之時ハ、其身一期之間ハ不懃之、及喧文而各不叶體ハ申之事也、如今者、爲自今以後、國中面々難義也云々、仍來廿七日先以在之、然者來月も如何、

十二月十七日ニ祭禮延引

廿五日、庚申、

一衆中蜂起、多聞院坊主免除之云々、吉田來、祭禮不可有之、越智申入條尤也、文明十年別會五師學賢房之時、種々自學侶承申承事色事也云々、例之學賢表裏故也、於于今者學侶領狀上者、箸尾方不可承引、所詮祭禮不可有之、

翌年三月十七日ニ祭禮延引

廿八日、

一祭禮事、來月十七日可有之歟云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四八十　文明十五年二月廿四日、

一興弘五師律師也、來、相語若宮祭禮來月十七日必定、奉行事前別會了、弘可奉行之云々、五師中披露無相違、又學侶披露、是又無相違也、永享七年以來ハ延引之祭禮、付當別會了、其以前ハ其年ニ相當別會雖爲何時奉行之、然ノ間今度被許可之歟、於以後者、延引分ハ可爲當別會之由一決了、了弘事ハ先年別會之時不奉行之、去年又如此、且神慮迷惑歟、今度色々致計略、御願鏑流馬等願主人申付之、左樣且忠節ニ被許可云々、誠以別段事也、永享七

年以來掟法也、其以前ハ當別會、前別會不同也、何日も有先規故也云々、

三月九日、夜雨下、

一中童子裝束帶衣强幷大童子强二具、尊藝得業、昨日申出之、中童子裝束帶衣一、

今日堯藝得業申出之、馬長用也、

大乘院尋尊助成料チ田樂頭ニ遣ス

十二日、

一田樂頭屋寶生院寶乘擬講方ヘ、助成返報二百疋遣之由、仰遣奘舜寺主方了、

十六日、夕方雨下、

一田樂頭屋兩所裝束給之、其儀如例、應仁元年三月十七日祭禮始行之、一天

下大亂最初年也、

十七日、曉雨下、風、日出以後天晴、

一祭禮行烈(列)次第二通中綱持參、奉行了弘五師也、去年別會也、一通ハ寺務御

分也、今日出仕五師了弘、當年別會專心、

三綱寺主幷舜、都維那宣舜、

田樂頭英慶律師、實乘擬講、

田樂頭英慶實乘

馬長頭融算得業、俊藝、、善寛、、尊藝、、堯藝、、、

一番流鏑馬事長門也、可爲草川辻子之所、不叶子細在之、仍俄ニ狹川一黨

被勸之、

狹川一黨流鏑馬ヲ勸ム

一宣舜都維那權寺主之款狀上之了、則所司田知行之、今日競馬之馬百姓方

ニ召之了云々、款狀上之者、則知行分無相違條先例云々、三反分請料三斗

同可有之云々、

大和觀世死シ京觀世ノ代ニ世ルル

十八日、

一後日猿樂如例、兩頭酒肴等在之、十郎觀世去月入滅之間座破了、仍京觀世

今度神事參向云々、

〔大乘院日記目錄〕三　文明十五年三月十七日、同(春日)若宮祭禮、田樂頭英慶律

師、實乘擬講、

馬長頭融算、俊藝、善寛、尊藝、堯藝、

馬長頭

祭禮奉行五師去年別會了弘也、行烈(列)次第進之、

祭禮奉行

〔多聞院日記〕二　文明十五年二月十九日、於東室西妻、五師中會合在之、子

細者、去年若宮祭禮于今無之、是併當國越智與筒井以下確執、南北之鬪諍

故、長川一番流鏑馬願主體無之、或逐電、或無力故也、去年夏比、牢人之內筒

越智家榮筒井順尊等ノ鬪爭ニ依リ延引ス

了弘別會ヲ辭シ專心之ニ代ル

井、十市、箸尾、寶來以下少々雖被出張、越智已下、以人勢罷向彼等館、及只今マテ對陣致合戰之間、願主體旁以無其體、三夏草川辻之事、先年越智與長川願主相催畢、箸尾令沒落之間、先年彼一跡令知行、兩職人令存知間、越智被任理運、辻方申候處、及難澁不致其沙汰、是偏乍號無力牢人與同也、私曲故歟、依兩職人之訴訟、於辻者寺門而已發向、於一跡者越智致知行了、然ニ今度箸尾出張之後、又辻方ニ箸尾而相催之處、乍領狀、奈良中出頭敵方之中恐怖之由申辭之間、兩陣ニ寺門而被申付神事所役仁、不可成綺之由被命之間、全以不可存緩怠之趣、內外淵底御請申者也、然而猶以恐怖之由令言上、是只依計會無力如此令申候者歟、遂ニ文明十四年分八、年中始行延引畢、

一去年文明十四年分別會之體、迄今日源舜(了弘)房五師也、今日被辭之、圓實(專心)房五師可爲別會職者也、隨而源舜房五師披露云、

祭禮之事、去年分令延引之時者、雖爲去年分、當別會之體可致奉行之由、長顯房別會永享七年廻請裏書分明也、但其已前者、去年之別會令奉行事無豫義、則其時之裏書ニモ、其段令分別被書置者也、然而今度別會初度之間、別致奉行度之間、當年始行奉行之事、可預御許可、若然者願主之體之事、□(强力)分致合力、別而引立可致計略之由、被披露、則既內々狹川之一族福岡之事、色々被相誘之處、彼返事幷狹川返事ニ、願主之事爲大儀之間、不日難成立、但過半可預御引立之由承候間、然者源舜房五師預御合力、被致奉行者、可勤仕之由、返事及度々、則彼書狀共被出畢、所詮於致奉行者、以合力願主事可致計略者也、若不然者別段內外劬勞之事者可被略云々、仍五師中評定曰、上古ハ先別會奉行勿論也、然而依煩不便故、當別會可有奉行ト見タリ、下地ハ不違事歟、然而永享七年之掟分明之上者、徒不可改之、但於今度者、別段而不可混余者歟、既願主之體闕如之間、始行不可得也、然處別而以奉行之志、願主體被引立勤仕之事者、不可及混亂、於後年モ、如今者可爲同前歟、源舜房五師奉行不可有子細、但圓實房五師堅不及執心者、永享七年之掟之上者、不可及是非之由評定處、圓實房五師不可有子細之由、源舜房五師方ヘ被申候上者、於五師中者被許可畢、但此趣學侶之衆儀可爲肝要之由、自五師衆牒送之處、可任五師中儀旨、學侶返答之間、源舜房五師可有奉行旨一決了、參會出仕之體、學延房律師、深賢房已講、宗藝律師、

祭禮ハ十四年分タルニ依リ了弘奉行ヲ勤ム

惡黨足輕等行人ヲ劫掠スル柳本等ヲシテ警衛路次セシム

田樂頭裝束ニ就キテノ紛爭

祭禮始行

一祭禮三月十七日可有始行之由、一揆畢、

三月十日、近日依當國牢人出張、惡黨等竝兩陣足輕、於路次奪取甲乙人之衣裳等之間、來十七日、祭禮始行之前後、柳本、岸田、福智堂以下、於路次通路防禦被申付之間、自今日沙汰番畢、則仕丁丸相副國民等畢、

十六日、去年分若宮祭禮延引、只今始行之間、今日田樂頭裝束(裝下同ジ)給在之、淨光房律師、堯光房擬講兩頭屋、隨而堯光房擬講方裝束聊袖短之由、法師原歎申候間、俄被副之畢、次留裝束短之由歎申、則可被調直之由、被用意處、就衆中被訴訟之間、自衆中以書狀頭人方ヘ被申候、是以外次第也、就裝束之善惡、致外樣及訴訟之條慮外也、又學侶以下ニ於訴訟者、可爲順儀歟、被申衆中之段不可然、衆中又外樣而以書狀被申條、言語道斷也、大方頭役相催一段者可然、如此衆中與頭屋之事令自專之條、以外新義也、如今者每々衆中可相計歟、且爲以後一圓衆中與頭坊之事可相計間、不可然之上者、非儀之申狀不可承引之由、頭人並同類中腹立、則不可有承引之由被申候間、無力先不及調直給之畢、內々可有歎事之處、衆中而申候間、別而不被及承引者也、

十七日、祭禮始行、源舜房五師奉行之、別而願主人引立被申、又路次之違亂敵自方外樣之下知之外ニ、內外源舜房五師劬勞也、今度祭禮無爲始行、併源公願主之體已下合力計略、故無爲之間、別而可有奉行之由、學侶併五師中被許可奉行了、源公初門之間、奉行之事依有其望、殊如此計略之間、被許可畢、永享七年長顯房五師別會之時、行烈(列)迴請裏書ニ、去年分延引之時ハ、當年別會可有奉行之由、一段依五師評定被書載之間、似有裏書、然而於今度被奉行被許可者、願主等涯分可致計略之由、兼而五師中ニ被申合、則被計略上者、不可成後例者也、當年出仕之體、圓實房五師、(當年之別會體、)源舜房五師、(去年別會體、)

隨兵ニ就キテノ議

十七日、隨兵之內、長谷川法貴寺之住在殿(寺)可乘、散在五條野方々隨兵云々、彼體者、寺門被處寺敵罪科之體之間、可相支之由、曩頭評定、則自大鳥居御旅所、別會方ヘ被牒送之間、一揆內衆中方ヘ此趣被申含畢、然處自五條野方歎披露云、雖及當座恥辱、於僻事者無力、然ニ在之事、御寺門御罪科已前者、別家只今隨兵之體者、在之親也、更非御寺敵體、親子各別之由歎申ニ、猶以及南座不分明之間、兼而別家又御寺門非寺敵之體之由、見所捧告文、屬無爲畢、

一當年願主體長川方、狹川ニ、福岡散在方、五條野同一族棗原、

〔春日記錄〕四　（文明十五年）三月十二日、晴、

一就若宮祭治定之儀、彼神主廻文在之、來十七日必定候趣也、十六日、

神主廻文

一今曉寅一點、若宮殿出御、（春日祭以前也、）第三度之案內之後、社司氏人參拜屋座圓座之、社司ハ前ニ座候、氏人ハ座不定、居カヲ也、神人等捧御榊石壇ノ上ニ圍之、出御之時、伶人奏亂聲、（榊木ノ邊、）御出之路次ハ奏慶雲樂、（師和笛、時就笛、二人付音樂奏之、此段有例歟、）先松明二行前行、（神人ト御ホス、）御體、次社家供奉之、次樂所、次衆徒、著御旅殿、於殿內御祓遂之、（彼神主祐勝沙汰也、）御體安置之後、奉幣幷有御神樂云々、兩氏社司氏人ハ不能著床、歸參社頭、聽而春日祭遂行也、若宮神主幷副氏人經賴一人殘之、（若宮神主語テ置候故也、）

神輿若宮殿出御

一現參供奉社司　祐松　祐遠　延俊　祐梁　祐辰　祐勝（御體之俊人也、）

供奉人

一大中臣氏人　宗興　師和　家統　時殖　經賴　師順　時就

一中臣氏人　祐憶　延信　祐嗣

一大中臣氏人計供奉也、社司不參之、（自由ナリ、）

祭事ノ次第

一畫出仕セヌ體モ、曉御共申スヲハ著到ニ付也、

一今夜雨下、但出御アレハ止テ、馬場殿著御マテワ一向不降也、著御已後又降リ、神威揭焉、不始于今ト云トモ、返々殊勝也、

一巳刻社家出仕之、馬場殿東床（左）大中臣、西床（右）中臣、

一左床　神主正四位下時憲朝臣

權神主正五位下師種　新權神主從四位下師淳朝臣（各束帶、）

氏人

中務大輔家興　宮內大輔師和　左京亮家統　大膳亮經賴　刑部少輔師順　民部少輔時就（各狩衣、）

右床　中臣

正預從三位祐仲卿　權預從五位下祐澤　權預正五位下祐松　加任權預從五位上祐彌　新預從五位下祐梁（各束帶、）

氏人

越中守祐憶　散位祐嗣（各狩衣、）

若宮神主從五位上祐勝、旅殿御階下座之、

拜殿巫女庭上之床著座之、舞有之、渡物時退出之、

渡物次第

先白杖幷御幣、走衆仕丁捧之、問中門戸參之、

次日使（束帶）、次舞人　次巫女　次十列、乘馬、於中門口篳篥吹也、

次細男　次日使參御前、東ノ大皷ノ邊ニ之、

次巫女著座、卿御子、東サキニ著座、後ニ立拜殿西、後ニ著座サキニタツ、各ヒトヘムシロチシク、

次猿樂四座二村渡之、　次日使奉幣、祐勝直請取之、祝申之、

次打敷絹敷之、若宮神主役也、其一階ノ右ニ立、　次社司氏人左右立之、

次轉供、御階ノ左方、神主時憲、權預祐彌、新預祐辰、氏人家興、師和、家統、經賴、師順、時就、御階ノ右方、若宮神主祐勝、權預祐澤、權預祐松、新預祐樂、氏人祐億、祐嗣、

左右樂屋奏十天樂　次十列乘馬

十天樂

次東舞（陪從幷伶人、於東大皷之前付之、歌物有、笏拍子拍之、）

東舞

次馬帳（長參御前、三返廻了、）

競馬

次流鏑馬　隨兵　次振鉾

流鏑馬振鉾

次四舞（賀殿、）

四舞

猿樂ノ舞

次細男（參御前、）

田樂新座田樂

次猿樂之舞

次本座田樂、東、　次新座田樂、西、

次社家退出、　次競馬遂之、

次陵王納曾利　次流鏑馬射之、

次社家又出仕（但近來ハ猶日暮ニ參之、）　次散手貴德、

次立合　次相撲（庭火燒之、庭中東西、）　次扳頭落高、

相撲

扳頭之舞之時分、社家出仕之、

還幸

戌刻還幸（御簾之役、未權官當參之內祐辰、）

行列

行列

先松明二行（南北神人役、松明木守沙汰之、）　次散所本社神人等　次御體　次社家供奉　次樂所（奏還城樂、近來大皷ヲ不樂シテ皷ヲ、ウツナリ、師和、時就、同付也、）　次衆徒

各社司氏人如曉之時著座拜屋、事終還之、

小祭

十八日、晴、

一小祭有之、當家御榊奉祝之、仍神人等來之、白米一升、酒、幷鳥目十疋下行、佳例也、

〔興福寺年代記〕癸卯　文明十五、春日若宮祭禮三月十七日、去年延引故也、
山城般舟三昧院ニ施餓鬼ヲ行ハセラル、

安禪寺宮觀心尼參詣セラル

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三　御湯殿上日記　十一月廿七日、○中略々ふいぬ
しみれ御寺よて、きゝたあ、あんきん寺殿御きうゝうゐ御ゐいり、大しや
う寺殿御きやうに五百疋ゝひて、これも御ゐいり、

〔塵芥記〕十輪院内府記○内閣記錄課所藏　十一月廿七日、參安禪寺殿御燒香、方丈御參伏見
云々、

〔親長卿記〕十三　十一月廿七日、晴、參伏見般舟三昧院、近年御新造也、○地引事始ノコト、十一
年八月四日ノ條ニ見ユ、爲御燒香也、

成氏那須資持ト合議ス

義政、足利成氏ノ請ヲ納レテ、之ト和シ、成氏ヲシテ、同政知ニ、伊豆ヲ讓
ラシム、

〔那須文書〕○下野　成氏（花押）
就都鄙御合體、可勵忠節由、自京都被成御敎書候、爲此度屬御本意候樣、行義
等能々可相談候、謹言、
壬七月朔日

〔喜連川文書〕一　那須越後守（資持）殿
和睦事、連々懇望之旨、上杉民部大輔房定致注進之間、不可有子細候、次政知
事、無不足之樣申合候之由、同房定申候、可然候、仍狀如件、
十一月廿七日　（足利義政）（花押）
左兵衞佐（成氏）殿

政知身上ニ不足ナカラシメバ和セム

就成氏和睦之儀、注進到來候、左兵衞（政知）督身上於無不足者、可令同心候、可然樣
可有入魂候也、
十一月廿七日　（足利義政）（花押）
上杉民部大輔とのへ

伊勢貞宗書狀成氏政知ニ料所ヲ不足ナクコトヲ償フコトヲ約ス

就都鄙御和睦之儀、豆州（政知）樣御事、從古河（成氏）樣被進御料所、無御不足之樣、可被償
申之由候、目出候、此旨慥被申達候者、尤可然存候、恐々謹言、
十一月廿七日　伊勢守貞宗（花押）

謹上　上杉民部大輔殿（諸案文所收貞宗書狀、同文ニ依リ略ス、）

〔吉川本上杉家譜〕

就都鄙御和睦之儀、御注進之旨、致披露候處、左兵衛督事、御身上無不足者、可同心之由、被成御内書候、可然樣計行候者簡要候、恐々謹言、

細川武藏守政元

十一月廿七日

上杉民部大輔殿

畠山政長書狀

都鄙御合體之事、依執御申、先被成御内書候、御面目之至候、彌廻調比（法カ）勵無爲候者、天下靜謐之條、御忠益（節カ）不可過之候、恐々謹言、

畠山左衛門督政長

十一月廿七日

上杉民部大輔殿

〔諸狀案文〕（○内閣記錄課所藏）

一就御和睦之儀、豆州樣御事、被進上伊豆國、可被刷申之旨、四郎殿へ被仰定候之由、御注進之通、致披露候、殊自古河樣別而可被進御料所之由候、旁以可然之旨上意候、仍御申條々、悉以事行候、御面目之至候、

義政内書

（十一月二十七日）同日

謹上　上杉民部大輔殿

〔吉川本上杉家譜〕

成氏懇望事、以前具申下候處、注進候趣、委細得其意候歟、仍任執申之旨、不可有子細之由申遣候、次太刀一振、馬一疋、（栗毛、印雀目結、）幷二万匹（疋）到來、令喜悅候也、

（文明十二）十一月廿七日

足利義政御判

（伊勢貞宗）同前

上杉民部大輔（房定）とのへ

〔諸狀案文〕（○内閣記錄課所藏）

一就關東御和睦之儀、爲御内書之御禮、御太刀一腰、御馬一疋、（栗毛、印雀目結、）烏目貳万疋御進上之旨、令披露候了、仍又被成下御内書候、尤以目出候、御祝著奉察候、

十一月廿七日

伊〜〜

房定内書ノ禮トシテ劔馬ヲ義政ニ贈ル

謹上　上杉民部大輔殿

義政夫人日野氏ニ料足ヲ贈

一就關東御和睦之儀、上樣へ烏目万疋御進上之旨、〜〜

義尚ニ劔馬ヲ贈ル

同前　伊〻〻

一就同前〻〻、儀、自大御所樣、爲被成御內書之御禮、御所樣ゟ御太刀一腰、御馬一疋、（栗毛、印、雀目結、）鳥目万疋御進上之旨、令披露候了、〻〻

同日　兵〻〻陸

同前

眞宗ニ太刀等ヲ贈ル

一就同前〻〻、御內書之御禮御申旨、披露之次第、以別帋令申候、仍御太刀一腰、鳥目万疋拜領、過分之至、祝著千万候、御禮追而一段可申入候、

同前　伊〻〻

〔異本上杉家譜〕（○上杉家記十二所收）

成氏房定ノ奔走ヲ謝ス

不挿野心之段、多年京都雖言上候、不達高聞候處、以申沙汰入眼感悅之至候、仍政知御事、可刷申旨被仰下候歟、因之圓通寺、次慈顯（月輪院）藏主巨細申候者、對談覺悟之趣、重被申下者可然、猶々御和睦之儀被申達候、誠悅入候、謹言、

文明十五年六月十一日　成氏

使僧越後圓通寺岳英ヲ建長寺住持ト爲ス

五山ノ詩僧岳英ノ榮遇ヲ賀ス

南禪寺住持德種

宗殊

〔文明壬寅岳英西堂送別詩〕（○山城）

上杉民部大輔殿

海東八州都督、矛楯于王室者、有歲于此矣、後越太守調亭（啓）歸順、今茲冬詔許之勅初降也、朝野歡呼、於是使節圓通岳英禪老轉位名藍、榮遇陪（啓）常、余聞斯盛美、不勝忻躍、聊寄呈山詩一篇、以奉餞行色云、笑納惟幸、

湘山洛阜曷爭高、四海風和不起濤、親拜天書於宮掖、雪殘鵁鶄暎黃袍、

岩文明壬寅（十四年）蜡月初吉　南禪　玉莊叟德種書于龍淵室（印文玉莊）（印文德種）

圓通主席岳英西堂、遂相洛和平之望、欲歸越國矣、樞府有建長之鈞命、吾山諸老贈行以詩、老拙亦備員云、

法旆三年停洛涯、新領鈞帖甚光華、扶桑國裏太平日、和會二家爲一家、

前南禪享年八十九勝幢叟拜（印文勝幢）（印文宗殊）

越之後州圓通主岳英禪師者、東藩幕府之禪將也、東諸侯相謀、以任皇華之職、